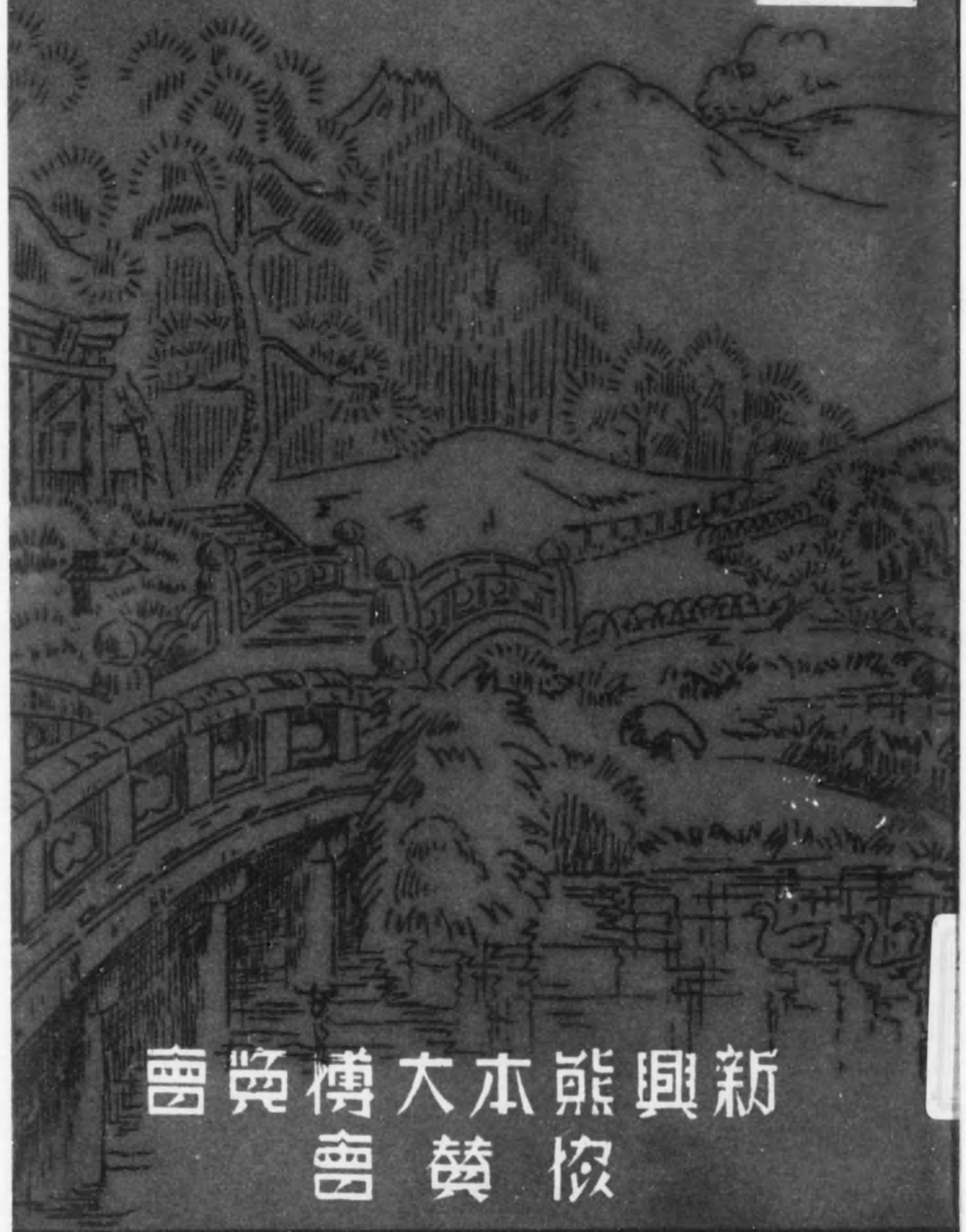
ともよく

364
550

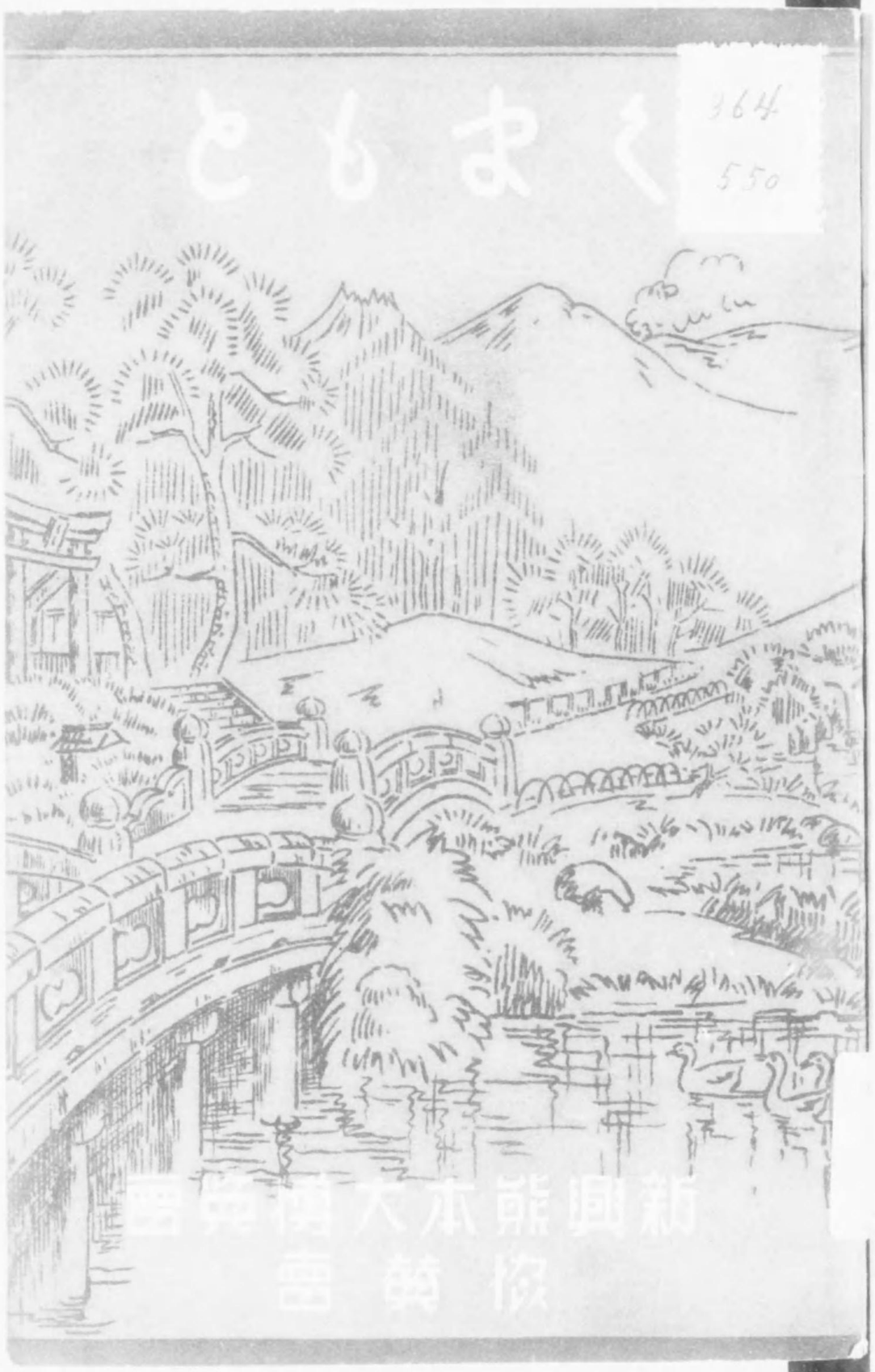


新興熊本大博覽會
俊英會

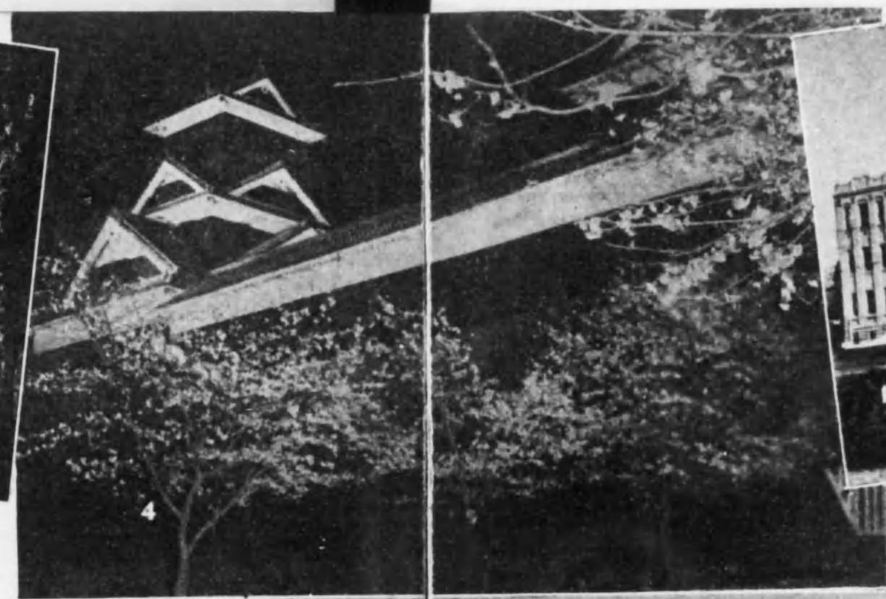
始

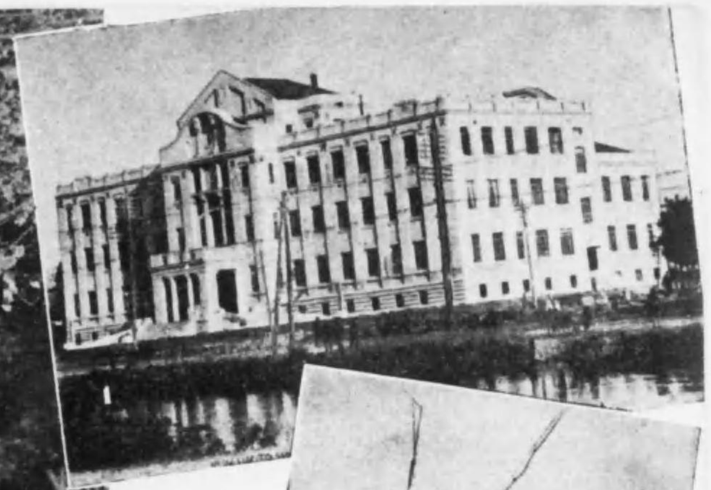
うぶもり

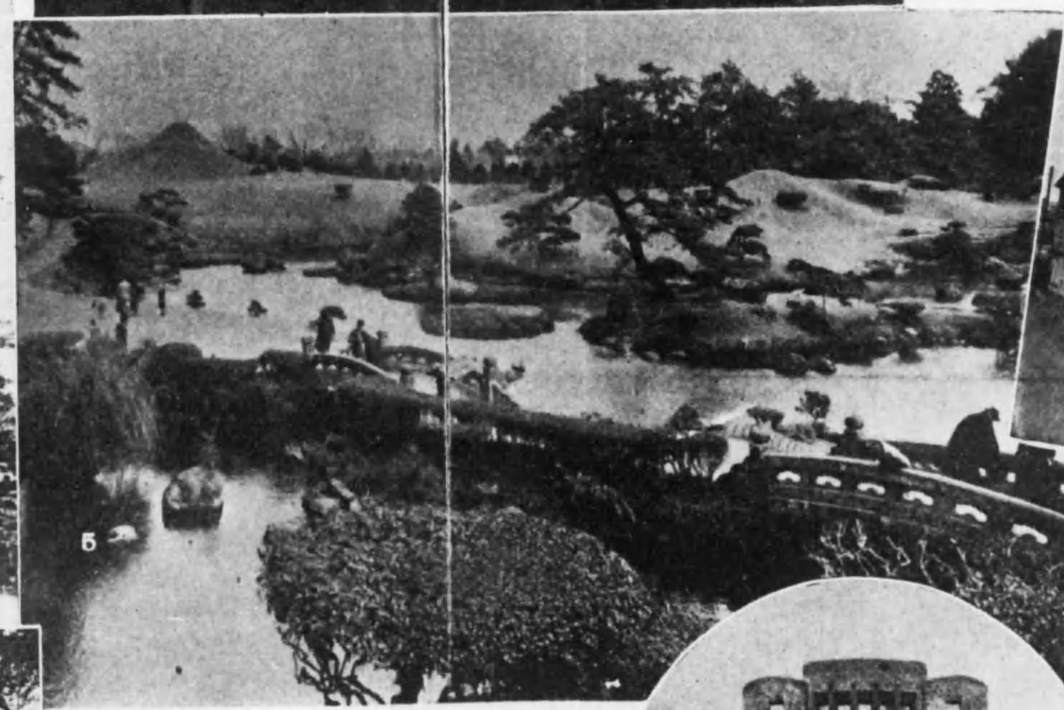
364
550

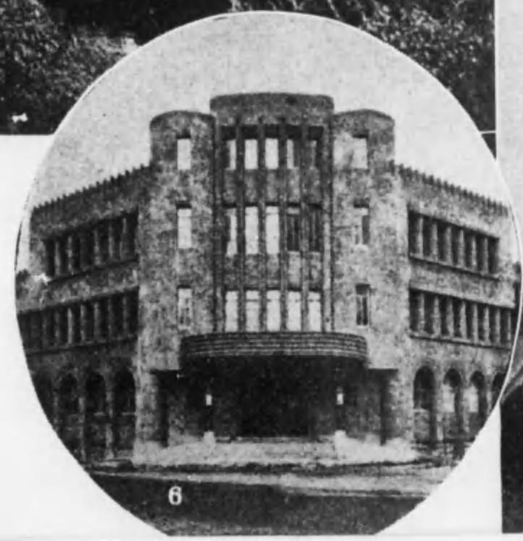


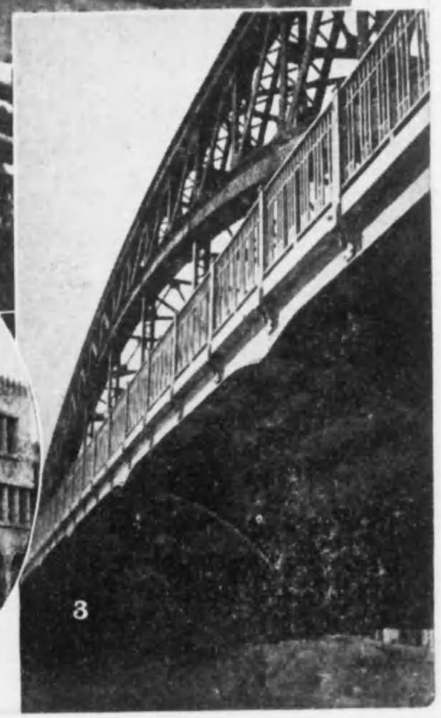
雪兎博士本熊興新
雪兎博士











寫眞說明

1 熊本市役所
2 熊本中央放送局
3 長六橋
4 熊本城の夜景
5 水前寺
6 市公會堂
7 第六師團司令部
8 熊本商工會議所
9 新市街花畑公園

歩 234
568

序

新興熊本大博覧會は市民と縣民と出品關係各方面の一致協力によりて此處に目出度く開會の運びに至つたことは慶祝に堪へない。

聊々我が新興博が非常時日本の實情に照し、我が熊本の全貌を發揮するに得難き好機であり、この得難き好機は、期せずして市民と市當局の一致となり、此處に空前の博覧會を開催するに至つたのは、洵に感謝措く能はざるものがある。實にこの擧たるや、天の時、地の利、人の和を得たるものといふべく、只この上は博覧會開設の目的を達成し、有終の美を飾ることを念とすべきである。

今や、新興博の陣容すでに成り、開會の運びとなつた。この秋にあたり、豫ねて編纂中の熊本案内の稿又成る。本書を一覧するに名勝史蹟は勿論、縣市産業の實狀に、肥後先哲の風貌を知るを得て、欣快の情禁ずる能はざるものがある。蓋し縣市の紹介これによつて完しといふべし。

新興熊本大博覧會長

熊本市長　山隈康

序

新興熊本大博覽會を開催し、新興潑剌たる熊本の隆興を物語り、雄縣熊本の產業、文化の振興を圖るに至りたるは、洵に慶びに堪へない。

由來、我が熊本は文教尙武、農產國として、天下にその名を謳はれてゐるが、更に近年にいたり、產業に、文化に、觀光に、經濟に總ゆる方面に擴充し來り、所謂近代的明粧の一大都市を形成し著しく面目を一新した。是れ畢竟縣市民の熱と力の結晶であり、脈々たる更生の叫びでなくて何であらう。

本會はこの本市空前の新興博を楔機として、縣市の實狀を宣傳すべく熊本案內の刊行を計畫し、曩に委員を設けこれが實務に當らしめた。

これ新興熊本を廣く語らんとするに外ならない。今や梓成る。その內容を見るに、名勝舊蹟、產業、教育、經濟の一班を明らかにし、更らに進んでは肥後勤王先哲の偉蹟に及ぶ。文筆端麗、取材的確、縣市の全貌を紹介してあます所がない。蓋し本會の微意を達したりといふべし。

新興熊本大博覽會協贊會長
熊本商工會議所會頭　中山造酒夫

目次

熊本縣の概要……一
肥後の沿革……三
熊本市の歷史と現在の實狀……六
史上から見た熊本……六
加藤公時代の熊本……七
明治以後の熊本……八
神風連・西南役……九
教育・產業・觀光都市としての熊本……一〇
熊本城を訪ねて……一三
熊本城……熊本城の特賞……行幸坂……宇土櫓
くらがり門跡……師團司令部……午砲臺……天守閣阯……敎導學校……百間石垣……藤崎臺……千葉城阯……熊本城稻荷神社
本妙寺……二六
清正公の銅像……二八
加藤神社……山伏塚……二九
藤崎八旛宮……吉田司家……三〇
新市街……三一
立田山……三三
配水池……八景水谷……三四
武藏塚……三五
櫻山祠堂……三六
水前寺……三七
古今傳授の間……出水神社……三八
動物園……三九
畫津湖……四〇
託摩ヶ原古戰場……四一
國分寺阯……四二
金峯山……四三
岩戸觀音……吉松稻荷……四四
花岡山……阿蘇殿松……四五
陸軍墓地……鐘掛松……花岡山バンド……四六
細川邸……四七
成道寺と天福寺……石神山……四八
北岡神社……四九
清正公母堂の廟……東雲庭園……五〇

旦過の瀬の戰……五一
檜垣姫……五二
二本木國府の阯……代繼神社……五三
飽託郡……五四
川尻町……大慈禪寺……寒巖禪師……百貫石港
河内蜜柑……高橋稻荷神社
宇土郡……五七
宇土町……宇土城阯……住吉海岸……長濱海水
浴場……赤瀬鑛泉……金桁鑛泉……三角港……
不知火
玉名郡……六一
高瀬町……繁根木八幡宮……廣福寺……立願寺
溫泉……谷村計介の墓……小天蜜柑……南關町
下村の蘇鐵……長洲町……荒尾町……萬田・四
ッ山炭坑……木葉猿
鹿本郡……六五
山鹿町……山鹿溫泉……山鹿燈籠……チブサン
の古墳……相良觀音……不動岩……鍋田の横穴
群……日輪寺……植木町……田原坂
菊池郡……六九
隈府町……隈府城阯……菊池神社……懷良親王
の宮阯……正觀寺……月見殿の阯……菊池水源
……水島蠏の古戰場……立野火口瀨……大津町
阿蘇郡……七三
阿蘇山……阿蘇登山……西巖殿寺……下野狩場
の舊跡……宮地町……阿蘇神社……大觀峰……
數鹿流瀧
上益城郡……七九
御船町……甲佐町……濱町……通潤橋……內大
臣山
下益城郡……八二
松橋町……雁回山……木原不動尊……三寶禪寺
竹崎季長の墓……隈庄町……拂川鍾乳洞
八代郡……八五
八代町……八代城阯……八代宮……詭城阯……
征西將軍の御陵……釋迦院……五家莊……鏡町
葦北郡……九一
水俣町……百濟木地藏……日奈久溫泉……三太
郎峠……佐敷町……君ガ淵
球磨郡……九四

人吉町……人吉城阯……青井神社……大村横穴
球磨川下ッ……神瀨の鍾乳洞……生善院……市
房山
天草郡……九九
本渡町……牛深町……崎津……大矢野島……談
合島……富岡町……天草洋……志岐城阯……龍
ケ岳
肥後先哲勤王家列傳……一〇四
肥後藩時代の學界……一〇四
時習館、再春館について……一〇五
秋山玉山……一〇六
藪孤山……一〇六
堀勝名……一〇七
長瀨眞幸……一〇七
高本紫溟……一〇八
片岡朱陵……一〇九
富田大鳳……一〇九
中島廣足……一一〇
大野退野……一一〇
林櫻園……一一一
木下犀潭……一一二
水足博泉……一一二
荻角兵衛……一一三
井澤蟠龍……一一三
宮部鼎藏……一一四
横井小楠……一一五
米田是容……一一六
轟木武兵衛……一一七
太田黑伴雄……一一七
加屋霽堅……一一八
池邊吉十郎……一一九
河上彦齊……一二〇
佐々友房……一二〇
古莊嘉門……一二一
山田武甫……一二二
元田永孚……一二三
井上毅……一二四
米田虎雄……一二五
竹添井々……一二六
熊本縣の產業……一二七

縣産業の大勢……一三九
農業……養蠶……牧畜……水産……林業……鑛業……工業
熊本市の産業
工業……一三三
飲食料品……一三四
染織及繊維工業品……一三六
化學工業品……一三八
雜工業……一四一
特種工業……一四一
工業機關……一四三
商業……一四三
商業機關……一四四
金融機關……一四五
銀行……一四六
信用組合……一四六
無盡會社及貯金會社……一四六
生命保險……一四七
會社……一四八
産業組合……一四八
工業組合・商業組合……一四八
同業組合……一四九
農業……一五三
養蠶業……一五三
桑苗及蠶種……一五四
製絲……一五五
官衙・學校・軍隊都市の熊本……一五五
官公署……一五七
新聞……一五七
諸學校……一五九
小學校……一六〇
補習學校……一六〇
幼稚園……一六一
附錄……一六一
市内遊覽コース……熊本土産品……娯樂機關……旅館宿泊料……團体宿泊料……觀覽時間及料金……電車・バス・タクシーの料金……民謠、肥後鄉句、熊本なまり

熊本縣の概要

一

九州の中央に位する熊本縣は、西日本の雄縣として君臨するのみでなく、古來文敎尙武、農産縣として知られ、更らに近年に至りては産業に、文化に、觀光に、經濟に、あらゆる方面に擴充し、今や新興潑剌たる巨縣として堂々の陣容を示すに至つた。これ熊本當然の收穫として、欣快の念禁ずる能はざるものがある。

今こゝに熊本縣の實情をみるに、北は福岡縣に堺し、東は大分、宮崎兩縣に接し、南は鹿兒島縣に連つてゐる。西は有明海及び八代海に臨み、天草群島をへだてゝ長崎縣と呼應してゐる。

廣袤東西三十六里、南北三十二里、總面積四百八十二方里に及び、一市十二郡、戸數二十五万、人口百四十五万を擁してゐる。

二

縣の北部一帶は、筑紫山脈に屬する小岱山（せうたいざん）、三國岳、鞍岳、八方ケ岳等の各峯が聳え、中部は阿蘇火山脈起伏し、宇土半島と天草群島を形成してゐる。

脈中の主峯阿蘇山は、世界第一の火口を有し、さらに國立公園として中外に偉容を示すに至つた。

南部はすなはち九州山脈蜿蜒として擴がつてゐる。内大臣山、市房山、白髮岳等の高峯、東北より西南に連亘して、所謂南九州の分水嶺をなしてゐる。從つて河流は悉く西流して、有明海、及び八代海に注いでゐる。球磨川、白川、綠川、菊池川がそれである。

球磨川は日本三急流の一つである。この四大川流域が、肥後平野で肥後米の産地である。

三

氣候は南九州の濕潤で海洋的であるのに比し、熊本縣は大陸的で寒暑の差が著しい。しかし著しいといつても元來九州は溫暖の地だから押して知るべしだ。

風速度は年平均一、七米乃至二米位で毎年殆ど大差がない。それは九州でも珍らしい現象で特色の一つである。

六七月の降雨期は比較的長くて多い、それと反對に八月の日照時が多いので稻作にとつては非常に便利な現象、肥後米の質がよいのもこの爲めである。

産業と地勢が兩翼の如く關係することは言ふまでもない。東部の山岳地方と西部の平野地方とは自ら異つてゐる。

山岳部の阿蘇方面は牧畜が盛んに行はれ、内大臣から球磨方面の九州山脈一帶は森林王國といはれる

だけ良材を産出してゐる。河川流域は、例によつて農産物で氣を吐いてゐる。

四

天草海岸、八代海、有明海の一帶は鰡、鯛、烏賊など多く從つて漁業が盛んである。殊に天草の鰕、球磨川の鮎は生きながら東京方面に送つてゐるが好評を博してゐる。

近時文化の發達と共に電氣の需要が多くなつて、大工業も小工業も、都會も農村も電化萬能の時代を現出して來た。河川に惠ぐまれるため各地に水力電氣が勃興し、熊本縣の工業界は近時著しく發達しつゝある。

交通網方面では、鹿兒島本線を基幹に三角線、豐肥線、湯前線、高森線などの國鐵に、熊延鐵道、川尻、百貫電車に、菊池軌道などあり、加ふるに最近自動車の發達と共に交通界に革新を齎して來た。海上は三角港を起點として對外的には長崎又は海外との連絡を結び、對内的には百貫、八代、本渡、牛深富岡、水俣、長洲地方との間に航路開け往來に、物資の運送に著しく面目を改めるに至つた。

肥後の沿革

一

我が肥後の國を火の國と呼んでゐる。なぜ、さう呼んだかといふに、神武天皇第一の皇子神八井耳玉命の御孫、健盤龍命（たていはたつのみこと）が阿蘇に封ぜられ、第十代崇神天皇の御代、健緒組といふ人が、勅を奉じて、この國の土蜘蛛を征伐したとき、八代の白髮山に奇火現はれた、又景行天皇熊襲征定の時も、八代の海に靈火現はれ、船路を照らし參らせたので、それから火の國と呼ぶやうになつた。

その頃肥後は肥前と一國であつたが、後に分れて火前、火後となり、更に火を肥に改め、肥前、肥後と書くやうになつた。肥後はそのころ阿蘇、葦北、天草の三國に分れてゐた。

大化の改新に國府を熊本市古町地方に置かれ、歴代相繼いで國司、國守統治し、平安朝の時代から藤原氏、源平二氏、北條氏等の勢力が各地を支配してゐた。

其の間に阿蘇、菊池兩氏蟠居し、吉野朝の頃には菊池氏勢力をはり領有した。

阿蘇氏が肥後と關係深いやうに菊池氏との因緣もまた深い。

延久二年菊池郡に封ぜられてから二十四代、凡そ五百年に亘り、九州勤王の中心になり、征西將軍宮を奉じて肥筑の野に奮戰した武勳は武光、武朝の武勇と共に、人の知るとほりである。

戰國時代には豐後の大友、肥前の龍造寺、薩摩の島津諸氏のために、爭覇たへず、それに大小の諸城主各地に割據し、戰雲低く垂れ戰亂止むときもなかつたが、豐臣秀吉九州を平定するや、佐々成政をこの地に封じ、成政誅罰後は、加藤清正、小西行長が分領し、小西滅亡後は加藤氏の有となつた。清正公が政治に、築城に、治水に、開墾に、必生の力を拂つたのはこの時代である。

清正歿後、其の子忠廣その後を繼いだが、德川幕府の忌諱にふれて國を除かれた。

二

加藤氏の次が細川氏である。寛永九年十二月、忠利公豐後四郡を併せ、五十四萬石を領有するや、よく清正公の遺業を繼ぎ、政治に心を用ひたので、庶民國主に服し、光尙、綱利、宣紀、宗孝を經て、一代の名君重賢（しげかた）にいたり、國治大いにあがつた。後年各方面に活躍した幾多の人傑が、藩學に敎養せられたのも、多くこの時であつた。

重賢から、治年、齊茲、齊樹の諸公相次ぎ、齊護に至る。齊護は、嘉永六年米艦の來朝に際し、兵を率ゐて武相の沿海を護り、その子韶邦は、幕府に隨つて長州を攻め、世子護久京師にある頃は、天下の形勢急をつげたので、參內して禁闕を守り、後大和を治め、彰義隊を擊ち、かの函館五稜廓の反兵を平げた。

かくて、政權朝廷に還り、版籍奉還されるに至るや、我が細川韶邦（よしくに）公は高瀨、宇土、人吉、八代各藩主と共に、領土を還し奉つた。

三

王政復古の大業は、めでたくこゝに成つて、世は再び天日の光を仰ぐことゝなつた。

明治昭代の出現までには、我が熊本縣にも幾多の變遷があつてゐる。

明治四年七月、廢藩置縣の大變革と共に、熊本縣の行政區劃は、人吉縣と熊本縣に二分され、八代郡の一部と天草郡は一時長崎縣に屬した。次で八代縣や、白川縣と改稱されたこともあるが、今日の如く一市十二郡に制定されたのは明治二十九年三月で、爾來今日に及んでゐる。

熊本市の歴史と現在の實狀

史上から見た熊本

熊本が肥後の中心となつたのは、孝德天皇の御代、大化新政の際、國造（くにのみやつこ）を廢止し、諸國に國司（こくし）を置かれた時からはじまるやうである。今の二本木町宮寺附近は、當時國府のあつたところで、今に府中、在廳屋敷などの名が殘つてゐる。

その後、足利時代、應仁文明のころ出田筑前守秀信が始めて隈本城を築いた。今の千葉城阯である。

その頃熊本を隈本と書いてゐた。

大永享祿（たいえいけうろく）の時代になると鹿子木寂心（かなこぢじやくしん）當時の城廓が狹いので古城（ふるしろ）に築城して移つた。

この頃から漸く市街らしい熊本が出來た。佐々陸奥守成政本城に封を賜り、四十九萬石の城主となつ

たが、叛亂のため僅かに一年にして退城した。

加藤公時代の熊本

天正十六年佐々成政の後を承けて加藤清正肥後の守となつた。さうして先づ府中、即ち二本木町宮寺附近の商家や、寺院などを隈本の城下に移し、今日の繁華をなす基礎をつくつた。

何でもその當時は、士屋（さむらいやしき）敷と町家等を併せて東西二十二町、南北三十三町、周圍三里三町餘であつた。無論その頃の戸數や人口などは資料がないので不明である。

その後、慶長六年から茶臼山に熊本城を築き、天守閣が巍然として市の中央に聳え、偉彩を放つた。この頃から市街は漸次發達して來た。隈本が熊本に變り、隈本城が熊本城に改稱されたのはこの時であつた。

關ヶ原の戰後、清正公は五十四萬石の大名となつて、家臣は益々多くなり、町家も軒を並べ、物資の需要供給は盛んになつた。熊本市の陣容が、がらり一變して面目をたてたのはこの時代からであつた。

細川公時代の熊本

清正公沒後、忠廣その後を繼いだが、故あつて國を去り、細川忠利（ただとし）これにかはつて肥後に封ぜられ五十四万石の大主となつた。爾來、細川公の城下として、繁榮の一歩をたどり、人口も、稠密の度を加へ

て來た。

今から二百年前、すなはち享保時代の町數や戸口の記錄によると、新町十五丁、古町四十六丁、京町五丁、坪井十八丁、總計八十六町で、戸數四千三百六十八軒、人口一万九千九百餘人である。これに御家中帶刀以上陪臣まで八千餘軒、これを加へると一万二千餘軒、總人口六万餘であつたといふ。

大正初年ごろの市の人口戸數と殆ど同じと思へば不思議である。

細川氏、熊本城中にあること二百四十年、この間、行政を掌り、數多の家臣は城の周圍に居住し、又は市街の各所に塀をめぐらし、士屋敷を構られて明治維新になつた。

明治以後の熊本

王政維新の歡喜は全國津々浦々にまで電波の如く飛んだ。此處に百制は革められ、明治二年正月、細川詔邦公は版籍を奉還し、同年六月詔邦熊本藩知事となる。越えて明治四年廢藩置縣、同年鎭西鎭臺を熊本に設けられ、士族町は一變して軍人町となつた。

初め熊本は熊本縣の管轄で、縣廳は花畑町の藩廳にあつたが後、城内二の丸に移つた。

明治五年熊本縣は白川縣となり、縣廳は二本木町に移り、明治九年二月白川縣は又熊本縣と改められ縣廳を熊本城内に置いた。かくて熊本縣の政治上の中心となつた。

神風連

明治九年秋十月二十四日夜、太田黑伴雄、加屋霽堅の二首領を一黨とする神風連の擧兵となり、全軍凡そ、百七十餘人を分ちて三隊とし、堂々三千の鎭臺へ斬り込んだ。その部署を尋ねると、一隊三十餘人は種田熊本鎭臺司令官、高島同參謀長、與倉歩兵十三聯隊長、安岡縣令等の邸宅を襲ひ、太田黑、加屋の一隊は七十餘人を率ひて砲兵營を、又一隊七十餘人は歩兵營を襲撃し、一時は殆ど熊本城を壓倒せんとする情勢にあつたが、衆寡敵しがたく、或は斃れ、或は傷づき、遂に刄を自らとつて勇躍死地についた。

「武士道の精華は赤穗義士に開いて、熊本の敬神黨に散つた」と佐々克堂はこの擧兵を評してゐるとほり、全く純眞私なく、清誠欲なく、唯君國を思ひ、世を慨き、國を憂へるの外全く他念がないのである。世にこれを敬神黨の亂といひ、神風連の暴動といふ。

西南役

翌明治十年二月、西鄕隆盛は一萬五千の大兵を率ひて鹿兒島を發し、北上の途につくや、鎭臺司令長官谷干城少將は、熊本城に據つて敵の前進を拒止すべく、城の周圍に諸隊を配置して籠城の準備を整へた。籠城の兵力は約三千三百、砲二十門、敵は大軍に砲六十門といふ大兵團を擁して潮の如く攻め寄せ

た。

しかるに薩軍到着を目睫に控へ二月十九日、突如として城内より火災起り、惜しむべし三百年の名城を焼き、準備糧秣の大部分を烏有に歸し、僅かに宇土櫓のみ残つた。

同月二十二日を期し猛烈なる攻撃は開始された。花岡山から撃ち出す敵の大砲は間斷なくつゞけられ市内は共處、此處に火を發し焦土と化しその光景慘憺たるものがあつた。

籠城實に五十有餘日、血戰幾百回、遂に守城の功なり、流石精悍なる薩軍も包圍をといて去り哀れ西郷隆盛は城山の露と消えた。

この兵燹によつて殆ど市の全部は烏有に歸し、町家は一大災厄であつたけれども、この兵亂後は、市街の改正擴張となつて、市の面目は新になつた。

斯くて、明治、大正を經て昭和の聖代となり、教育に産業に、文化に、交通に、觀光に各種の施設大いに揚り、市勢は年と共に伸展し、今や新興の意氣、全市に溢れ、西日本の雄都として、廣袤まさに三方里、人口二十萬の大都市として、一大躍進の道程にある。

教育・産業・觀光都市としての熊本

熊本は古くから尚武の地であると共に教育の國として全國に謳はれてゐる。

政治、軍事、産業、交通等のあらゆる機關も市に集り、今や九州中心都市として面目を備へ新興潑剌たる氣分は全市に溢れるに至つた。

試みにその一班を一瞥すれば、官衙では九州一圓を統轄する遞信局、税務監督局、營林局、鐵道建設事務所、日本放送協會九州支部を始め、煙草專賣局など大小幾多の官衙ありて政治上の心臓を形成し、軍事上では第六師團の所在地として樞要の地を占め、又教育に於ては醫科大學、高等學校、高等工業、藥學專門學校など各種機關充實し、觀光設備また完備し、産業都市としても着々實現されんとし、名實共に新興の機運は熟して來た。

更生の機運溢る森都、熊本の至寶熊本城を中心に、名勝史蹟また到る所に點在し、水色豊かな水前寺の雅趣、水郷畵津湖の眺め、法燈輝やく本妙寺、花の名所に御幸坂、藤崎臺、花岡山の景勝、さては劍聖宮本武藏を偲ぶ武藏塚、山緒は深き藤崎宮に昔を語るもよい。

更らに東方遙かに聳ゆる大阿蘇に、千古の謎を語る不知火、切支丹殉教の天草に南國情緒を掬むもよい。日本三急流の球磨川に舟便をかり、奇勝を探り、田原坂に西南役を偲び、各地の温泉に旅塵を洗ひて景勝の熊本に思ひを馳せるもよい。

今や我が熊本は雲仙、阿蘇、別府を結び國際觀光路の中樞で、交通の便至らざるはない。

古都熊本が躍進文化の都として、觀光都市として天下に誇る所以である。

熊本城を訪ねて

熊本城

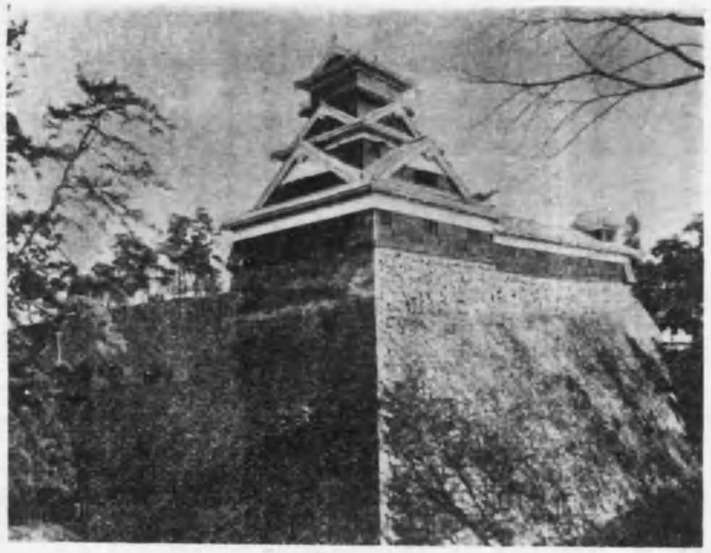
日本三名城の隨一と謳はれる熊本城は、我が肥後のもつ大なる誇りの一つである。

森の都、熊本市の中央に、うつさうたる老樹にかこまれ、陵轢の奥、城壁高く天に聳えてゐるのがそれである。

この城は、人も知るとほり慶長の昔、加藤清正公が七ケ年の歳月を費して築いたもので、幾多の樓閣巍然として屹立し、實に天下の偉觀であつたが、惜しいかな、かの西南役において、第一、第二の天守閣は灰燼に歸し、今はただ、三の天守宇土櫓がひとつ殘り、華やかなりし在りし昔を物語つてゐる。

それは足利氏の末葉文明の頃であつた。菊池氏の一族に、出田筑前守秀信が、本城の東端にある千葉城趾に、隈本城を築いた。これが熊本城の濫觴で、今僧行社のあるところが、即ちそれ、次で大永享祿のころ、鹿子木寂心が、居城するにあたり、城郭が狹いので、本城の西南端、熊本郵便局後方に城を築いた。今の古城である。

加藤清正公肥後守となるに及んで、慶長六年、この兩城に横はる茶臼山に、大規模の城を築き、同十二年竣成時に、皇曆二千二百六十七年、今より三百二十八年前で、この後隈本城を熊本城と改めた。濠は深く壘壁は高い。それに七層樓の大天守閣をはじめ、樓閣四方に嚴然として屹立する勇姿は、けだし天下の一大壯觀であつた。不出



宇土櫓

世の英傑清正公にして、この雄大壯絶の築城なる。實に宜なるかなである。

清正公歿後、寛永九年嗣子忠廣公に及び國を除かれ、細川氏がはつて五十四萬石の藩主となり、爾來居城二百三十九年明治維新となつた。

斯くて明治四年には、こゝに鎭臺を置かれ、同九年十月には神風連の異變、越えて十年には西南役が起つた。

西郷隆盛の率ゆる薩州の健兒三萬、同年二月鯨波を擧げて攻め寄せて來た。時の鎭臺司令長官谷干城少將は『薩軍何者ぞ』と麾下將兵を勵まし、死守よく努め、惡戰苦鬪、籠城實に五十有餘日、流石に猛き薩兵をして、一歩も城内に入らしめなかつた。洵に悲壯そのものの史蹟であり、不落の名城として名をはせてゐる。

しかるに、總攻擊の三日前、即ち二月十九日午前十一時四十分、不幸城中より火を發し、三の天守宇土櫓を殘して、一の天守、二の天守閣以下幾多の樓閣を燒いてしまつた。

城頭に立てば城郭二里十三丁、兵燹前の巨城が偲ばれる。

天下の名城熊本城を繞る要害堅固なその築城と、用意周到なる防備は、至寶的藝術品であると共に、國寶――熊本城の面目躍如たるものがある。

熊本城の特質

熊本城が天下の名城として推稱されるのは無論、雄大豪壯の築城によるところ言ふまでもないが、城内の一木一石、一塊の土にいたるまで加藤清正の靈がこもつてゐることである。

城の特質として、何よりも一番に目につくのは幾重疊とも知れぬ巨大なる石垣の要害である。春風秋雨三百三十有餘年、數度の大地震、猛けき風雨にも微動だにせず、磐石の堅さを保つてゐる。殊に城の西南方には、花岡山、段山、藤崎台などの丘陵が連つてゐるので、同方面の防禦策として坪井川、井芹川の合流點の附近に、多くの寺院を集め、「いざ合戰」といふ場合には、この寺の墓石を川に埋めて氾濫せしめる方法を講じたことである。清正公が如何に敵襲來にそなへてゐたかゞわかる。

また城内から八方に通じた凹道は、兵糧運搬のため用ふる軍道で、又城中の石垣が右に左に、曲り曲つた道は、攻むるに難く、防ぐに容易な、所謂二段かまへの戰法によつて構築され、或はまた城中に井戸百二十餘個を掘つて用水の便を計るかと思へば、楠、榎を植へて籠城の日の薪炭に備へ、刀の目釘には良質の竹を移植したり、特に一旦緩急の場合を慮り、城中屋内の疊の中に芋殼を敷き込み、銀杏樹を植えてその實を暗室に貯藏するなど、實に至れり盡せりの築城技術は、今なほ古今東西研究家の嘆賞するところである。

その大計深慮は、かの西南役において充分發揮され、籠城約二ヶ月、勇敢決死の薩軍を、ものゝ見事に喰ひ止めし戰史によつてもわかる。蓋し難攻不落の金城として、天下に號令するも決して偶然ではない。

軍略家としての清正公は、また如何に偉大なる築城家であつたかが、これによつて知られるではないか。

行幸坂の櫻と谷村計介銅像

行幸坂

熊本市の心臟新市街の一角、宏壯なるモダン式の建物は、九州第一の公會堂である。その右側、坪井川に架けられた行幸橋を渡ると、なだらかな傾斜の行幸坂である。熊本城南の登城口で、昔は南坂と稱してゐた。明治三十五年陸軍特別大演習が、肥後平野において擧行されし時　明治天皇は、第六師團司令部を行在所に充てさせられた。この時舊來の峻坂を改修し、昔の下馬橋は行幸橋に、南坂は行幸坂と改めた。さうして、其の光榮ある行幸を記念せんがため、坂の兩側に吉野櫻を植えた。四月上旬、爛漫たる花の世界を現出し晝夜觀櫻の人を以つて埋まる。陽春の熊本を代表する市内第一の花の名所である。坂の登り口、行幸橋を渡つた右手に、西南役の殊勳者として有名な國士谷村計介の銅像があり、左

側は熊本憲兵隊本部、それから少し登つたところに備前堀がある。加藤清正が佐々成政の遺子佐々備前を庇護して、この堀の附近に屋敷を與へて居住せしめたので其の名が殘つてゐる。

飯田丸阯　備前堀を隔てた向ふの高い石垣の上が、飯田丸阯である。此處は西南の役に際し、官軍が大砲を据えて、寄せくる薩軍に發砲せし台場で、敵もさるもの此處を目がけて砲擊したものである。今なほ第十一旅團司令部入口の大門に彈痕が殘つてゐるのも、その當時の激戰を物語る一つである。谷司令長官が、幕僚をひきつれ戰況をたえず視察してゐられたのもこの石垣の上からである。

西出丸阯　行幸坂の左側の石垣は西出丸阯で、舊藩時代には藩の役所のあつたところである。この城廓は西方側面の防禦のため築いたもので、清正公會心の城廓である。

南大手門阯　坂の上りづめの處、西出丸の石垣下に狹い道が平行してゐる。これは舊道南坂の面影で、その上りづめの處に、南大手門阯がある。往時は、此處に壯大な二階建の城門があつて、城の威嚴を示してゐたものである。

宇土櫓

行幸坂を上り、廣場に出ると、眼前に聳え建つ莊嚴な雄姿は、宇土櫓である。

第六師團司令部正門を入つて程なく、數寄屋丸阯がある。これは大手の樓門と共に、最も堅固を極めたものであつたが、明治三年、內に藏されてゐた火藥が爆發してあとかたもなくなつてしまつた。これ

から少し行くと宇土櫓の入口がある。

宇土櫓は元宇土の小西行長の居城であつたが、小西滅亡後、清正公がこゝに移し、三の天守とせられたものである。

西南の役には、この櫓のすぐ北横から發火し、第一、第二の天守閣を始め多くの樓閣を燒失したのに宇土櫓だけは不思議にも完全に殘つた。戰中、品川大書記官や富岡縣令は、一時この櫓で事務を執つたことがある。

櫓の中には清正公の銅像、清正公一代記繪圖を始め、層樓天を摩してゐた當時の熊本城の模型、西南役の遺品及び、官、薩、熊本軍諸將の寫眞、歷代鎭臺司令官、師團長の寫眞並に歷代舊藩主の肖像、其他刀劍、古武器など種々の寶物が陳列されてある。中にも珍らしいのは、清正公が朝鮮征伐の際、晉州城に用ひた龜甲車で、これは今日の戰車であつて、三百年の昔、すでに清正公はこの兵器を實戰に應用してゐるのである。全く驚く外はない。

櫓の最頂上第五階からは、東に遠く阿蘇山の噴烟が見え、また大津馬場の杉並木もかすかに認められ、北に古戰場の田原坂方面、南に木原山、綠川、さては宇土半島、西に轉ずると金峯山をはじめ本妙寺山一帶の景觀が手に取るやうに見えその後方遙かに三の岳や、薩軍の驍將篠原國幹が戰死した吉次越も望見される。谷村計介が熊本隊のため捕へられたところも、この峠である。

此處からの眺望は、一眸開濶、雄大な四圍の景觀を擅にすることが出來る。

くらがり門阯　宇土櫓を出ると、左に直ぐ高い石垣が突立つてゐる。これが一の天守閣の臺壁であ

第六師團司令部

る。

曲りくねつた砂利の道を少し行けば、くらがり門趾がある。この兩側の石垣の上に、昔千疊敷といはれた大殿堂が構架され、畫なほ鐵燈籠が灯されてゐたので、その名がある。こゝの左右の石垣が、表面剝げ落ちてゐるのは、西南役の當時、このくらがり門が燒け落ちたため、今日のやうになつた。

師團司令部　くらがり門趾を上ると、道は兩方にひらけ左にあるのが第六師團司令部である。明治の初め兵制の改革と同時に熊本に鎭西鎭臺が置かれ、こゝに司令部が設けられた。爾來明治九年の敬神黨の亂、西南役をはじめ、日清、日露の兩役、近くは濟南、日支事變、に赫々たる戰功をたてたことはすでに世人熟知の通りである。

その司令部の玄關先にある大きな銀杏樹の古株は清正公が築城記念として手植せられたもので、今日亭々として茂つてゐる樹は、西南役で燒けた親木から新らたに芽を出した樹である。

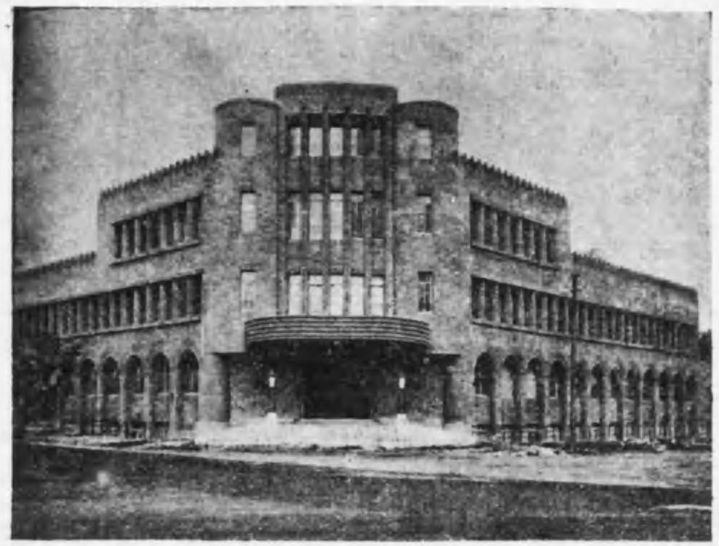
熊本城を一名銀杏城といふのはこれから起つたものである。

司令部前面から左へ千葉城趾へ通ずる下り坂に不開門がある。幸ひ兵火の難を免れて完全に殘つてゐる唯一の門で、往時この門は殆ど開けることがなかつた。それが今日では開け放され、自由に通れるのに、あけず門と云はれてゐるのも、昔なつかしく、ほゝ笑まれる。

午砲臺　司令部前の高臺が月見櫓趾、俗に午砲臺である。此處は市街地を眼下に見おろす屈竟の場所、昔は大廣間といふ大殿堂があつたが、これも西南役の厄にあつて燒き盡されあとかたもない。現在此處から毎日ズドンと午砲を擊つてゐる。

東端月見櫓趾の臺上に立つと、殆ど市街の七八分が一眸の中に集まる。文豪夏目漱石が「これは森の都だ」と推

市役所と遞信局



公會堂

賞したとほり市街は鬱蒼たる綠樹に包まれてゐる。まつたく新興二十萬の市街はこの綠陰の中にあるのである。

此處からは煙を吐く阿蘇山や連峰が遠く望まれ、近くには立田山の林相美、紅葉と、つつぢの名所として名高い、この山の中腹に白い建物が見える、市の上水道の貯水地である、清正公が主君秀吉の靈を祀り、朝夕城内から遙拜されるために、豐國神社を建立したといふ社阯は、其の少し上にある。山麓左方に高く突立つてゐるのが、熊本中央放送局清水放送所の塔で、其の下に泉鄕八景水谷（はけのみや）がある。その南に廣い野原が展開されるあたりに市の公設グラウンドがある。このへん一帶は、天授の昔、菊池武朝が、今川了俊の兵を壞滅した託摩原の古戰場、その右につゞいて名園水前寺や、畵津湖の水が光つて見える。全く一幅の繪である。

眼下に綠色で塗つた屋根が手に取るやうに見えるのは偕行社で、昭和六年中秋陸軍特別大演習の砌り、畏くも大本營にあてさせられた光榮ある屋舍である。この地帶は元千葉城阯で、劍聖宮本武藏が、嘗つて細川忠利公の知遇を得て、居住

したところで、熊本城發祥の地である。

午砲臺の脚下の大建築物は、熊本遞信局、左は市役所、その向ふは放送局で、其他大小幾多の家屋が連鎖されてゐる。月見櫓から西に歩を移すと、明治大帝御駐蹕の御阯、大正天皇、今上天皇陛下が玉歩を進めらせられた御阯があり、記念の碑が立つてゐる。

この附近からは、金峯山や、荒尾山、花岡山などの西山一帶が望まれ、舊藩時代お花畑と稱し、藩公の居宅のあつた二十三跡が手に取るやうだ。此處は大正十三年まで歩兵二十三聯隊を置かれたので、その名がある。この一帶は電話交換局路をへだて、公會堂、その前に商工會議所、赤煉瓦造りの大厦は煙草專賣局でその左側の洋館は縣產業の粹を集める勸業館である。この附近一帶は、熊本市の心臟、新市街の盛り場である。活動常設館、劇場、デパート、カフエーなど軒を並べ嘗つては草深い練兵場のあつたところとは思へぬ變遷ぶりである。

首掛石

剛力橫手五郎が熊本城築造の時首に大きな石を掛けて運んで來たといふ巨大な首掛石はこの一隅におかれてある

舊熊本城一ノ天主閣

この午砲臺からは熊本市街を座ながらにして展望され、昔し月見櫓とされてゐたのも成る程と首肯(うなづけ)る。

天守閣趾 天守閣のあとは師團司令部左手の高臺で、無論この城の最高地點である。築城以前はこの城一帶の地を茶臼山といつてゐた。この樞要の地點に一の天守閣、二の天守閣が、城翼を張り、雲表高く聳えてゐた。現存してゐる土臺は、地上八間、その石疊の上に、更らに高さ十六間二尺、七層の一の天守、同じく九間半五層の二の天守があつたのだからその豪壯さはおして知るべしである。

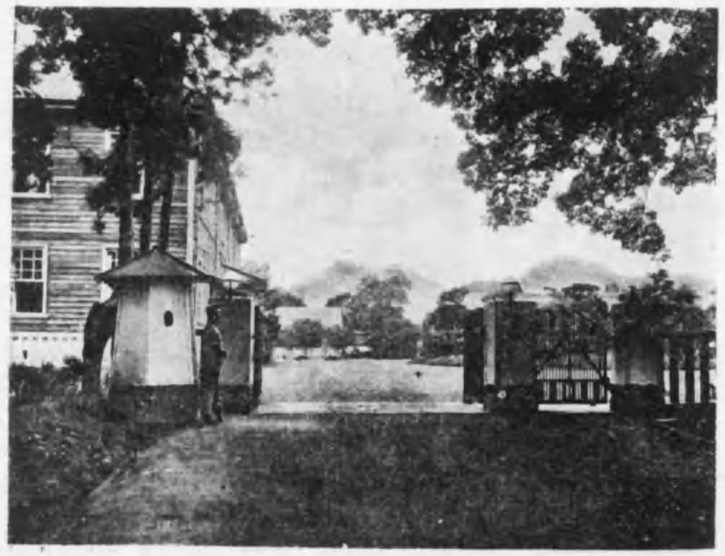
教導學校 師團司令部正門を出て陸軍教導學校へ行く途中、右手に空濠(からほり)がみえる。こゝは西南役當時籠城軍の家族が避難した所で、戰亂を他所に與倉十三聯隊夫人が女兒を分娩されたのもこゝ、心なしか、そゞろに、その頃の苦難のさまが偲ばれる。教導學校の校内は昔の二の丸趾で、名君細川重賢(しげかた)公が寶暦の昔、時習館を建て、大いに肥後の學藝武道に力を注がれた垂訓(すいくん)の地で、維新

の俊傑横井小楠、侍講元田東野、前文部大臣井上梧蔭等の先哲こゝから輩出されてゐる。

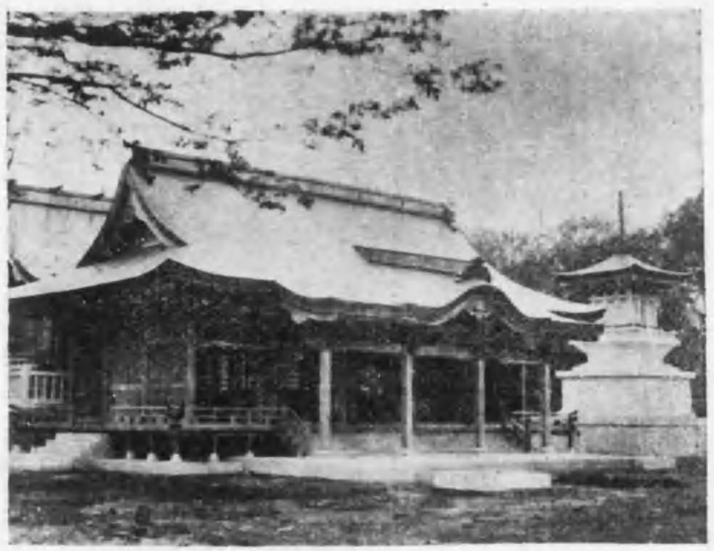
此處は七八年前まで歩兵第十三聯隊の營舍であつて、明治九年太田黑伴雄(ともを)の指揮する神風連の主力が、襲撃した激戰地として、校内のそこ、こゝに凄慘なその異變の跡が殘されてある。法華坂や舊埋門趾の亂戰地も、すぐこの裏手で、血と血で色どられたものである。

百間石垣 熊本では、のるかそるかの仕事を思ひ切つてやることを「百間石垣うしろ飛び」と言つてゐる。

この百間石垣は教導學校の北部にある長い石垣で、無論百間はないが、直線の最も整美した石垣として名高い。石垣下を藤崎臺から京町へ走つてゐる坦々たる道路は、舊藩時代島津公が參覲交替の時、新一丁目から通過された道筋で、各藩虎視眈々たる戰雲をよそに、豪膽にも城内を開放された度量は流石清正公なればこそと察せられる。石垣の東方京町に行く途中にあるのが、新堀櫓で、熊本城北部の咽喉を扼した新堀門趾も此處にある。



教導學校



藤崎臺招魂社

藤崎臺　百間石垣の下の道路は輜重兵第六大隊の前を通り新町に通じてゐるが、この一路を隔てた向側の高臺が、藤崎臺である。明治十年まで國幣小社藤崎宮の鎭座されたところで、巨大な一群の樟樹は、內務省から天然記念物として指定され、東方の櫻樹林の中には招魂社が祀られ、毎年新綠の候に催される招魂祭は、全市をあげて非常な賑ひを示し、又陽春を謳ふ櫻花にこの附近一帶は時ならぬ雜閙を見せる。

この高台は天授四年九月、九州探題今川了俊、みずから大軍を率いて滯陣し、託摩原の戰鬪に進出した戰蹟の地であり、近くは、西南役に於て屍山血河の悲壯なる激戰をくりかへされ、與倉中佐も、この地に於て戰死された。その壯烈なる熊本城攻防戰は、流石に猛き薩軍をして、長圍の計をとるよりほか途がなかつた。その戰鬪の壯絕さ、おしてしるべしである。

千葉城阯　熊本城の東方に在る一丘陵が、すなはち

千葉城阯で、足利時代文明の頃、菊池氏の一族出田筑前守秀信が、こゝに『隈本城』を築いたのが千葉城である。熊本城最初の城廓である、此處は今陸軍偕行社があり、その下には熊本聯隊區司令部がある。この千葉城阯には曾つて、劍聖宮本武藏が居住したので又名高い。昭和六年中秋大演習には　今上天皇陛下御駐蹕遊ばされた。

熊本城稻荷神社　熊本城稻荷は慶長年間清正公が築城と同時に天守閣の臺下に防火の守護神として勸請したもので爾來細川公時代まで祀られてゐたが、明治十年の役で兵火のため烏有に歸し、その後久しく中絕の狀態であつたが、大正十二年十一月にいたり內務省の許可を經て熊本城の東南城壁に建立今日に及んだもので、祭神は稻倉魂命（うがのみたまのみこと）である。日日の參詣多く初午祭には各地よりの賽者四萬人にのぼる靈驗あらたかな稻荷として有名である。

陸軍偕行社

本妙寺

熊本城の西北部、上熊本から鐵道線路にそうて南に四町、花園町中尾山の中腹が、有名な發星山本妙寺で、加藤清正公の御廟所である。京都本圓寺末で、末寺四十七ケ寺を有する西國における日蓮宗唯一の巨刹で、參詣者の多いこと、流石に名伽藍を思はせる。

この寺は京都妙傳寺の住職日眞上人の開山で、天正十三年十一月清正公が先考清忠君の菩提のために大阪に建立したのを、同十六年六月公が肥後入國の時、上人もまた熊本に來り、慶長五年、之れを、はるばる熊本城内三の丸に移した。さらに、慶長十年には畏くも　後陽成天皇は本寺に綸旨を賜ふて勅願道場とせられ、同十六年六月二十四日清正公逝去に遇ふや、後嗣忠廣公は公の遺志によつて、その靈廟を、今の地に建立し、越えて、元和二年に城内の本

妙寺を公の廟地に移し、寺領七百石を附して菩提寺とされたのである。

往時は幾多の堂院山門ずらりと連り、莊嚴極りなきものであつたが、これまた西南役で兵火にかゝり燒失し、現在の堂宇は悉くその後再建されたものだ。

本妙寺入口の鐵筋コンクリートの仁王門、長い櫻馬場、こゝも櫻の名所、この櫻馬場を行きつめると、胸突がんぎ（がんぎは熊本の方言で石段のこと）を踏んで淨池廟に達するのだが、附近の鬱蒼たる老樹に、お題目と太鼓の響き、晝夜をわかたぬ蠟燭の火、線香の煙り濛々として立ちのぼるさま、流石に法華の靈場である。

清正公の遺物

御廟の北側に祀られてあるのは、清正公の寵將わが烈士大木土佐の墓である。公の逝去を悼み從容として割腹、壯烈な殉死を遂げたのであつた。また廟の南側にあるのは殉死者朝鮮人金官（きんかん）の墓碑である。公朝鮮征伐の際、公の德を慕ひ隨從して肥後に來り、特に祿二百石をもつて遇せられた。異邦の臣として君恩に殉じたのは史上稀に見るところで公の一面が、覗（うかが）はれ、境内の寶

本妙寺本堂と櫻馬場

物館は當年の鬼將軍清正公を偲ぶに充分である。

清正公の銅像　清正公が忠孝双全、智勇兼備にして信仰に厚く、國利民福を計り、治水土木の大工事につくされし仁慈は三百五十年後の今日に至るまで、人口に膾炙されてゐるが、この公の偉容を永久に傳ふべく、かねて計畫を進められてゐた大銅像は昭和十年四月七日、英靈眠る本妙寺淨池廟裏の本妙寺山の中腹に四百三十坪の廣場を設け建設成る。銅像の身長二十七尺五寸、臺座よりの高さ五十餘尺といふ素晴らしい巨大なもので、工費六萬圓、東京美術學校教授北村西望氏の手で鑄造され、熊本出身青年彫塑家松原祥雲氏又助手として從事し、何れも會心の力作である。

この巍然たる公の威容は市内からも觀望され森都の誇りが又一つふへたわけだ。

加藤神社

熊本城の北側、京町臺の一角に、清正公を祀つた縣社加藤神社がある。はじめ本妙寺の清正公廟墓のそばに祠堂があつたが、明治四年熊本城本丸に移轉、間もなく熊本鎭臺が設置されたので、同七年この一角に遷宮し、錦山神社と稱した。しかるに西南役で社殿は悉く兵火にかゝり、同十七年再建、同十九年十一月に至り漸く竣工を見るに至つた。境内からは坪井方面の市街を俯瞰し、遠く阿蘇山を眺め景勝の地である。

山伏塚　京町臺の町はづれ出町から植木へ向ふ道路の途中は清正公苦心開鑿の凹道で、これはイザ戰といふ時熊本城から軍兵を繰り出すため敵に發見されぬやう特に研究された獨特の凹道である。

この出町の町はづれに、高い榎木の大樹の根に、一つの山伏塚がある。築城の際手傳つた修驗道眞言の山伏は、築城完成とともに、清正公の家臣に送られてこゝまで來たものだ。

加藤神社

さらばとて別離の宴を張り、お機嫌ようと言ひ交はし、別れんとする一刹那、一閃忽ち躍つて彼の山伏は哀れ血に染まつて倒れた。悲風寂々、彼の山伏の遺髪を埋めたところだといひ傳へられてゐる。大榎の根の墓石には「權大僧都法印龍蔵院慶長」と刻され他の文字は一切木の根に包まれて知ることを得ない。自刎に倒れし山伏——城の秘密が他に洩れるのを慮ばかり、家臣一存の殺害か、その事實は知らず、謎である。こゝは城内から起點とした一里木のあつたところ、肥後からお江戸へ三百里、旅立つ人々はこの一里木の下で別離の杯を酌みかはしてゐたさうだ。

藤崎宮祭

藤崎八旛宮

國幣小社藤崎八旛宮は、今を去る一千年の昔、承平五年、熊本城西部の一角藤崎臺に、朱雀帝のとき、平將門追討のため勅願によつて、山城の國、石清水八旛宮を勸請したもので、明治十年役に際し、砲火をあび燒けたので、明治十年八月現在の井川淵町白川畔に遷したものである。應神天皇、住吉大神、神功皇后を祀り、神体の僧形八旛像と、女神像は、さきに國寶として指定され足

利時代の傑作とせられてゐる。又、境内には鎭座の日に不思議にも、地に挿した勅使の鞭から技葉が出たと傳へられる神木、奇瑞の藤が茂つてゐる。

例年行はれる九月十五日の祭典放生會は、清正公朝鮮征伐の凱旋にかたどり、武者行列に、數十頭の飾馬も加はり、ぼした、ぼしたの掛聲勇ましく、古典的な唐獅子の舞などあり盛んなるお祭りである。

吉田司家　尙武日本の國技は相撲である。その相撲の大御所、吉田司家は、藤崎八旛宮神域の近くで、如何なる天下の大力士も、わが司家の門に入り、故實の傳授を受けねば横綱の役號を名乘ることの出來ないのは、すでに世人の知るところ、始祖豊後守家次以來七百五十年當主善門追風翁まで實に二十三代に及んでゐる。

新市街

新興都市、躍進都市としての心臓——それは、新市街

新市街の賑合

だ。キネマと劇場と、カフエーに大小幾多の店鋪、各種の遊戯場に明けては暮るゝ繁華街、歡樂境の新市街、こゝが明治三十五年ごろまでは雜草茫々たる第六師團の練兵場であつたと誰が想像し得やう、事實草から明けて草に暮れてゐた廣原だつたのだ。その頃、狐がよく鳴いてゐたさうだ。

征清記念碑

文化の力の偉大なのに、驚くではないか。脈々たる新興氣分に横溢してゐるこの新市街、煙草專賣局正門前の大廣場にある征清記念碑を起點として、放射線狀に伸びたメーンストリトを交錯する電車とタクシーと、バスと自轉車と、人の波人の渦、文化の響と音、全く新市街は美の極致であり、文化の精粹であり、歡樂の尖端である。

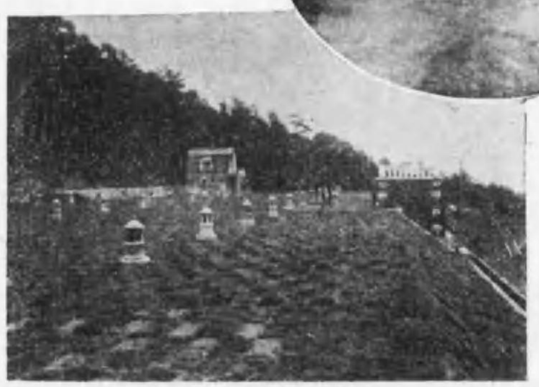
市電花畑町停留所前に異彩を放つ堂々たる大建築は、いはづも知れた我が熊本勸業館、こゝは縣下の代表的名產や鄕土藝術品等を網羅し、產業熊本の眞價と、意氣とを高調してゐる。勸業館の北方、電話交換局の中間にある花

畑公園は市民の公園として一寸息を拔くのに恰好のオアシス、公會堂の大建築に、遞信局、市役所、放送局、勸業銀行等の高樓、さてはデパート、カフエー街の雜踏、殊に近く堂々たる貯金支局が遞信局の前に建設されるのを始め、次々に大建築が、そこ、此處に進出されつゝあるのは何を物語るか。もとより電車通りの地域に點々空地が見受けられるが、大厦高樓軒を並べ、名實堂々の市街を形成する日の到來も遠くはあるまい。上通町の商店街はすぐ近くである。

新興都市の動脈、新市街は、熊本の變遷を雄辯に物語る一つである。

立田山

熊本市の東北郊、翠色に包まれる林相美のなだらかな山が立田山である。山頂には昔清正公が主君秀吉の靈を祀つり、朝夕禮拜したといふ豊國廟阯がある。黃金の瓦が當時燦然として光を放つたほど豪華な祠堂であつたが德川時代となるに及んで朽廢した。こゝからは市の中央部が一眸の中におさめられ、脚下には第五高等學校、熊本高等工業學校などがみえる。



白川より見た立田山と配水池

八景水谷水源

配水池　立田山の西南面、櫻の植込みの中を一直線に上りつめると、上水道配水池がある。鐵筋コンクリート造りの大池は、一時に四萬二千石の上水を貯へ、二十萬人に給水が出來るのだからその大きさが想像出來る。この水は八景水谷の地下水をひき、水量豊富と、水質の優良は全國稀にみるところ、加ふるに爛過の必要がないといふ水である。

この附近は塵外の遊覧地として春から夏にかけ杖をひくも尠くない。

立田山の南麓に泰勝寺馬場といふ所がある。細川侯爵家の別邸は、この奥になつてゐる。邸内には細川家累代の墳墓や祠堂がある。

八景水谷

立田山の北麓、市外清水村の八景水谷は水郷として有名である。曾つてこゝは細川綱利公が閑雅な茶亭を設けたほどの幽邃境、市の水源地もこゝ、螢の名所で、清

冽玉の如き湧水に眞夏の一日をすごすもよい。近くに熊本中央放送局の清水放送所、こゝから電車ですこし行くと、熊本種馬所、農林省種鶏場、ゴルフ場などがある。

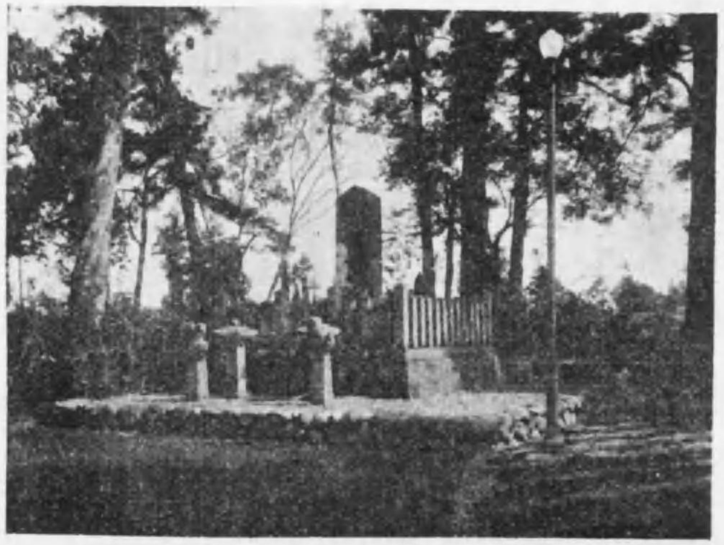
武藏塚

劍聖宮本武藏の墓は市の東、雲を突くやうな老杉立ち並ぶ大津街道の南、龍田村弓削にある。

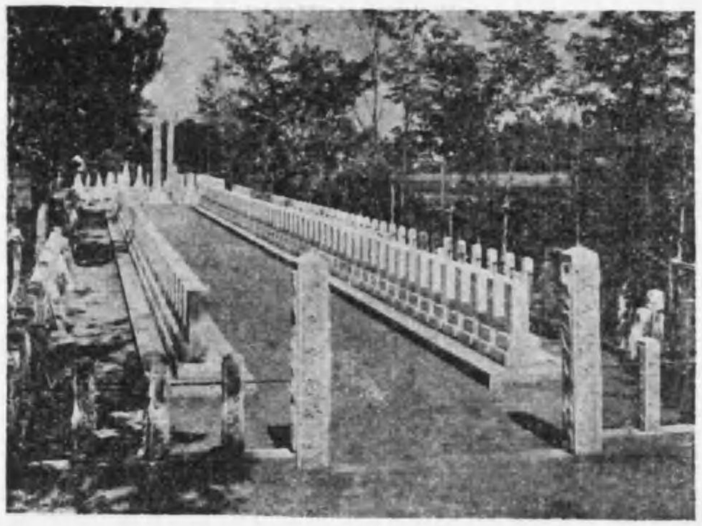
二天一流の劍豪武藏が、細川忠利公に招かれて、飄然として熊本に來たのは寛永十七年の春で、今の千葉城址に居宅を賜り、肥後武道の振興に力をつくした。

武藏は又、書、畫、彫刻、金工などにも非凡の腕をもち、肥後の文化に尠からぬ貢献をなしてゐる。中にも細川家に傳はる「兵法五輪書」は兵法の奥義であるのみならず、文章に筆勢に天下の秘書といはれてゐる。

熊本に住むこと五年、正保二年五月十九日六十二歳をもつて、遂に肥後の土となつた。



武藏塚



櫻山墓地

「藩公江戸參覲の盛儀を草葉の陰から親しく拜したい」と、武藏生前の言葉により、この地を墳墓の地に選ばれた。

一世の聖劍、人間武藏としての面目が、窺はれるではないか。

櫻山祠堂

龍田山の南麓、大津街道にそうた黑髪町宇留毛に、櫻山祠堂がある。

この祠堂は幕末維新に、幕吏の兇刄に斃れた、肥後の勤王志士宮部鼎藏、高木右衞門等の勤王家を祭れる誠忠の碑と、太田黑伴雄、加屋霽堅以下神風連の熱血百二十三士の靈魂を祀る所である。整然たる多數の墓標は至誠至純、肥後藩士としての義烈を物語つてゐる。

この百二十三基の墓標は、神風連の同志、市内藥園町、故馬場伍藏翁が、生き殘りの記念として、十四五年前建立したものである。翁の至誠又掬むべし。

水前寺

寛永九年、細川忠利公が豐前小倉から肥後に入國された時耶馬溪羅漢寺の僧玄宅は、公に從つて肥後に來り託摩原に水前寺といふ一寺を建て、こゝに住んだ。その後、成趣園といふ御茶屋が設けられた。

然るに、成趣園と水前寺が、混同されるので、水前寺を玄宅寺と呼ぶことにしたが、成趣園は今日に至るまで依然として水前寺と稱してゐる。

市電の終點、水前寺停留所で下車して、出水神社の大鳥居をくゞると、成趣園、すなはち水前寺公園である。

大きな樹木、森閑とした園景、滾々と湧く清水大小幾多の芝山、悠々たる鳥魚の戯れ、風流な小橋、山水木石、いつとして雅致妙趣ならぬはない東海道五十三次を模したものと傳えられる水前寺

古今傳授の間と護全公銅像

出水神社

の景觀は名畫も及ぶところではない。眞に天下の名園である。

古今傳授の間　成趣園を入ると水のほとりに古風な茅屋があるのが、由緒深い古今傳授の間で、文學的に歴史的に重要な古い建物である。鎌倉時代までは和歌の研究は相當盛んであつたが、室町時代になると日一日衰へた。當時和歌國文の道に通ずる第一人者として、丹後の田邊城にあつて、大阪方の小野木重勝と戰つてゐた細川幽齋公が、後陽成天皇の御勅命により、京都の桂ノ宮の御茶室に於て、皇弟智仁親王に對し、親しく古今和歌集解説の奥義を傳授せられた。その時の茶室が、古今傳授の間で、明治初年特に肥後藩にたまはり、明治四十四年今の如く手を加へて建設された三百年前の遺物である。今も室内には當時の有名な書畫、古器の類などが飾られてある。

出水神社　水晶のやうな水の流れに悠々眞鯉、鮒鯉の大群が泳ぐ橋を渡ると、左側に縣社出水神社がある。舊藩士が明治十一年に君恩を慕ひ、細川家歴代の神靈を祀る宮で、境

内にある「袈裟文の手水鉢」は、清正公が征韓の際、持參せられた京城南門の舊礎石である。祭典は毎年四月と十月の春秋二度、神社の後の竹藪の中に、例の玄宅寺の跡がある。

動物園　關西一の大動物園として誇る熊本動物園は出水神社前の小徑を辿り、日露戰役に戰死された「長岡護全公の銅像」を左に仰いで行くと、動物園の正面である。園内の面積凡そ五千二百坪、網羅された獸類百九十種、鳥種四百六十種、爬蟲類兩棲類等約二十種、總計六百七十余點に及ぶ世界各地の珍獸奇鳥が、嬉々として或は池に、或は檻に、元氣よく活動してゐる。收容禽獸の種類の多いのと、規模の壯大なのは日本四大動物園の一に伍し、それと相俟つて演藝場、子供遊戯場、食堂等の設備至れり盡せりの觀がある。

教育資料として、子女の見學は勿論、水前寺を訪ふ人々の是非一覽しておく必要がある。

熊本動物園

書津湖

書津湖

水前寺の水が、南流して十數町、渺々たる湖が書津湖である。瓢箪型の周圍一里二十町、その中央の相迫るところの土橋を境にして、上書津、下書津にわかれ、湖尻は加勢川にそゝいでゐる。廣々たる湖には釣りする無數の小舟やボート、スカール屋形船などが浮び、殊に夏季は市内唯一の水郷に、憧がれる遊客で、賑ひを見せる。湖上に舟を浮べると、昔、鎭西八郎爲朝の强弓におそれて迂回して、飛んだといひ傳へられる雁回山や、翠色こゆき飯田山、金峯山などが手にとられ、風のまに〳〵流るゝ水藻にも詩情を唆り、都塵を洗ひさるの思ひがする。

こゝは曾つて「近代の戀愛觀」の厨川白村博士が、蝶子夫人と遊んだローマンスがあり、夏目漱石が第五高等學校短艇部の隆盛をはかつた由緒の湖である。

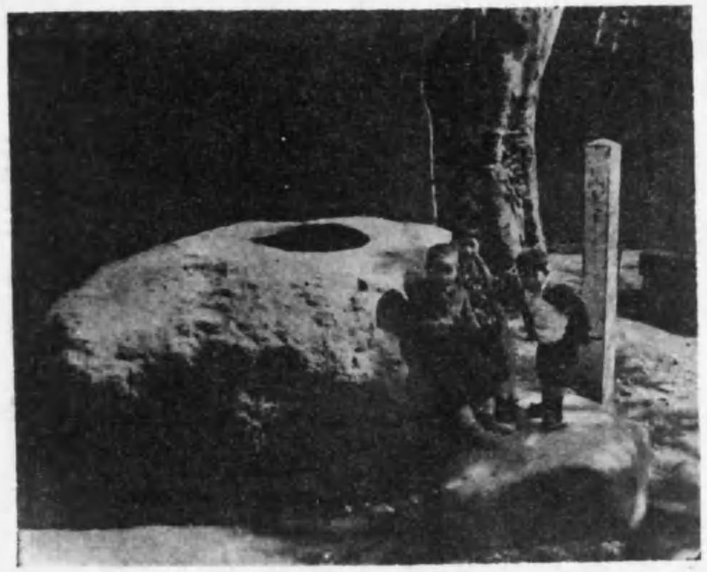
託摩ケ原古戰場

熊本市水前寺公園の東、北方から、白川の南岸にかけた一帶が、所謂、託摩原古戰場である。

天授四年秋九月二十四日、九州探題今川了俊は、大内義弘、同盛見兄弟、大友親世、少貳賴國等の友軍を率ひ攻め寄せた時、南朝の忠臣菊池武朝は、征西將軍宮良成親王を奉じてこゝに會戰し、寡兵よく敵を擊滅した。

この日、武朝は朝霧かける曉に、味方の軍勢を三隊にわけ一隊を健軍神社の森陰に、他の一隊を西方、田野の間に潛伏せしめ、自ら中軍の將として南面に羽翼を張つた、この時敵の大軍は鬨をあげつゝ、攻め寄せ此處を先途と戰つた。しかし如何にせん敵は大軍、味方は無勢の悲しさ、一族以下、銳卒數十人、見る〳〵うちに討死し、主將武朝も遂に負傷するに至つた。この時、突如征西將軍宮良成親王は、この亂戰の中に、御みづから馬を躍らせ給ひ、敵將了俊に馳せ向はせ給ふ

託摩ケ原記念碑



國分寺の礎石

その御奮戰に味方の頽勢挽回し、遂に雲霞の如き敵の大軍を擊破するに至つたのである。この時武朝年十六歳、將軍宮はそれより一二歳御年長の、十七八歳にわたらせられたと拜察される。

君臣主從、獅子奮迅敵の大軍を驅逐せる當年の壯觀を偲ばじ、今なほ心胸の躍るものがある。

國分寺趾　水前寺公園の、大鳥居前から、砂取町に行く途中、九州立正高等女學校の南側から、遙か下手の、堂川までが國分寺の境内で、奈良朝時代には砂取町西北部にかけ、日本でも五六位を下らぬ、高壯な國分寺の七堂伽藍が立ちならんでゐた。今は古瓦の破片と數個の礎石が華やかなりし昔を語り顏に殘つてゐる。

當時、國府も砂取町附近にあつたやうで、砂取は一時繁華の中心をなした。なほ古代民族の一大聚落をなしたと思はれるのは、公設グラウンド、水前寺、砂取町附近にかけ古代民族の使用した土器などが出ることからも想像される。

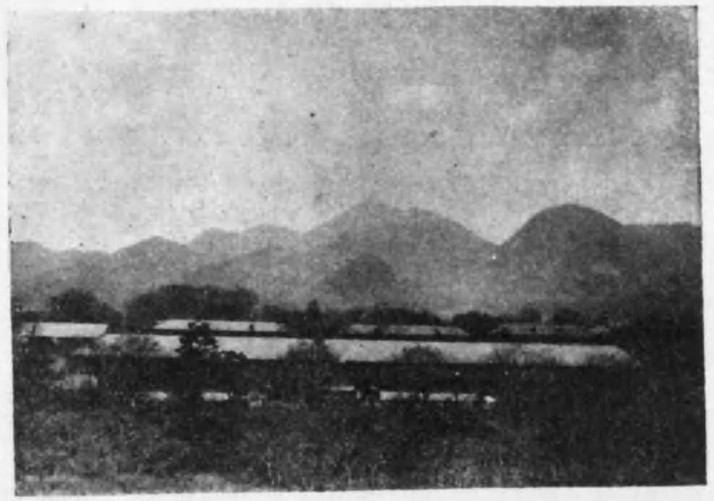
金峯山

森の都の西北に、高く聳える圓錐形の山が、金峯山で海拔六六五米突、今では頂上まで自動車道路ができ、談笑のうちに登れる。この山は、今から百三十年前までは松、杉、檜等の巨木が鬱蒼として茂つてゐたといふ。

頂上は一望開濶、東に阿蘇の連山、眼下に肥後平野を大觀し、西に近く雲仙嶽が有明海をへだてて高く聳へ眺望の快絶さは筆舌の盡すところではない。

頂上には金峯山神社を祀る。この社は、淳和帝、天長九年に、和州金峯山權現を勸請したもので、後醍醐天皇の御代、菊池肥後守武重公、肥前の軍勢と戰ひし時、この社に祈念し凱旋したといふ。

この因緣深い武重公の靈を祠る一宇の石殿も數年前建立された。この山はいはゆる火山性で、明治二十二年七月の大地震、曾つては文政九年にも鳴動實に六十餘日に及んだといふ



金峰山の遠望

が、時たま熊本市民を驚かすことがある。

文豪夏目漱石の草枕に出る「峠の茶屋」は、蜜柑の名所、小天に越える金峯山の中腹野出(のいで)の峠を書いたもので、現在傳へられる鳥越の峠ではない。

「峠の茶屋」で、雨の霽れ間を待つうちに天狗巖が姿を見せるところなど、これは野出の峠から見える天ケ庄の景觀を述べたものである。今もその當時を想ひ出す茶小屋がある。

岩戸觀音と武藏作不動尊

岩戸觀音　金峯山の、西腹に突出する小山は、岩戸山で、古刹寶華山靈巖寺がある。寺側の洞窟の中には、唐土より渡來した、石休四面の觀音像が、安置されてゐるので俗に岩戸觀音といつてゐる。岩壁の五百羅漢の像も、面白味がある。宮本武藏は、曾つてこの洞窟に籠つて、兵法五輪書を著はした。寺には武藏の刻んだ不動尊や國寶となつてゐる佛像もある。

吉松稻荷　金峯山下、風光絶佳の島崎町、栗山臺頭に鎭座する吉松稻荷は、最近神殿その他の增改築を見た、粘德稻荷の分靈を祀り、靈驗あらたかな稻荷として近郷の人々に信仰されてゐる。

花岡山

熊本驛の西北に接する高さ百三十三米の丘陵が、花岡山である、近郊第一の眺望地で、市街を俯瞰される。西南役の際、薩軍が山の中腹から砲陣を布き、熊本城に猛烈な十字火をあびせたものである。

この山を、一名祇園山といふのは、昔山頂に祇園社が建つてゐたからで、同社は後年にいたり、北岡の一丘陵に移つた、今の北岡神社である。

こゝは、四季遊客たへず、殊に陽春の頃は櫻、桃、菜の花の美を愛でるもの多く、そのころには茶小屋など軒を並べ賑やかである。

阿蘇殿松　登山道路のつくる所に、數株の老松があり、記念碑が建つてゐる。こゝが、阿蘇殿松(あそどのまつ)で、それには聞くも痛ましき一片の哀史がある。

加藤清正公が、朝鮮出征の留守中、薩摩の梅北宮内左衛(うめきたくない)

花岡山

門國兼が反逆を起し、肥後に攻め入つた反亂は、當時征韓軍の本營、肥前名護屋にあつた、秀吉公の憤慨となり、その反亂の原因は、阿蘇家の使嗾によるものとの讒言を信じて、文祿二年八月十八日、熊本城代下川又左衛門に命じて、その頃、熊本城内に寄食してゐた阿蘇惟種（これたね）の嫡子惟光（これみつ）をこゝで自刄させたのである。時に惟光歳僅かに十二、自ら刄をとつて果敢なく短かい人世を散つて行つた。この自刄の地に植えたのが阿蘇殿松で、心なしか松籟にも當時の痛ましい場景が偲ばれる。

墳墓と位牌は今なほ市内細工町の阿彌陀寺に淋しく殘つてゐる。

陸軍墓地　阿蘇殿松から、やゝのぼると招魂社がある。さらに、少し登ると數百株の櫻樹に圍まれた陸軍墓地がある。又明治九年神風連の變に斃れた、種田少將、參謀高島大佐、安岡縣令等の墓が並び、附近には日清役に際し日本軍最初の戰死者松崎大尉の墓、乃木希典將軍が熊本旅團長の頃、（明治十九年）失はれた長女恒子の墓、切支丹殉教加賀山隼人の息女の墓などもある。

鐘掛松　清正公が熊本城を築くにあたり、花岡山頂上に近いところにある、巨大な松の樹に鐘をかけ、つき鳴らして土工役夫の始業休息を合圖に用ひたといふので鐘掛松である。

なほ、山頂にある祇園社阯の西、崖に突き出した大磐石は、八枚石と稱し、清正公は休憩の場所として、頗る氣にいつてゐたといふ。

花岡山バンド　この鐘掛松のほとりは、熊本洋學校出身三十餘名の熱烈なキリスト教信者が明治九年一月、所謂千八百七十六年第一月二十九日の土曜日を期して、集まり、天に祈り、讃美歌を歌ひ、至誠報國の宣誓を行つた。所謂「花岡山バンド」なるものが、即ちこれ、當時の青少年の多くは、後年――明治・大正・昭和の三代を通じ、

大いに活躍してゐる。即ち文豪德富蘇峰、海老名彈正、宮川經輝、小崎弘道、横井時雄、金森通倫、紫藤章、浮田和民の諸氏を始め錚々たる人々を、この「花岡山のバンド」から出してゐる。然して、茲に肥後基督教徒をつくり基督教の日本化を絶叫したのである。これによつても、當時の青少年の意氣と、氣慨が窺はれるではないか。

細川邸

花岡山の東麓、鬱蒼たる大きな森がある。こゝが舊肥後藩主細川邸で、横手町北岡の地名をそのまゝに北岡邸とも呼んでゐる。もと妙解寺の跡で、細川家歴代靈廟のあるところで、寺は、肥後入國第一代の忠利公追福のため次代光尚公が建てられたものである。

鐘掛松

細川家の墓は、立田山泰勝寺にもあるが、天下に英名を謳はれし、靈感細川重賢公の墓は、こゝにある。

成道寺

成道寺と天福寺

熊本北方の一幽邃境である、成道寺と、天福寺も半日の清遊に杖を曳くにたるところ、その成道寺は、花園町柿原にあり、泉石の趣致と清泉は盛夏の涼味を掬むの境地で、本寺はもと、菊池郡隈府町正覚寺の末寺で應永三十三年高僧寰中元志和尚の建立にかゝり、寛永の頃から藩の重臣澤村家の菩提寺となつた。今は廢寺となつてゐる。

成道寺の、東方三町餘の山中に、細川綱利公の時代、雲歩行岩道人の開基したといふ天福寺がある。境内に見事な竹林があり、竹を繞つて石佛、石段、石燈籠が無數に點在し成道寺と共に都塵を洗ふにたるところである。

石神山　島崎の石神山は、標高一六〇米の山で、山の北麓は、有名な島崎石の産出により削られてゐる。絶頂を極むれば、眺望實に雄大である。近年山麓まで、自動車道路が開かれ、或は地方人士の盡力によつて、古來有名な千原櫻を山中に植えるなど、次第に市民遊園地としての面目を改めて來た。

北岡神社

熊本驛から、電車通りを二町位行くと、左側に小高い縣社北岡神社がある。素盞嗚尊、稲田姫命八柱子神を祀る。祇園社ともいつてゐる。朱雀天皇の承平四年、兇徒しば〳〵叛亂し、惡疫流行したので鎭護のため勅願により京都の祇園社を勸請したるもの、當時二本木町の西南湯ノ原、今の二本木グラウンドにあつたもので、歴代天皇の崇敬厚く、加藤、細川の兩國主又厚く崇敬された。社殿は後、花岡山に移され、明治二十五年社殿を、今の地に遷座されたものである。毎年八月一日より五日迄盛大な例祭が行はれ四日には神幸式がある。

北岡神社

清正公母堂の廟

熊本驛から、北に十二町、横手町の中ほどに、清正公母堂の廟所たる妙永寺がある。母堂は、名を伊都といひ、聰明にして頗る氣丈な婦人であつた。幼くして父清忠君に死別された清正公は、母君の手一つで成人し、遂に不出世の英雄として、後世にその名をとゞめたるは、畢竟母堂養育の力によること云ふまでもない。清正公の孝心おしして知られる。慶長五年八月、六十八歳を以て母君入寂されるや、公の悲歎やるかたなく、一字の梵刹を建立し、ひたすら母君の冥福を禱られた。妙永寺がそれで、寺内には、清正公自作の尊像を安置され、堂の後の、古びた墓石は、公が朝鮮征伐の時、持ち歸られたものである。清正公の片鱗が窺はれるではないか。

清正公母堂像

東雲庭園

熊本驛から、眞直ぐ行くこと一町餘、二本木塘から少し南下すると、關西有數の二本木遊廓である。西南役までは、京町臺にあつたが、戰火に燒けて此處に移つた。遊廓の入口から程近い東雲樓は、樓主故中島茂七氏が明治十六年から、同二十六年迄、

十ケ年の歳月と、巨費を投じて造營した一大庭園で、假山泉石の雅趣は、流石に見るべきものがある。

本樓は今こそ遊園地になつてゐるが、もとは藝妓四十人、娼妓八十人を擁する豪華な遊亭であつた。『東雲のストライキ……』の俗謠で謳はれる、本樓の自由廢業騷ぎは、明治三十三年のころである。何分昔ではあり、娼妓半數が結束してストライキをやつたのだから、その反響は相當根强いものがあつた。我國における勞動爭議、同盟罷業の嚆矢で、これに刺戟され內務省では各府縣の娼妓取締を全國的に統一するに至つたといふ面白いエピソードはこゝから生れたのである。

旦過の瀨の戰

二本木石塘の、下手が旦過の瀨で、右岸は二本木町、左岸は、飽託郡日吉村字世安で、今は、市の接續市街をなして、工場や住宅が立列んでゐるが、鎌倉室町時代は、世安の附近に、無漏寺といふ寺があり、旅僧がよく來て一宿し、旅僧は朝早く起きて白川をかち渡りして旅路についた、旦に過ぐる意味からこの邊を旦過の瀨といつた。

東雲庭園

天正八年の頃この一帶の白川をはさんで一大會戰があつた。旦過の瀬の戰がそれである。當時、肥後は大友宗麟に從つてゐたが、天正四年から肥前の龍造寺、薩摩の島津が浸入し、今や三大勢力で夫々掠奪せられるに至つた。

檜垣姫

其處で、大友氏に通じてゐた、阿蘇家の老臣御船の城主甲斐宗運は、義をすて、島津に服しそれ等諸城主を擊滅すべく、總勢一萬騎を率いて御船城を發足し、旦過の瀬附近で、合戰し遂に凱歌をあげた。この合戰は戰國時代における肥後の歴史上に注目すべき戰の一つである。

檜垣姫 市内二本木町を、南に下れば、九品山蓮臺寺に達する。俚俗檜垣寺と稱してゐる寺内に檜垣女の塔石及檜垣の水とて古井戸が殘つてゐる。檜垣女は肥後の出身で、才色兼備の婦人であつた。若い頃は西國の首都、筑前太宰府に住み、後更らに京都に在り、和歌に長じ、老後はこの白川のほとりの蓮臺寺に住み、岩戸觀音に詣でゝゐた。天明年間岩戸山に、石の五百羅漢を建てる際「檜垣自作の像」が發見された、今雲巖寺の寺寶となつてゐる。「老はて、頭の髪は白川の水はくむまで老いにけるかな」は老後の身を果敢なむ寂しい檜垣女の心境が描かれてゐる。かの

「檜垣家集」の一卷は、平安朝時代の文學的作品として、女性詩人の人生詩として多大の興味がある。

二本木國府の趾 往古、奈良朝時代に設けられた、最初の肥後國府は、二本木町宮寺の地で、この所を四神相應の瑞地として、國府の廳舍永く存し、政治の中心となり、堂々たる大厦が、建てられてゐた。その當時の地名が、今なほ用ひられてゐる。即ち在廳屋敷、國造小路、饗町小路、無漏小路、車屋敷、角井などである。現に古町小學校の近くに國府中に建立せられた寺院の礎石が殘つてゐる。

代繼神社

熊本市電中通り停留所下車、東北へ辿ると縣社代繼神社がある。白川に臨み、住吉大神、紀貫之、細川藩祖幽齋公を合祀したもので、應和の昔、國司紀師信が住吉大神とその祖先紀貫之を祭神として、今の花畑公園附近に建てたが、清正公の時代に、今のところに遷宮したものである。

代繼神社

飽託郡

飽託郡は、もと飽田、託麻の二郡にわかれてゐたが、明治二十九年に併合し、今の飽託郡となつたものだ。

熊本市と共に、肥後文化の中心地であつたから、傳ふべき名勝史蹟多く、託摩ケ原の古戰場、金峯山岩戸觀音、立田山、八景水谷、宮本武藏の墓等は何れも飽託郡に屬してゐる。これは觀光の便をはかるために熊本市の部に述べたとほりである。

大正十年以來、數回に亘り十四ケ町村を熊本市に編入したので、地域は著しく狹められ現在面積十五方里三四、戸數一萬六千六百、人口九萬九千である。

川尻町　川尻町は加勢川と綠川の兩河に面し、郡内唯一の都邑である。

この地は、建久年間、川尻三郎實明が居城し、舊藩時代には、細川藩の御船手及米倉を設け、奉行を置いて統治してゐた。昔は、萬船輻輳した要津であつたが、地殼隆起し、海岸より二里餘もへだたつたので昔日の如き面影はない。

川尻城阯は外城にあるが、今は田園化し尋ねるに由がない。盆の精靈流しは名物の一つである。

大慈禪寺　川尻町外の大梁山大慈禪寺は、弘安年中寒巖和尚の開いた禪院である。この寺はもと、曹洞宗法皇派の一本山であつたが、中世にいたり堂宇燒失して衰へ、永平寺の末寺に列するやうになつた。されど末寺今尙四十一箇寺を有し、後奈良天皇の御綸旨を始め寶物古文書など甚だ多い。

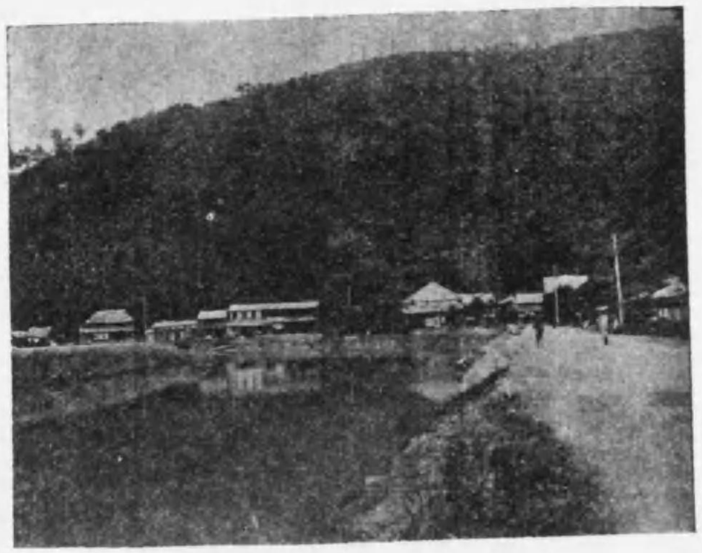
川尻町から東南に約半里、川尻電車の終點近くである。

寒巖禪師　寒巖禪師は大慈禪寺の開祖である。順德天皇御三の皇子として建保五年に生れられた。幼にして叡山にのぼり臺敎を學び、のち永平寺の開山後、道元禪師に從ひ道を聞き寛元元年宋國に學び歸朝後、宇土郡花園村古保里に居住し、弘安元年大渡に大慈寺を建立された。

亀山法皇は禪師の德業を叡感あらせられて論旨を下し、紫衣及び宸翰を賜ひて官寺に列せしめられた。正安二年八月二十二日遷化せられた。時に年八十四、大慈寺境内に御陵がある。

百貫石港　百貫石港は、坪井川の河口にあつて、有明海に面し、島原方面との交通盛んである。熊本市から

大慈禪寺



百貫石港

二里餘、本港は縣において二年前より、二三千噸級の船舶を繫留する計畫の下に、修築中であるから、竣功の曉は熊本市の海運に革新を齎らすであらう。

河内蜜柑　蜜柑といへば、河内蜜柑と、小天蜜柑を、聯想するやうに、それだけ有名である。河内村は、三面に山を繞らし、西に有明海を控へ、景勝の地、全山の萬木色づく、初冬の季節、黄果累々として鈴なるさまは美觀である。年産額二十万圓に及ぶといふ。海岸の河内溫泉は都塵を洗ふに好適の地である。

高橋荷稻神社　飽託郡城山村高橋稻荷神社は、京都伏見宫幣大社伏見稻荷宮の分神で、大永年中隈本城主たりし、三河守親員入道寂心、上代城を築き、城廓鎭護のため、勸請したもので、其後、城山の西北麓、山腹巨石の前に奉齋せるもので、爾來二百七十五年の歷史ある稻荷神社で遠く縣外より參者踵を接してゐる。熊本市を去る西郊里餘、境内の景趣また絕佳である。

宇土郡

宇土郡は、宇土半島を占め、東に飽託、下益城の兩郡に接し、西北は、有明海をへだてゝ、島原半島と相對し、南は八代海を擁し、天草群島を指呼し、風光明媚の半島である。

菊池氏の支族宇土氏、名和氏の根據地となつたり、小西氏、細川氏と時代が移つてゐるので、遺蹟が多い。

かの源頼朝の名馬「生唼」は、宇土浦上の牧場から出たと傳へられてゐる。

宇土半島有明海岸は、海水浴場、避暑地として名高い。

面積十方里二六、三町九ケ村、戸數八千二百、人口四萬七千である。

宇土町　宇土町は、宇土半島の頸部にあたり、近くに綠川をひかへ、要衝の地で、古來英雄の根據地となつた。正保三年以後は、細川氏の支藩、宇土藩のあつたところ、三角線は、こゝから岐れ、物資の集散が盛んである。

縣立宇土中學校もあり、地方教育の一中心をなしてゐる。

町の近郊、轟村に、清泉の湧くところがある。舊藩時代、細川月翁公が、この轟から、樋管式の水道を町まで、布設した珍らしい工事は、今なほ町民何れも、その恩澤に浴してゐる。

住吉海岸

宇土城趾　宇土郊外に、西岡城趾、宇土城趾がある。宇土城趾は、小西行長の城趾で、宇土中學校背面の臺地がそれ小西氏は、天正十六年加藤氏と共に、肥後に封ぜられ、宇土益城、八代及び天草を領有し宇土に築城した。慶長五年關ヶ原の役起り、城は清正のために包圍され、城代小西集人防ぎ戰つたが、遂に敗れ自盡した。小西滅亡後天守閣は熊本に移された。現今の宇土櫓がそれである。

住吉海岸　三角線住吉驛から三町余、綠川口の一角に、突出する青嵐の小半島に縣社住吉神社がある。後三條天皇の御宇、延久三年の昔、菊池將監則隆が勅を奉じて、寶祚無窮海上安全のため、攝州住吉宮の分靈を奉遷した由緒深い古社で、殿堂古雅、法性寺關白の歌に「眺むれば思ひのこせることぞなき宇土の小島の秋の夜の月」とあるとほり、風光明媚の地である。

長濱海水浴場　三角線長濱驛に下車すると、幾多の旅館軒を並べてゐる。宇土半島隨一の海水浴場として有名になつた。綱田海岸と共に夏期は避暑客で賑やかである。

赤瀨鑛泉　三角線赤瀨驛より、長い坂を下ると、赤瀨鑛泉場がある。炭酸泉でもと蟹の地獄といつてゐた。近時旅館の設備も整ひ、夏は海水浴場として來遊するもの多い。

金桁鑛泉　宇土半島南端、郡浦村金桁（かなけた）にある金桁鑛泉は含鐵炭酸塩類泉である。三角驛に下車、自動車の便があり幽邃の地である。

三角港　山紫水明の三角港は、宇土半島の尖端にある。往時、三角は交通不便な一漁村に過ぎなかつたが、明治十四年縣の請願により、內務省水理工師ムルトル氏が、實地踏査の結果、「これぞ理想の港灣だ」と推奬し、いよ／＼同十七年に至り、工を起し同二十年竣成、港灣の構造と工事の堅固、外觀美は、全國其の比をみない。近時その本港は、昔の面影をとゞめ、その殷盛は際崎（きはざき）に移つた。

十年前、十五萬圓の縣費を投じ、この際崎に築港を施してから、一層船舶の出入頻繁となつた。さらに、先年來「大三

三角本港

角港」完成の計畫がたてられ、政府及び縣において巨費を投じ、この際崎に大築港を進めてゐるので、これが完成の曉は九州の要港として、斷然樞要の地歩を占むること想像に難くない。

三角附近一帶は、風光明媚で、一幅の名畫をみるやうだ。別莊地、療養地、避暑地として賞讃されてゐる。

不知火　筑紫の怪火――不知火は、毎年陰曆八月朔日の曉、八代天草の海上に現はれる靈火で、天下の奇觀であり、肥後名物の一つである。廣袤實に二十餘里、夜光の玉を並べたやうだ。

往時、景行天皇、筑紫御巡幸の際、この怪火が、海上に現はれたので、天皇何の火なるかを問はせられしも知る人なし。不知火の起原これより起ると――學說には、燐光と說き、海中動物の閃光といふが依然として不知火は不火知、千古の謎である。

觀光の地は、宇土郡不知火村の高良と、同郡松合町永尾で、此處を俗に流燈場といつてゐる。

西遊記の一節に曰く、八ツ近き頃に遙か向ふに、波を離れて赤き色の火一つ見ゆ、暫らくして、その火、左右にわかれて、三つになるやうに見へしが、それより追々に出る程に、海上四五里の間に、百千の數をしらず、明かなるあり、幽なるあり、滅るあり、燃るあり、高きあり、低きあり、誠に甚だ見事にして目をおどろかせり、其の火の色みな赤くして灯燈を遠くのぞむが如し……扨夜明るまでかくの如くにして、旭出れば火の光り漸々に薄く成り行て、星とともに消滅す、むかし火の前の國、火の後の國と名付られしもゆへ有ることなり、中古の世、火の字をいみて、肥後肥前と改られしとぞ。

玉名郡

玉名郡は、本縣最北の郡であつて、中央部に小岱山（しようたいざん）が聳え、菊池川貫流し、流域一帶は肥後米の一大產地、郡の中心地は高瀨で、文化の中心また、こゝに集つてゐる。

高瀨は、菊池川の河口にあつて、古來支那貿易の要津で、支那文化の影響を、うけてゐることが尠くない。

疋野神社、伊倉八幡、大野の大蘇鐵など、行樂の地が多い。面積二十八方里一四、六町三十七ケ村で戶數二萬五千六百、人口十五萬四千五百である。

高瀨町　高瀨町は、菊池川畔に臨み、古來文化の中心地で、舊藩時代には、細川藩の倉庫がおかれ郡內の行政、經濟、教育の要地と稱せられ今日に及んでゐる。明治維新前後には、有名な學者が集まり私塾を開き、大いに勤王の思想を鼓吹した事實もある。

近年全町に潑剌たる氣分漂ひ、大いに面目を革めるに至つた。

繁根木八幡宮　高瀨驛から五町、一丘陵に鎭座する繁根木（はねぎ）八幡宮は、應和元年山城國、石淸水八幡宮を勸請したもので彼の筑後川の戰に、懐良親王直屬の部將として奮戰した、大野式部大輔乘資は當八幡の別當であつた。

樓門の建築は、結構壯麗、今なほ建築美術界の、資料として珍重がられてゐる。

小天蜜柑山

廣福寺　高瀬驛より北に約一里、石貫村の廣福寺は、菊池武時の建立で、大智禪師の開基である。寺は菊池家代々の菩提所で、歴代の位牌ならびに同家に關する數十通の古文書や貴重な寺寶が尠くない。

立願寺温泉　高瀬驛から二十五町、高瀬町の郊外、彌富村の立願寺温泉は、壇類泉で無色無臭、郡内唯一の温泉郷としてその名を知られてゐる。

背後の小岱山は躑躅の名所である。

谷村計介の墓　西南役の偉勳者、伍長谷村計介の墓は木葉驛から約十町、木葉村にある。宮崎縣の人で、明治十年三月四日の田原坂の激戦に斃れた。

小天蜜柑　高瀬驛から三里、小天村は、河内村と同樣、蜜柑の本場で加藤公時代から奬勵され今日に及んでゐる。

こゝは、文豪夏目漱石が、第五高學校教授時代の過去を追憶してものし、天下に令名を馳せた例の「草枕」に出てくる那古井温泉は、この村の小天温泉の情景を書いたもの、漱石黨の是非訪ふべき地である。

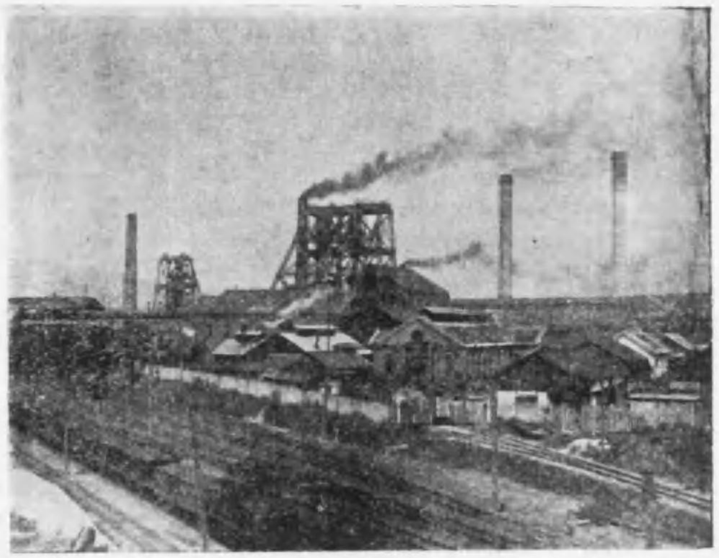
南關町　南關町は、玉名郡北部の町で、加藤公の時に、新城を築き南關城代をおかれたところ、昔は宿場として賑合つたものだ、現在は矢部川とこの町の間に、東肥鐵道が布設されてゐる。

下村の蘇鐵　玉名郡大野村大字大野下にある、「下村の蘇鐵」は、今から五百年前植えたもので、一見數株の相寄り、繁茂せる如き觀があるが、全く一株から分枝したもので、實に稀有の大蘇鐵で、天然記念物として保存されてゐる。

長洲町　長洲町は、有明沿岸にあるだけ、昔から漁業が盛んである。對岸の島原とは定期船があり、近時、漁港としての面目を改めるに至つた。

荒尾町　玉名郡の最北端で、福岡縣と接觸する荒尾町は、萬田、四ツ山の兩炭坑を持つので、近年非常な發展を示してゐる。

下村の大蘇鐵



萬田炭坑

萬田・四ツ山炭坑　黒ダイヤの都、萬田――四ツ山兩炭坑は、三井三池炭山の代表的寶庫、東洋第一と誇る四ツ山炭坑は、大正十二年の開坑で、開坑の深さ實に一千四百尺、有明海の地下で鶴嘴を揮つてゐる。

萬田坑は、明治三十六年の開坑、深さ一千尺、この無盡の炭脈は、今から四百年前發見されたもので當時「燃える石」として薪炭に使つてゐたさうだ。明治六年政府で直營し、同二十一年四萬圓で三井が拂下げ、今日の隆盛をみるに至つた。

木葉猿　鹿兒島本線木葉驛の木葉村には、昔から奈良人形と並び稱せらるゝ有名な玩具木葉猿が造られてゐる。形態粗野、色調原始的で、一種の雅致風品を備へ、好事界に愛玩されてゐる。

木葉猿

鹿本郡

鹿本郡は、玉名郡と共に、肥後の北境を占め、福岡縣に接してゐる。本郡はもと、山鹿郡と、山本郡と二郡に分れてゐたが、明治二十九年併合し、鹿本郡と稱するに至つた。

景行天皇の遺跡や、菱形八幡宮の神話を始め、上古より史蹟に富んだところ、菊池氏と共に、王事に關係した歴史が多い。

明治十年戰役に際しては、山鹿、田原坂は城北の第一防禦線であつたから、薩軍は、こゝに全力をあげた。乃木將軍の田原坂における苦戰は、今なほ史實の語るところである。面積二十二方里六一、三町二十四ヶ村、戸數一萬五千、人口八萬六千二百に及んでゐる。

山鹿町　鹿本郡の中央、菊池川畔に臨む、山鹿町は、溫泉と、紙燈籠で、名高い。昔、山中の鹿、毎年冬になると、この地に下り、滾々たる水に、身を暖めてゐたので、村人怪しみ、よくしらべてみると、溫泉が湧いてゐたといふ。これが山鹿の起原である。

舊藩時代には、お茶屋の設けがあつて、參觀交代の上り下りには、必ず此處に一泊したものである。山鹿町から二里餘を隔てゝゐる、縣立鹿本中學校のある來民町は、團扇の產地で知られてゐる。

山鹿溫泉　山鹿溫泉の泉質は、炭酸亞爾加里泉で、硫化水素臭をおび、町營の溫泉は松の湯、紅葉湯、櫻湯

梅の湯の四つで別に龍の湯がある。これは舊藩公の湯であつて平時は閉鎖し、特に貴顯紳士の入浴に供してゐる。

來民の團扇、山鹿燈籠、山鹿溫泉

山鹿燈籠　山鹿名物紙燈籠は、技術の精巧なることに於て、まさに天下一品である。毎年八月十六日の湯祭りに、町民は競つて紙燈籠を作り、大宮大神宮に献じ、夜を徹して大賑合である。

この燈籠は、康平年中菊池則隆の時に始まり、慶長以後にいたり、頗る巧妙を極めた。材料は全部紙を用ひ、宮殿、神社、五重塔、城櫓等を製作してゐる。

チブサンの古墳　山鹿町の西十餘町、平小城村大字城區に、チブサンの古墳がある。この古墳は、鍋田川のほとりの畠地にあり、一をオブサン、一をチブサンといつてゐる。そのチブサン古墳は、貴人の古墳らしく、その中にあつた男型の石人は今、東京帝室博物館内に保存されてゐる。

相良觀音　鹿本郡内田村大字相良の地にある、相良觀音は傳教大師の開基と傳へらるゝ名刹である。本尊は、丈六座身の千手觀音菩薩像で、往年後朱雀天皇の皇后御出産に際し、この觀世音を祈り給ひて、御降誕あ

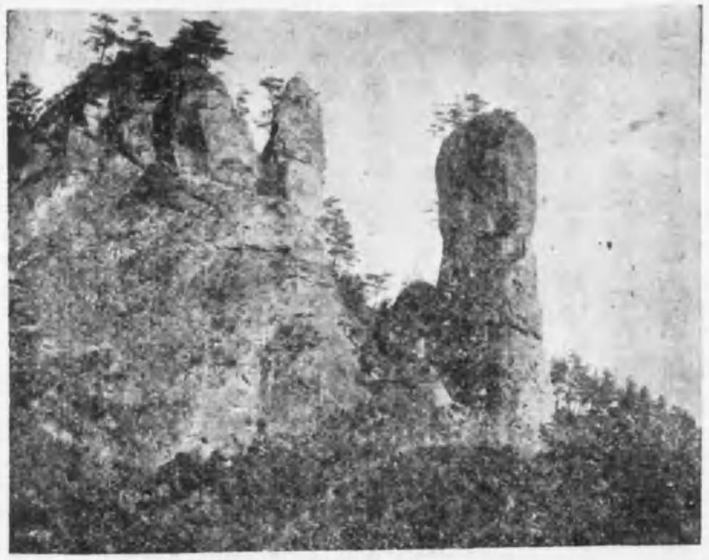
りしといふ由緒の觀音である。

不動岩　山鹿町より北に一里餘、三玉村蒲生山の山上に巨岩天を突くのが不動岩、高さ五十間、その偉觀は天下の珍である。

鍋田の横穴群　山鹿町から一里、鍋田川の西岸一帶の岩壁に、三十餘個の横穴式古墳がある。何れも千三百年前のもので、内務省指定になつてゐる。本古墳は、出入口に、彫刻があるので名高く、その中に特に興味あるのは、鍋田川を渡つて、右手にある横穴前壁の彫刻で、正門の人形は、右手に劔を持ち、側に弓を立て、その下に甕の如きものをもつてゐる。

背面の人形は、六本の矢を背負ひ、左手に、劔および弓矢を持ち、その下に矢筒があつて、六本の矢を立てゝある。又慣の如き浮彫もあり、珍らしき古墳である。

日輪寺　山鹿町より十五町、日輪寺は八幡村にあり、曹洞派の本山永平寺の末寺で、敏達天皇の御代、日羅百濟より來り、肥後に七大寺を建立した、本寺は、その一つで、小峯



不動岩

山日羅寺といつた。正和五年菊池武時は、川尻大慈寺開山寒巖禪師の法孫天庵懶義和尚を請ひ、本寺を再興し、日輪興國禪寺と改めた。爾來菊池氏との關係深く、寶物が藏されてゐる。

植木町　植木町は、もと山本郡の首邑で、鹿兒島本線植木驛、鹿本鐵道の起點である。鹿本郡南部の物資集散地である。

田原坂記念碑

十年役の田原坂は、西方一里餘のところ、田原坂破れて後は、薩軍は、この植木に第二防禦線を張りて死守したところである。

田原坂　西南役の激戰地として、天下に知られる田原坂は、鹿兒島本線木葉驛より東北に十二町、一丘陵地で、明治十年二月、薩軍はこの天險に據つて、官軍の聯絡を絶ち、死守したものである。

三月四日、官軍攻擊を開始して此處に十七日、血戰幾百回、かくて、遂に三月二十日陷落したが、死傷者實に四千、戰後有栖川宮熾仁親王御染筆の碑を坂の上に建て、斃れし勇士の忠魂を慰めてゐる。熊本市より北へ四里半、自動車三十分で行ける。

菊池郡

菊池郡は、阿蘇外輪山の西部平野を占め、所謂肥後米の本場である。本郡はもと、菊池、合志の二郡に分れてゐたのを、明治二十九年に併合したものである。王朝時代から、官城の地として諸史に現はれてゐるが、延久二年、藤原則隆の下向以來、その子孫は菊池氏を名乘り、肥後の名族として、赫々の武動をたてゝゐる。殊に吉野朝以來は九州勤王軍の中心となつて、征西將軍宮を奉じて肥筑の山野に活躍したこと、すでに世人の知るところ、實に菊池氏の武動は肥後の誇りである。

菊池氏沒落以後の歷史は、一變して熊本中心の歷史となつたが、久しく培はれた菊池氏の遺德は、今なほ教育に、文化に、政治に現はれてゐる。

面積三十方里一二、二町二十三ケ村、戶數一万五千六百、人口九万一千二百に達しゐる。

隈府町　菊池郡中央の隈府町は、菊池氏が、一國の守護府を設けたところで、菊池文化の發祥地である。隈府城阯、菊池神社を始め幾多の名所史蹟がある。菊池電車の終點で、縣立菊池蠶業學校、縣立隈府高等女學校その他、地方經濟、教育、文化の中心をなしてゐる。

隈府城阯　隈府城阯は、町の東北にあつて、守山城ともいつてゐる。正平二十二年菊池武政の築城したもので今の菊池神社の地が、本丸一の天守の阯である。菊池氏代々の居城も、今は廢墟と化し、たゞその往年の純忠を城

菊池神社と櫻馬場

阯に傳へてゐる。

菊池神社　隈府城阯にある別格官幣社菊池神社は、武時、武重、武光、武士、武政、武朝等の諸公を祀る。長岡護美子の建言によつて、明治三年建立されたもので、同十一年には別格官幣社の班に列し、同時に當時殉難の烈士二十五柱を併祀された。

境内からは、菊池平野を瞰下し、景勝の地で、又肥後における櫻花の名所である。

社庫には、菊池家勤王に關する古文書が多く、そゞろに往年が追憶される。

懷良親王の宮阯　隈府城阯の北端、菊池神社と谷をへだて、相對する、松林の中に、俗に「内裏屋」と稱する懷良親王の宮阯がある。親王は金枝玉葉の御身を以つて遠く九州に下向され、征西將軍宮として十數年間征西府をこゝにおかれたのである。

正觀寺　隈府町の正觀寺は、興國五年、菊池武光の建立にかゝるもので、菊池家全盛のころは頗る隆盛を極め

た、菊池家の菩提所で武光、武政、能運の墓もこゝにあり、菊池家に關する古文書を多く藏してゐる。

月見殿の阯　正觀寺背後の高丘に殘る、觀月殿阯を一名月見殿といつてゐる。菊池武政が懷良親王の御旅情を慰め奉るために觀月の御殿を設けたところである。

菊池水源　菊池川の源流、菊池郡水源村の「菊池水源」は隈府町から三里餘、山紫水明の幽邃郷で夏なほ寒き感あり、盛夏の涼味を趁ふべく、遠近より訪ふもの尠くない。

水島臺の古戰場　隈府町から、西に一里半砦村に、水島臺の古戰場がある。

武光、武政の死後、武朝は、當時僅かに十二歳にして、懷良、成良兩將軍の宮を奉じて菊池に歸り外城のかためを嚴重にして外敵の侵入に備へた。文中三年十二月、今川軍の先鋒は山鹿方面から進擊し、翌天授元年七月十二日には、水島城に逼つて來た。今川軍もこの決戰は、九州における宮方と、武家の兩勢力の分るゝところと思つたので、島津、少貳、大友の出陣を促したが、島津氏は内訌を生じ怒つて歸國した。武朝は、この敵勢の沮喪に乘じて、猛然立つて

菊池水源

大津馬場杉並木と山鳴詩碑

風林として植つけたものである。豐肥線の車窓から、この天を摩す、杉並木を恋にすることが出來る。

攻撃したから、流石の了俊も、敵し難く散々敗北して九月八日肥後を引あげた。これが名高い水島臺の合戰である。

立野火口瀬　豐肥線瀬田驛から、立野に至る沿線の溪谷美は、旅行者の何れも推賞するところで、天下に誇るべき勝景地、こゝは大古、滿々たる水をたゝへし、阿蘇の湖が流れ落ちた、所謂火口瀬で、車窓から俯瞰すれば、千仞の谷は白川の流れ、その前面に倭山、大峯、冠岳の群峯聳へ、四季の變化又妙を極め一幅の畫をみるやうである。

大津町　大津町は、大分往還にそふ要路で、舊合志郡の首邑である。往時は合志郡代、大津會所があつた。藩公參覲交代の上り下りの宿場で、その頃はお茶屋などの設けがあつた。縣立大津中學校などがある。

熊本から大津まで五里、この道が所謂大津街道で、その左右は、老杉亭々として雲表に聳えてゐる。清正公が熊本城を築くとき、一朝有事の際は、軍馬を繋ぎ、又一面、防

阿蘇郡

阿蘇（あそ）は、肥後文化の發祥地で、阿蘇宮の鎭座地である。祭神健磐龍命（たけいはたつのみこと）の子孫は代々國造（くにのみやつこ）或は大宮司として地方的勢力を有し、肥後の政治に關係したことも少くなかつた。かの吉野朝時代における阿蘇家の勤王は、菊池氏の精忠と共に肥後の双璧といはれてゐる。

「世界的火山としての阿蘇が、日本代表の名山として、廣くその名を知られるに至つた。實に阿蘇の誇りであり、熊本の誇りである。

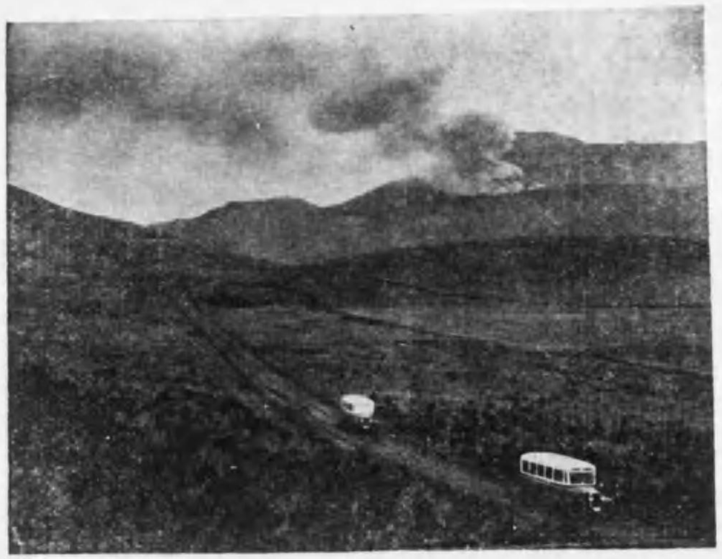
阿蘇は又溫泉の地、名勝の地で、年々增加する登山客だけでも莫大の數に達してゐる。殊に今回、國立公園として指定され、各種の觀光施設の完成と共に、登山者も一層多くなるであらう。

面積八十一方里二六、四町二十二ヶ村、戸數一萬六千九百、人口九萬三千である。

阿蘇山

阿蘇山は、富士山と共に世界に誇る、景勝日本の代表的名山である。

彼の富士は、單成火山として內外人に仰がれるが、我が阿蘇山は、世界第一の大火口を有する複成火山として推賞されてゐる。



阿蘇山の遠望

この世界的火山風景である、阿蘇の地貌は、幾千萬年來の、複雜な火山活動の結果、噴起したもので、大古は今の豊肥線沿線は瀬戸内海の續きであつた。その海中に阿蘇の活動が始まり、富士山のやうな山が、九州の中央に出現し、今日の九州を形成したものである。しかもこの大阿蘇噴火山は、夥しき土砂や、熔岩を噴出して、九州の殆んど大部分、即ち東は延岡、國東半島、南は人吉北は耶馬溪及直方の遠くまで流出した。その時、陷落によつて生じた大火口原を取卷く蜒々三十餘里の絶壁が、現在の外輪山で、南北直徑六里、東西四里、面積二十七方里を占め、その中に三町十一ケ村、生靈五萬が安住してゐる。

この五萬の人々が、安住する火口原の中央に幾つも幾つも火山が噴出した。阿蘇五岳がすなはちそれである。即ち、高岳・根子岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳の火口丘である。現在盛んに活動してゐるのは中岳火口丘で、噴烟濛

々天に沖し、萬雷一時におちるが如き鳴動、さては火柱天を焦す壯觀は凄壯そのものである。

この阿蘇五岳を圍る、大火口内に、滿々たる水を湛へた、所謂火口原湖をなした時代があつた。その水は、外輪山の一箇所を破つて流れ出し、今の白川をなすと同時に、火口原が出來あがつた。すなはち、流出したところが立野火口瀬である。

高岳は、阿蘇山中の最高峰で、千五百九十二米、根子岳(千四百三十二米)と共に、山岳家の愛好するところ、現に噴火してゐる中岳の噴火は、標高千三百米の地點である。

今や、阿蘇は我が日本國立公園に指定され、雄大なる大自然の景貌は、世界的日本の誇りと云つても過言ではない。

殊に、大阿蘇は、九州の地理的心臓部で、國際的幹線路の中樞にあり、雄大なる自然の變化に富み、草千里ヶ濱、砂千里ヶ濱、深葉の森林美、白川の溪

根子岳天狗岩と阿蘇山

西巖殿寺

谷美、波野の高原美などありて、探勝するところ尠くない。

阿蘇登山　普通阿蘇登山といふのは、中岳の噴火口見物をいつてゐる。火口の周圍四粁餘、深さ百五十米餘中は五つの火口に仕切られ、交互に活動し噴煙常に立ち上つてゐる。熊本より、その中岳噴火口迄自動車で往復五時間、山上近くに阿蘇山上神社及び阿蘇山本堂があり附近に數軒の茶小屋がある。宮地町の、阿蘇神社と、大觀峯に廻つても往復八時間あればよい。汽車は坊中まで一時間半、坊中より自動車で五十分にして噴火口に達する。山麓に湧出する、戸下、栃木、垂玉、地獄、湯の谷、内牧等の溫泉に一浴して旅塵を洗ふも又一興である。

西巖殿寺　豊肥線坊中驛より三町、西巖殿寺は、聖武天皇の御宇、唐人最榮の開基にかゝり、もと本堂は阿蘇山上にあつたが、天正年間兵火に罹かつたので清正公が現在の所に再建したといふ。本寺には歴史參考の寶物や國寶がある。

下野狩場の舊跡　阿蘇五岳の一たる、杵島岳の西麓平原は、往古健磐龍命の遊獵の地で、命薨ぜられて、阿蘇宮に鎭座の後は、その後旨によつて、阿蘇、鷹山、下野の三馬場で、毎年二月卯の日、大宮司及神宮の宮人が各風折烏帽子狩衣に夏毛の行縢を佩いて、腰に幣帛をさし、白木の弓、白羽の箭を以て猪鹿の類を射て神前に供し、又魚鳥も同じく、神領の地から之れを供してゐたといふ。狩には儀式慣例があつて、建久四年源頼朝が富士の牧狩の時も、阿蘇の牧狩を用ひたといふことである。この狩獵は天正十九年まで毎年行つて來たがその後廢止され現今では、魚鳥を神前に供するのみとなつた。

宮地町　阿蘇郡宮地町は、官幣大社阿蘇神社の鎭座地で、また木郡の首邑である、縣立阿蘇農業學校、同阿蘇高等女學校等あり、豊肥線の一要驛として、地方物資の集散地である。

阿蘇神社　官幣大社で、阿蘇の開祖健磐龍命、阿蘇都媛を主神とし、ほかに十柱の神を祀る、健磐龍命の子孫は、代々國造、又は大宮

阿蘇神社と樓門

大觀峯より見たる阿蘇

大觀峯

司として肥後文教に努め、吉野朝時代における、阿蘇家の勤王事蹟は人の知るとほりである。

神域極めて神々しく、老杉亭々として天を蔽ひ、神氣自ら迫るものがある。

大觀峯　豊肥線内牧驛より二里、自動車三十分にして、蜿々たる外輪山の一角、文豪德富蘇峯翁の命名にかゝる大觀峯に至る。山頂より俯瞰すれば、脚下に阿蘇谷の平原開け、その向ふに、黑煙天に沖する阿蘇五岳が手に取る如く、景觀頗る雄大、眞に大觀峯の名そのまゝである。以前は、此處を遠見ヶ鼻と呼んでゐた。阿蘇に登る人の見逃してならぬところである。

數鹿流瀧　菊池郡立野と、阿蘇に境する、即ち、黑川と白川に合する地點から、約半里の上流にあたり、絶壁から直下すること二十丈の飛瀑がある。これが數鹿流瀧で、縣下第一の名瀧として知られてゐたが、發電所創立後は、水勢衰へ往年の壯觀見る由もない。

上益城郡

上益城郡は、もと下益城郡と共に、益城郡といつた。縣の中央に位し、綠川之を貫流してゐる。本郡が始めて史上に現はれたのは、崇神天皇の御宇、朝來名の峯に土蜘蛛が居つて、皇命に叛いたので、健緒組が之を誅し、漸次歸順したので益城の名が起つたといふ。一說には、益城は、馬城にて牧場があつたのによるといふものもある。

戰國時代には、阿蘇家の領となつて大友氏に屬してゐた。當時、甲斐宗運は、阿蘇家の家老として活動した。佐々成政の除國後、一時小西領となつて、神社佛閣が荒されたことがある。加藤細川時代となつて、その保護を受けたから舊に復した。幕末には、勤王家及學者の本郡に在住したものが甚だ多かつた。宮部鼎藏、魚住源次兵衛、横井小楠等を出してゐる。

面積四十一方里一九で、四町二十七ヶ村、戶數一萬六千、人口九萬二千で名勝古蹟が尠くない。

御船町　上益城郡の中央にあつて、御船川に臨み、本郡第一の首邑で、清酒、生絲、鮎等を產出し熊延鐵道の一要驛である。甲斐宗運の御船城阯は町の東郊の一丘陵で、戰國史上には偉彩を放つたところ、西南役の激戰地で、縣立御船中學校もこゝにある。

甲佐町　御船町の南二里餘のところにある。甲佐町は、甲佐神社や、縣立甲佐高等女學校などがあ

御船城趾

る。酒と鮎の産地で、また同町豊内には、甲佐城趾がある。阿蘇家の家臣伊津野氏の城砦で、天正九年十二月、相良義陽に攻められし時、伊津野の城守は、緑川を渡り日和瀬川原に出陣して、盡く討死したといふ悲史を殘してゐる。

濱町　郡の東南方、矢部郷の小盆地にある濱町は、同地方唯一の都邑である。

この町は、土御門天皇の御宇、承元の頃、阿蘇大宮司惟次卿がその領内諸城守護のため、こゝに陣内濱の館を造營したのに始まり、幾變遷をへて、今日に及んでゐる。この地は、熊本宮崎の通路で、附近一帶の物資集散地である。酒及び茶を産する。縣立矢部農業學校などがある。

通潤橋　濱町の郊外、白糸村の五老が瀧川の上に架した石橋が、有名な通潤橋である。橋は、特殊工事で橋に二條の水道を架け、一里餘の水源から水を引き灌漑

水に取り入れるもので、用水不要の期に至れば、兩口を開いて排水するから、二條の飛瀑が、白龍の如く橋の左右に落下し壯觀である。

この橋は、嘉永年間、布田保之助が高燥地帶として灌漑は勿論、飲料水にさへ得られないのを慨嘆し、一年八ヶ月の日子を要して完成したる大工事で、橋の長さ三十餘間、その灌漑反別實に九十一町歩の廣きに達してゐる。大正五年十二月この布田保之助の功績天聽に達するや從五位を贈らせらる。

内大臣山　上益城郡白糸村にある内大臣山は、東南は日向國に境し、眞に山岳重疊の大森林で、巨樹鬱蒼として繁茂し、千古の林相として天下に有名である。最高峯の天主山は一千四百九十米に及び溪谷の雪は五月ごろに至らないと解けない。この内大臣は國有林で熊本營林局の一大貯庫である。

山中に、小松内大臣平重盛が蟄居した跡だと傳へられるところがある。平家の一族と共に、この地に隱れ來て、一族は五家莊に入つたといふのである。その重盛を祀る小松神社がある。

通潤橋

下益城郡

下益城郡は、もと上益城郡と共に、益城郡といつてゐた。舊益城郡の、西南部を占めてゐる。

本郡は、朝來名の史蹟を始め、上古から、文化史上に名のあるところ尠くない。木原山は、鎭西八郎爲朝の事蹟を傳へ、綠川畔の觀音寺は、道元(承陽大師)が始めて禪學を講じた所として名高く、其の他中古時代の事蹟としては、竹崎季長の城阯、征西將軍宮の舘阯、阿蘇家に關する遺蹟など多い。

本郡の神社佛閣は、一時小西行長時代に荒されたが、加藤、細川の時代に再興された。清正公の遺業としては、この神社佛閣の復興と、綠川筋における治水工事が殘つてゐる。

單身、豪灣に渡つて、荷蘭長官に謝罪せしめた、柏原太郎左衞門や、大藏經の印刻發願の高僧鐵眼禪師は、この郡の出身である。郡の面積二十方里四〇、四町十四ケ村で、戶數一萬三千五百、人口七萬八千九百である。

松橋町　松橋町は、郡の西隅にあつて、宇土郡と境してゐる。鹿兒島本線の要驛で、町内には、松橋神社及び正願寺、縣立松橋高等女學校などがある。郡中第一の都邑で、水陸の便がよいので物資の集散地として古くから知られてゐる。

雁回山　雁回山は、木原山ともいひ、鎭西八郎爲朝の城阯である。宇土驛より一里十町、宇土驛の東に連亘

する山がそれである。爲朝肥後に下り、阿蘇氏の女婿となつて、この山に舘を設けた。爲朝は弓の名人で、常に山の上を飛ぶ雁を射落してゐたので、雁この山にかゝる時は必ず、回翔してゐたので雁回山の名が殘つてゐる。

木原不動尊　雁回山の北麓、守富村にある木原不動尊は延曆年間に、宗祖傳教大師の開基にかゝるもので、日本三不動尊の一に數へられてゐる。爲朝の信仰厚き不動尊と傳へられ、遠近よりの賽者頗る多い。

三寶禪寺　高僧鐵眼禪師の開基にかゝる名刹三寶禪寺は、鹿兒島本線小川驛より東に一里、小野部田村大字南部田にある。禪宗黃檗派に屬し、攝津の國慈雲山瑞龍山の末寺で、鐵眼の父淨信の歿後、居宅を寺とし、三寶寺と號した。

鐵眼禪師は、寶永七年下益城郡小野部田に生れ、俗姓佐伯氏、大藏經を開刻した人でこの事業を成就するためには必生の心血を注いだ人である。五十三歲で歿した。

三寶禪寺

竹崎季長の墓

竹崎季長の墓　元寇襲來の文永、弘安の兩役に、拔群の高名手柄をした竹崎季長の墓は、小川驛より約二里、海東村大字平原にある。

この墓は、數百年の間全く知る人もなかつたが、明治二十八年十一月七日發見されたもので、大正天皇御即位の砌り特に從三位を贈られた。

大正六年下益城郡教育支會では此處に記念碑を建て、毎年嚴かな祭典があげられてゐる。

隈庄町　隈庄（くまのしょう）町は、松橋町につぐ都邑で、酒の産地として知られ、中正院、能仁寺の名刹がある、中正院は、古くは熊本本妙寺、八代本成寺と共に法華の三寺といはれ、能仁寺は菊池武房の菩提所で、今では小堂を殘すのみである。この町に隈庄城趾がある。甲斐氏の居城で、壕壕など今に殘つてゐる。

拂川鍾乳洞　下益城郡年齊村字拂川の山間において、最近發見された大鍾乳洞は、まさに九州第一と稱すべきである。

八代郡

八代郡（やつしろ）は、宇土半島の南、八代海岸の平野を占め、所謂火の國の本據地である。景行天皇御巡幸の途次、八代海岸に鳳輦（ほうれん）をとゞめさせられたことがある。中世に至つては、平相國清盛の大功田となり、又賴朝の妹の所領ともなつた。建武中興の時に至つては名和伯耆守義高の領地となつた。

征西將軍懷良親王も、後征西宮の御下向後は、この地に退隱して餘世を送り給ふた。足利の中世になつて、一時相良領となつたので、名和氏は宇土に移つた。細川時代には、松井氏八代城代となつて、世々その職を承け、明治維新に及んだ。明治六年八代縣を置かれた時は城内に縣廳を設けたことがある。

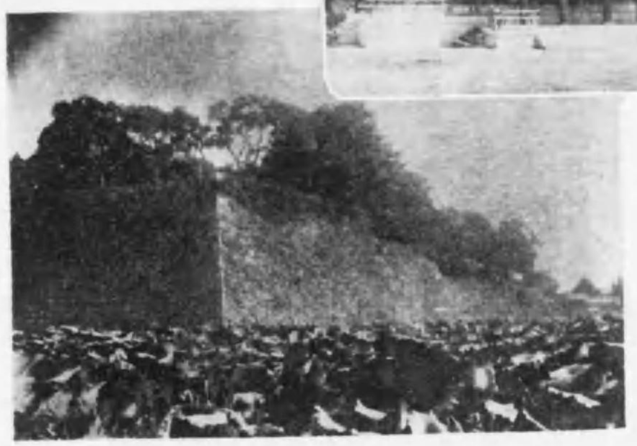
古來、文化の一中心地である。面積四十二方里一九、三町二十八ケ村で、戸數一萬八千九百、人口十一萬四千に及ぶ大郡である。

八代町　八代町は、八代郡の首邑で、日本三急流の球磨川に臨んでゐる。往時は松江と稱し南支那方面との交通が盛んであつた。元和五年地震のため、對岸麥島城が崩壞したので、加藤忠廣、德淵の北部松江に新城を構へた。これが松江城、すなはち八代城である。

細川氏、肥後入國後は、忠興公この城に退隱したが、卒去後は松井氏の居城となつた。

八代は、肥後五ケ町の一で、古くは奉行政治を布かれた所である。

八代宮と八代城趾



この地は、工業地として知られ、附近に、王子製紙會社八代工場、日本セメント工場等があり、最近天草方面との交通盛んである。

縣立八代中學校、縣立八代高等女學校其代各種の機關備はり、城南の中心地として、熊本市に亞ぐ繁華の地である。

八代城趾　八代城は、松江城ともいひ、加藤忠廣の築造で寛永九年未だ、全く竣工をみざる内に、細川忠利、代つて肥後に封ぜられた。忠利の父三齊この城に移り住み、子立孝をして城を守らしめた。その後前後して卒したので、藩主光尚公は老臣松井興長をして城主として居らしめ、爾來松井氏の居城になつた。

しかるに、寛文十二年雷火にかゝり、城樓燒け失せたので修築したが、寛政十年再び火災にかゝり、現在の如く城壁のみを殘すに至つた。

八代宮　官幣中社八代宮は、明治十三年八月の建立で、由緒深い征西將軍懐良親王及後征西將軍良成(よしなり)親王を祀る。境内は八代城本丸の地で、樹

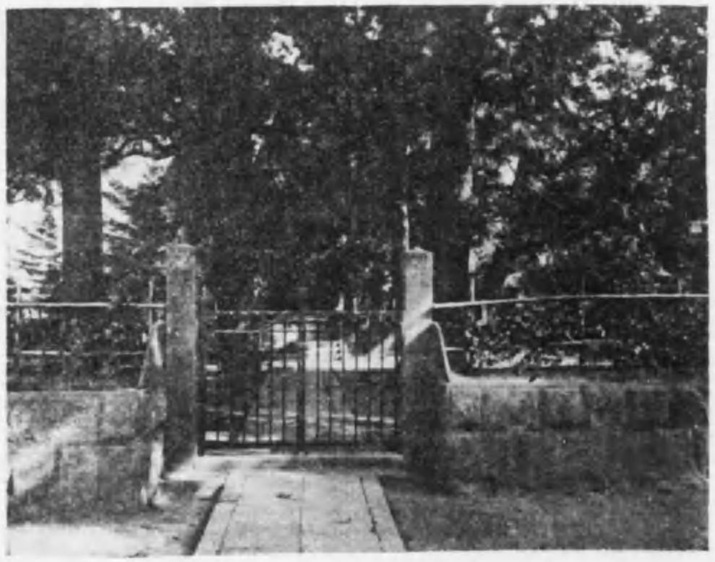
木鬱蒼として茂り、壯嚴の氣自ら迫るものがある。祭典は毎年八月三日である。

麓城趾　八代驛より十町、宮地村にある麓城は、中世八代地方の鎭城であつた。球磨、葦北の地を控制する要害の地である。

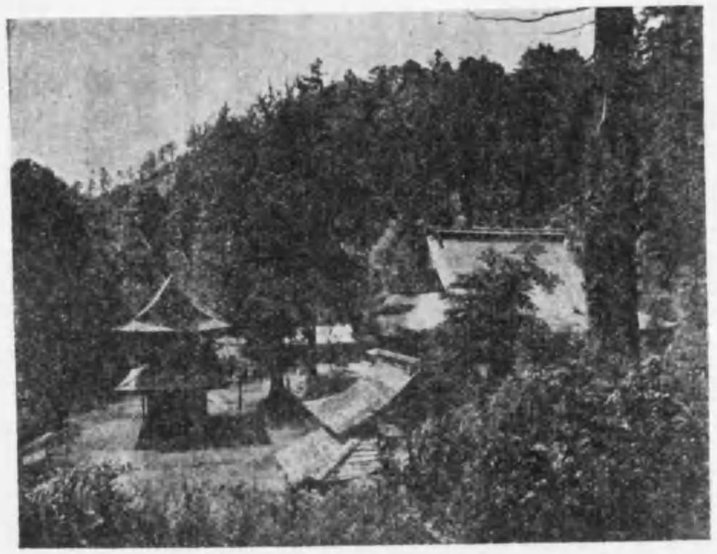
吉野朝の時、懐良親王この城に館せられしと傳ふれど、確かなことはわからないが、供奉の人々の居住せしとみえ、四十餘派の姓名が地名となつて殘つてゐる。

名和氏から相良氏の居城となり、一時島津氏の領となつてゐたが、遂に佐々氏、小西氏の有に歸した。天正十二年五月地震のため倒壞し、その後全く廢城となつたものである。

征西將軍の御陵　征西將軍懐良親王の御陵墓は、八代郡宮地村、八代驛より東南二十町の山麓にある。神牌には「常山開基征西將軍宮悟眞大禪門」とあり、弘和三年三月二十八日、御年五十五六歳で薨去あらせられたといふことである。御陵墓附近は、閑寂の山麓で、肅然とし



征西將軍の御陵



金海山釋迦院

て襟を正さしむるものがある。附近に悟眞寺がある。寺は元妙見の供養院であつたのを、元中年間親王追善のために孚芳和尚が中興したものである。

釋迦院　金海山釋迦院は、八代郡柿迫村の釋迦岳にある昔は莊大なる伽藍があつて、坊數實に七十五、この外に、四十九院の末寺があつた。

天臺宗叡山正學院の末寺で、非善大師の開基である。境内は、幽邃の地で、天正年間、小西のために、寺領は沒收され堂宇は悉く破壞された。元和元年加藤忠廣公再び寺領を寄附し、後奥州の僧禪瑞師來つて營んだ。これが今日の釋迦院である。附近一帶は、杉の大木が茂り、佛法僧の棲む山としても名高い。

五家莊　四面高峯繞岳に圍まれる、五家莊は、八代郡の東部に位し、樅木、葉木、久連子、仁田尾、椎原の五部落から成つてゐる。

元曆元年三月、平惟盛、同清經を始め、平家の一族郎

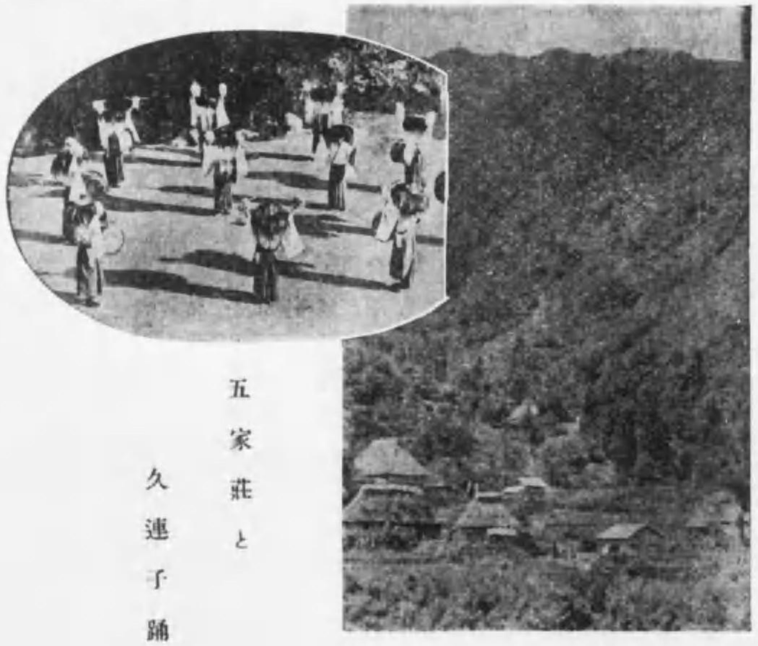
黨が、紀州熊野より追はれ、その子孫、この地に隱遁し、全く世間と交渉を絶つて、今日に及んだと傳へられてゐる。

東隅は、宮崎縣界に接し、廣袤約二十里、風俗習慣他と大いに異り、深山の別天地である。

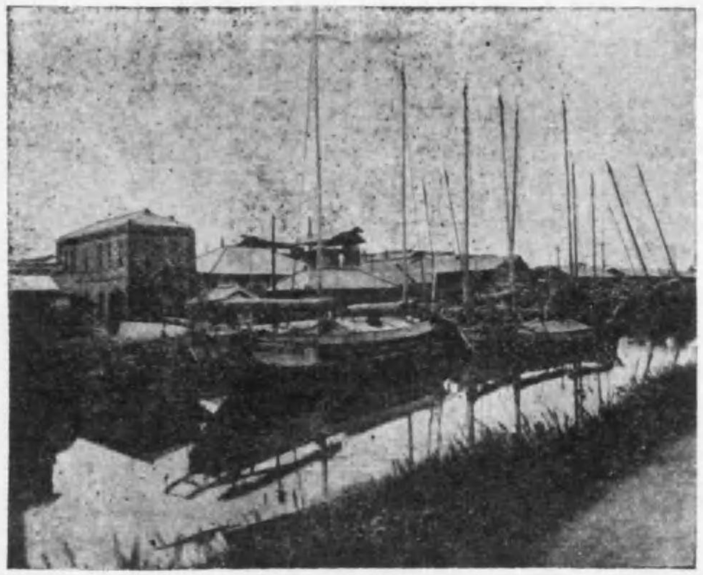
山中の溪流は、南に流れて球磨川の水源をなし、海拔一、七三八米の國見岳を最高に連峯起伏し、この間、人戸僅かに二百餘戸、殊に樅木、久連子等の外は、小徑一里を行き一戸、二里を辿りて三戸といふ狀態で、從つて文化交通今なほ開けず自然の推移にね委てゐる。

彼の義民、佐倉宗吾は、この五家莊に住む、平家の末裔で、木内某の子であつたといふ。

この地は、霧深く殆ど大古の趣を成し、土地が磽确であるから、米を產することが少い。衣服は、常に木綿の類を用ひてゐる。荷物の運搬なども、牛馬を用ひない



五家莊と久連子踊



鏡の船附場

で、多くは人肩によつて運んでゐる。近頃は、昔とは違ひ、交通も稍開けたのでこの別天別の風趣を味ふもの多くなつて來た。

こゝの誇りは、年に三度の盆踊りで『ヨー春はさ、花芽に誘はれて、花に心の散りん〳〵と……』といつた、上品な太古踊、これも源平時代の遺風の一つであらう。

この五家莊に行くには、松橋町からと、有佐驛からとの二つがあり、有佐驛から行くと、柿迫村まで自動車で約五里、柿迫村から徒歩で約五里、久連子村に着く、久連子から小原まで約四里、それから葉木まで約四里、葉木、樅木間が約三里半である、五家莊を一巡するには四泊以上の行程を要する。

鏡町　鏡町は、八代郡の北部で有佐驛を距る西十町餘のところにあつて、不知火海に臨んでゐる。海陸の便があるので、米穀の集散地として知られてゐる。

こゝは元、鏡ヶ池の地で、古來肥後名所の一つに數へられ有名な古歌などがある。

葦北郡

葦北郡は、熊本縣の南端にあたり、鹿兒島縣に接してゐる。

こゝは、景行天皇の御代より、葦北の國造を、おかれたところで、古い歴史の地である。

戰國時代には、一時相良領となつたが、豊臣秀吉征西後は、加藤、細川領となつて城代或は番士が置かれた。

彼の有名な、三太郎峠はこゝにある。明治十年二月、西鄕隆盛は薩南の健兒を率いて、この嶮を突破して、長驅熊本に迫つたものである。

郡の面積三十一方里、三町八ヶ村で戸數一萬三千五百、人口七萬六千である。

水俣町　肥後國境の、水俣町は、南部第一の都邑で、日本窒素肥料株式會社水俣工場があるので年々非常の發達を示してゐる。

水陸の便よく、水俣港は、鹿兒島、天草方面の帆船輻輳し、段賑を極めてゐる。

こゝには、水俣城阯、月の浦、陣の坂、水俣溫泉、湯鶴溫泉など史蹟名勝尠くない。

百濟木地藏　日奈久町から、東に約三里、百濟木村の山中に、高僧日羅自作の地藏尊がある百濟木地藏である。

日奈久町

敏達天皇元年、日羅百濟から歸國の時、自作の地藏尊像を父阿利斯登に送つたものを日羅の墓上に安置して、その墓標となさしめたのが、今の地藏堂である。日羅は、文武に秀で加ふるに技巧の妙を得て、我が文化史上の一偉人であつた。

日奈久温泉　日奈久町は、温泉町として名高い、不知火海に臨み、後は山岳重疊たる葦北、球磨の連峰連り風光明媚、壯大な温泉旅館が軒を並べてゐる。泉質は、無色透明の炭酸泉に、ラヂウムを多量に含んでゐる。

旅宿の欄によれば、沖に漁火點々、櫓聲かすかに響き靜かなる湯の町の夜の温泉情緒を味はふもよい、町の南十數町に、景勝の鳩山公園がある、足を曳くもの尠くない。

竹細工と人形、高田燒の名產地としても廣く知られてゐる。

三太郎峠　肥後から、薩摩に越える海岸路にそう峻坂でこの三太郎越は、赤松太郎、佐敷太郎、津奈木太郎の三つの

坂の總稱である。

赤松太郎は、日奈久の東南方で百四十七米の峠、峠を越せば風景絶佳の田浦、この町から、佐敷に越える街道が、要害無比の佐敷太郎、津奈木太郎峠は佐敷と水俣の間に横はる峻坂、「馬は越えたか、片脚越えた……」の天險と要害の難路、丁丑の昔、薩軍はこの險難を突いて熊本鎭臺に迫つたものである。

佐敷町　佐敷町は、佐敷川の兩岸に展開する都邑で縣立葦北農林學校其他各種の機關が備つてゐる。

町の一丘陵に殘る佐敷城趾は、一名花岡山ともいひ、相良氏の支城で、一時島津氏の附庸となつたが、天正十六年清正公の領有となり、葦北城代を置き、加藤大和守重次之れに任じたことがある。

附近の湯浦は温泉鄕で、相當賑やかである。

君が淵　葦北郡二見驛より約一里、二見川の上流にある君が淵は、岩泉絶勝の幽邃境である。

佐敷城趾

球磨郡

球磨郡は、肥後南部の山地で、宮崎、鹿兒島の兩縣に接し、球磨川は、中央の山岳地帶を流れ、人吉附近は、盆地を形成してゐる。本郡は、上古熊縣といつて、大隅地方と共に、熊襲族の本據といはれてゐる。

しかるに、近來、古墳などの發掘されるのをみると、やはり、往古、大和民族が住んでゐたことがわかる。

中世相良氏が、本郡の地頭職として下向し、人吉に居城を構へて、以來、七百年の治績をあげ今日に及ぶ。

相良氏も、戰國時代には。一時領土を廣めて球磨、葦北及日向の一部を領有したことがある。

郡は、大部分山岳を以つて圍繞してゐるが、近年交通も開け、殊に人吉湯前間の鐵道開通によつて、材木穀類其他物資の運搬にも、革新を齎らすに至つた。

總面積九十九方里七二、二町二十二ケ村、戸數二萬五百戸、人口十一萬七千に及んでゐる。

人吉町　「落ちつく先きは九州相良」淨瑠璃伊賀越の仇討で、名高い人吉は、相良氏二萬二千石の舊城下町で、球磨川に臨んでゐる、四面山岳を回ぐらしてゐるから、山水の秀麗と、天險とを以つて古來

有名である。

近年、町内到るところに溫泉が湧出し、湯の町人吉として知られるに至つた。

肥薩線の要驛で、湯前線はこゝから岐れてゐる、米穀材木、木炭等の物資集散地として繁榮してゐる。

縣立人吉中學校、同人吉高女等や、各種の機關備はり經濟、教育、文化の中心地をなしてゐる。

明治十年の戰には、薩軍が一時本營をこの地におき、官軍と華々しき一戰を交したところ、附近には名勝古蹟尠くない。

人吉城趾　人吉城趾は、相良氏代々の城で、七百三十年前の築城にかゝり、球磨川畔に屹立し要害の地、築城當時三日月形の石が出たので一名纖月城（せんげつじょう）ともいつてゐる。

現在、公園としての設備をなし、春の櫻に、夏の納涼に、遊客絶ゆることがない。

この城は建久九年、相良三郎四郎長頼、初めて在城したも

人吉城趾

球磨川槍倒しと

白石の鍾乳洞

ので、相良氏は二階堂藤原爲憲より出てゐる。

爾來代々居城し、長毎（ながつね）天正十五年、豊臣秀吉に屬して五百町を賜はり、次で慶長五年關ヶ原の戰に殊功があつたから二萬二千石を賜はつて、明治維新に及んだのである。城趾には相良氏累代の靈を祀る人吉神社がある。

青井神社　「球磨で一番青井さんの御門、前は蓮池櫻馬場」と謳はれる青井神社は、健磐龍命外二柱の神の鎭座せる社で、大同二年の創建、本殿樓門は桃山時代の建設にかゝり、國寶に指定されてゐる境内は老樹鬱蒼として壯嚴を極めてゐる。

大村横穴　人吉驛の背後、一丘陵の南側に二十餘の横穴がある。これは上古民族が造營した墳墓で、學術上極めて貴重な古墳として、内務省の指定保存地となつてゐる。外壁の裝飾に牛馬兎等の動物を描いた彫刻などは他に多く類例がない。

球磨川下り　球磨川は、源を市房山に發し、八代海に注ぐ、流程二十四里、日本三急流の一にして、曩には日本二十五勝の一

に選ばれ、その名天下に顯はる。沿線は奇岸、怪勝に富み、激湍相搏つ壯絶は、蓋し一大偉觀である。人吉より白石まで六里、この間を俗に球磨川下りといつてゐる。今日でこそ、安々と船下りが出來るが往古は巨巖横はり、舟さへ通はなかつた。寛文五年、林正盛といふものその不便を一掃すべく、この川の開鑿工事に着手して、漸く舟筏を通ずるやうにしたものである。その勞苦察するにあまりがある。大正十三年朝廷、その功を聞しめされて從五位を贈らせられた。

河岸の風光を賞味して下る時、今昔の感更らに深いものがある。

人吉の發船場から纜（ともづな）をとけば、船は矢の如く水煙を縫ひ、飛沫をあびて一氣に白石下り、この間四十八瀨あり殊に二俣、網場（あみば）、修理（しゅり）の激流は、肌に粟を生ず、清正公の奇岩、槍倒しの險は一大奇勝にして、大小幾多の怪石あり、深淵あり、その壯快さは筆舌の盡す所ではない。所要時間、三時間、五月から十月迄、土、日曜に限り定期船の便がある。是非一度は球磨川下りの快味を賞すべきであらう。

神瀨の鍾乳洞　球磨川下りの終點、白石驛の對岸の山腹に大きな洞穴がある。これが神瀨（こうのせ）の鍾乳洞である。

生善院　生善院（せうぜん）は、俗に猫寺といつてゐる。湯前驛から球磨川を渡舟で渡り、徒歩十五分位で行ける、水上村字岩野にある眞言の古刹で、これには一條のロマンスがある。

今から三百年前相良氏の治世に、岩野村普門寺に、盛譽（せいよ）といふ青年僧があつて母と二人で住んでゐた。然るに村内に、學德勝れた二人の沙門が、比久尼庵を結んでゐた。盛譽はその學德に私淑して教へを乞ふた。噂はついに盛譽に、不淨の行ひがあるといふ話が、相良氏の耳に入り、僧は死罪に處せられた。ところが、後になり全く無實の

市房山

嘆とわかつた。母は悲嘆の餘り、相良氏を怨み、市房神社に祈り、生血を猫に啜らせて復讐を誓つて淵に投じて死んだ。その後人吉城中に、猫があらはれて怪異のことが毎夜つゞいたので、これは盛譽母子の祟りであるといふので、母子の靈を慰むるために生善院を立てた、それ以來異變はやんださうである、それで一名猫寺といつてゐる。

市房山　市房山は、海拔一、七二二米にして九州高峯の一つである。頂上の眺望絶佳、東北は疊々たる山岳をへだてゝ、日向灘を俯瞰し、南方遙かに霧島の雄峰と相對し、景觀雄大、中腹の市房神社は、大同二年の草創一名御岳様と稱し、彦火々出見尊を祀る、人吉より東方十里、登山は湯前驛で下車、山麓まで、自動車の便がある。秋は紅葉、初夏の躑躅の名所として知られ、近年著しく登山者が多くなつた。

天草郡

切支丹殉教の悲史に色どられる天草は、本縣の西南部に散在する、數十の群島と、大矢野島、上島、下島の三島から成つてゐる。

この島は、上古天草國造を置かれたところで、早くから史上に見え、中世時代には、瀬戸、上津浦、大矢野、栖本、志岐の豪族が夫々領有してゐた。豊臣秀吉九州を平定した後も、各地に反旗を翻へす者があつたので、小西、加藤の兩氏之を征服し兩氏の領有となつた。

寛永十四年の天草一揆、すなはち切支丹殉教の騒亂起るや、當時の領主、寺澤氏は、本島を沒收せられ天領として、幕府直轄の下に、代官制度を布くことになつた。明治維新、廢藩置縣の後、一時長崎に屬したことがあつた。間もなく八代縣に編入され、更らに明治六年熊本縣に屬し、爾來今日に及んでゐる。現在熊本縣の支廳を設け郡治を統轄されてゐる。

天草は、風光美を以てなり、肥後松島と稱すべきところ、氣候溫和で、魚族が多く、保養地としても理想の地である。

總面積五十七方里三七で、四町五十八ケ村を有し、戸數三萬五千二百、人口十九萬五千四百を擁してゐる。

本渡町

本渡町　天草郡下島の東海岸上島と、相迫るところにある本渡町は、天草支廳の所在地である。島中第一の都會で、海陸交通の中心地で、三角港及び長崎縣茂木、口ノ津、島原の各港、鹿兒島縣口ノ津港への定期汽船の往復あり、縣立天草中學、同天草農業學校、同高等女學校等あり、各種の機關あり、經濟、交通、文化の中心である。

町には、本渡城阯、木山彈正の墓などがある。

なほ隣村本戸村からは有名な水平燒が產出し世人に稱美されてゐる。

牛深町　牛深町は、下島の南端にある九州屈指の漁港で、大小幾千の船舶輻輳し殷盛を極めてゐる。

「牛深三度行きや三度裸、戻りや本渡の瀨戸かち渡り、鍋釜賣つても酒盛りやしてこい……」。牛深は、それだけ古くから知られてゐる。無論これは明治初年から、中葉にかけての、牛深情緒を歌つたもので、その頃は牛深遊女を新銀取りといつたものだ。新しい銀貨をみて隨喜してゐたのも過ぎし昔の物語りとなつてしまつた。

此處には熊本縣水產試驗場の出張所がある。鰯の櫻干は各方面から好評を博してゐる。

崎津　「牛深三度行きや三度裸……」の牛深情緒そのまゝを描く、崎津は下島西海岸の一小漁港で、牛深より五里、途中發動汽船で渡る。純情の島娘に、旅情を慰むるにたるところ、眞に南國氣分をそゝる豊かな地である。

大矢野島　大矢野島は、天草群島第三の島で、宇土半島と相對してゐる、島中には登立町、上村、中村の三ケ町村がある。この島は、天草の豪族大矢野氏の故地で大矢野十郎種保兄弟は、彼の元寇襲來の弘安の役に出陣し、敵の心膽を寒からしめし勇將である。

又寛永十四年に益田甚兵衞、切支丹宗徒を集め天草一揆を起したところで、彼の島原の亂の策源地である。

談合島　天草と、島原の中間海上にある一孤島の、

牛深漁港

富岡曲崎の風光

湯島は、周圍三里、島原の亂に際し、大矢野島から、本陣をこゝに移し、益田四郎時貞、渡邊右衛門等が一揆の謀略を談じたところで、爾來談合島ともいふ。

斯くて、時貞を總帥として、對岸島原の擧兵に相應じ殉教戰の旗をあげたのである。

幾萬の生靈を傷めた、天草切支丹の大波亂は、實にこの湯島の一角にあげられたのである。

富岡町　富岡町は、下島の西北隅にある一要港で、前面に島原半島と相對し、有明海の關門、地形、遠く海中に斗出する曲崎（まがりざき）の風光は、天の橋立の名を冠するに充分、白砂青松、海水浴場として知られ、町の西には老樹鬱蒼たる富岡城址がある。唐津城主寺澤廣高の築城で寛永十四年冬、切支丹宗徒の亂にあひ、包圍され苦戰した歴史を傳へてゐる。此處には、九州帝國大學の臨海研究所が設けられ、又毎年八月行はれる勇壯な鰮狩りは珍らしき年中行事の一つである。

三角、島原、茂木、長崎諸港との連絡航路がある。

天草洋　頼山陽の所謂「雲耶山耶（くもかやまか）」の詩で名高い天草洋（あまくさなだ）は、富岡西海岸の總稱で、一望千里、際涯なき青海原、外海から打ち寄せる波濤のうねりを見る時、只々雄大壯觀の一語につきる。

志岐城址　志岐城址は、富岡町の東隣志岐村にあり、志岐薩摩守鎭經の城址である。志岐氏は、菊池氏の支族で、肥前の龍造寺に屬してゐた。鎭經の子麟泉は、智勇を備へ、一時武名を轟かしたが、豊臣秀吉九州平定の際、豊臣に降り、佐々成政の配下となつた。

其後、天正十七年の天草一揆を起し、遂に滅亡した。

龍ヶ岳　上島の東南端、高戸村と、大道村の境に聳ゆる龍ヶ岳は、海拔四百七十米、景勝天草の大觀を縱にし、景觀頗る雄大である。最近登山道の新設と共に、探勝者多く、山頂には茶小屋などを設けてゐる。

天草龍ヶ獄の眺望

肥後先哲勤王家列傳

肥後は、昔から人材の國である。隨つて宗教に、畫壇に、書道に、武道に、何れも多士濟々、一々これを擧ぐれば遑ないほどである。依つてこゝには、世に謳はれる主なる學者、勤王家、政治家の一部を錄することゝした。なほ、この際、肥後藩時代の學界の概要を附記することにした。

肥後藩時代の學界

熊本が天下の教育地として、名を馳せたのは遠く德川時代に遡る必要がある。即ち細川公治世の肥後の實狀を、概要こゝに述べてみたい。

當時の學界は、最初藩學として朱子學を採用したものである。しかるに、一方陽明學や、古學なども研究され、更らに、德川中葉以後は、洋學も渡來した。然しながら、その中最も普及したのは、朱子學であつた。

朱子學とは即ち、孔孟の道を祖述するにあたり、朱熹、所謂朱文公の註による學問で、孔孟の所謂居敬窮理の方面を攻學の目的とする一派である。しかし又一面、眞の朱子學と異つた學派も現はれた。即ち古學で、護園派が是れである。古學とは即ち孔孟の教を直接研究せんとする一派である。

然してこの二派の間に、陽明學の一派も出來た。最もこの陽明學は、肥後においては、これを心學流といひ、又は

實學派の陰に隱れてゐた樣である。尤も世に心學といふのは陽明學の一派である。

この三派から成る肥後の學界は何れも見るべきものがある。即ち朱子學では、佐藤竹塢、林三陽の二人を出し、佐藤固安、小川蒙軒、辛島雪獄、大野退野等の人々が、次々に出で、古學では、秋山玉山、水足博泉、住江滄溟、龜井南溟、龜井昭陽などの士があり、陽明學派、肥後の心學では、北島雪山を始め横井小楠などの士が續出してゐる。

實に當時の肥後熊本の學界は、斯くの如く三派に對立し、各その所信に向つて邁進し、喧々喧々の氣焰を吐いてゐたのである。

時習館・再春館について

當時肥後の學界は、さきに述べた如く三派に對立した。然して人物養成の基調は何といつても、時習館の學派であつた。即ち細川靈感公の治世に於ける特筆すべきものは教育の振興である。即ち「時習館」及び「再春館」の創設であつた。時習館は、寶暦五年の創設で「再春館」は同七年である。公は早くも一國統治の根本は、教育にあるとし人材を養成すべく、こゝに教育の振興を圖られた。而して、藩學「時習館」及び「東西樹」において、文、武の道を講ぜしめ、同じく「再春館」及び「御藥園」において醫藥、衞生の法を、學ばしめることゝせられた。爾來星霜二百年餘、少くとも明治時代に至るまで、その養成された幾多の人材は、何れも國家に功業を樹て、後代に傳へたその功勞は、實に大なるものがある。肥後が、雄藩として天下に重きをなし、我が熊本が教育地として、其の名を謳はれてゐるのも、蓋し當然の歸結である。

秋山玉山

秋山玉山は、字を子羽と稱し、通稱は儀右衞門、豐後鶴崎の人で、中山助左衞門の二男である。秋山需庵の養子となり、幼時醫學のかたはら、水足屏山に學び儒學を研究した。享保八年、時の藩公細川宣紀公に召されて、同九年藩公參覲交代の際、御伴して、江戸にのぼり、林鳳岡の門に學び、一旦歸國したが再び江戸にのぼる。然るに同十七年藩公の死にあひ、痛歎やるかたなく、肥後に歸國し、藩主重賢公の侍講となつた。寶曆五年、時習館の設立せらるゝや、その教授となり、專ら青年子弟の教養にあたつた。

玉山は、溫和洒落の君子で、最も詩書を善くした。寶曆十三年十二月十一日、齡六十二歳にして歿した。立田山の南、小峰に葬る。

玉山の子弟には、俊豪逸材が多く、中にも藪孤山、古屋愛日、岩下大雅などはその駿足であつた。

藪孤山

時習館第二代の教授は、藪孤山である。孤山は熊本の人で、享保二十年三月二十七日生れた。字は子厚、茂次郎と稱し、初めに大澤と號し、後朝陽といひ、さらに孤山と號した。

寶曆二年、靈感公の命により學に志し、八年には京都に出で、十年肥後に歸國、明和三年、時習館の

教授となりて、孜々營々子弟の教育に身をゆだね、時習館の隆盛を圖つた。享和二年四月二十日六十八歳を以つて病歿した。本妙寺山中に葬る。

資性穎悟、能く時勢を洞察し、劃一教育を打破して、秀才教育に眼目をおいた。中にも高本紫溟、伊形靈雨、大城壺梁等の秀才を出してゐる。

堀勝名

勝名は通稱平太左衞門といひ、巢雲と號した。代々細川公に仕へてゐた。細川重賢公の寶曆改革の際三十六歳にして、大奉行に拔擢せられ大いに治績をあげた。

勝名は、直言直行、豪放器識の士で、又經濟の道にも達してゐた。刑法を制する時の如きは、自ら獄吏に鞭うたせて罪の輕重を定め、或は農民の苦勞や、豐凶等について自ら、その衝にあたり、庶民の苦痛を嘗め、これを政治に實行したといふ。肥後藩第一の政治家である。事實、肥後一國の國運は、隆々として振興された。

寛政五年、年七十有八歳を以て歿した。墓は本妙寺山中にある。

長瀨眞幸

長瀨眞幸は、號を田盧といひ、七郎平と稱した。祖先は筑後の人、熊本城下追廻田端に居を構へ、細

川公に仕へた。明和二年生れで、兩親の嚴格なる教育の下に人と爲り、八歳にして學に入り、性謹言篤實、長じて父に從ひ京都から、伊勢に行き、本居宣長の門人となり、江戸では、加茂眞淵の門人、加藤千蔭、村田春海などと往來し、文化元年御番方組脇に、同八年學校御目附役に進み、天保四年御鐵砲頭に昇進した。歳七十一歳で病歿した。

肥後における、國學派勤王黨の根源をなす人である。

高本紫溟

高本紫溟は、時習館第三代の教授である。名は順、字は子支、慶藏と稱した。本名は原田で、醫員高本氏の養子となつて高本姓を名のる。

秋山玉山其の才を愛して一詩家を得たりとまでいつた。明和八年三月、藩主細川公に召され、時習館教授となつて、學政に與り、實踐窮行の學風を起した。

實に時習館の學風は、紫溟の時代において確立したといはれてゐる。又それだけ博識多才であつて國典にも通曉してゐた。曾つて、本居宣長を訪ふて、その事業を助けたことも少くなかつた。時の上皇、紫溟が草した文を叡覽ありて「田舍には珍らしきものだ」と仰せられたといふ。

紫溟は、一時阿蘇郡宮地町の南方、古神原にある、阿蘇家の松林中に住んだ。その草庵を萬松廬といひ、今に古井戸などがある。

文化十年十二月二十六日、七十六歳を以て病沒した。本妙寺山中に葬る。

片岡朱陵

片岡朱陵は、名は維良、字は士騏と稱し、朱陵と號した。朱陵は、元藪氏の臣で、幼年より文學に志深く、碩學の宿儒、其比前原善兵衛の門に入り、研學積德、斯くて儒術大いに進み、其名殊に高く、靈感公の御代に召されて侍儒となる。

玉山と交り深く、酒を呑み、河豚の肉を殊に好む、玉山酒中の友であるけれども河豚の肉を恐れた。靈感公の治政改革に當り、功勞の士は、朱陵の門下より輩出したものが多い。又歌道に通じ、書を善くした。

明和五年七月二十八日、歳五十四にて沒した。墓は高麗門西瑞寺にある。

富田大鳳

富田大鳳は、通稱大淵日岳と號し、寶曆六年、熊本市古町に立てられし醫學再春館の師役となつた。肥後勤王三哲の一人といはれ、家世々醫を業としてゐた。

大鳳は幼少より卓勵不拔、祖先以來學に深かつたから、家業を修むるの傍ら儒を學び、詩賦に巧みであつた。

常に王室の衰微を慨いて恢復の志盛んであつた。曾て、内裡雛の前に額づいて曰く「叡慮を勞すること勿れ」と、又或時は「我醫師に性を受けたるは、天の造物を誤りしなり、故に早世して、生をかへて諸侯に再生し、一度は王室恢復の御大業を補佐し奉らん」と、その憂國慨世やるかたなく、遂に病を得て亨和三年二月四十二にして世を去つた。小峯に葬る。世人肥後の高山彦九郎と稱してゐる。

中島廣足

中島廣足は、名は春臣、廣足と改め、通稱嘉太郎、のち太郎と改めた。樞園、田翁、蛭麿等の別號がある。

父を五郎平といひ、母は宮川氏、十一歲の時父歿して家督、十五歲にて御小姓役となり、二十四五にて病氣に罹り、隱居した。この頃から專ら國學を修め、長瀨眞幸の門に入り研究し、三十歲頃から、長崎に遊び、青木永彰、近藤光輔などゝ交り、家塾を開き居住すること二十年餘、安政四年大阪に轉居し文久元年九月藩命にて、熊本に召され、國學師範を命ぜられた。

元治元年正月二十一日歿した、時に年七十有三であつた。市内万日山に葬られた。

大野退野

大野退野は、名を久成と云ひ、通稱は丹左衞門、退野又は孚齋と號した。退野は、肥後實學の鼻祖で

延寶五年十二月生れ、世々細川公に仕へ祿二百石を食む。

初め陽明學を學び、後李退溪の書を讀み、程朱の深意を覺り、舊學を捨てた。躬行實踐の士で、學識高く、肥後の名儒として知られてゐる。

晩年玉名郡玉名村に隱退したから、退野の號を用ひ、子弟を敎へ、その數百餘人に及んだといふ。孚齋存稿、孚齋存稿拾遺等の著書がある。

寛延三年三月五日歿す、年七十四、市内萬日山下長谷に葬る。

林櫻園

林櫻園は、名を有通、藤次と稱し、寛政九年十月二十八日、熊本に生る。櫻園の一家は、世々細川公に仕へ、父は又右衞門、彼はその三男であつた。

少年時代より豪放不羈、頭腦明達の士で、時習館に入りて薫陶を受けたが、天下國家の志なく、無斷で時習館を退き、所謂腕白大將となつた。父又右衞門、その非行を憂ひ、大いに訓戒したので、翻然として志をかへ、爾來、螢雪十年、一心不亂に勉强し、長瀨眞幸に從つて古典學を受け、次で加茂眞淵、本居宣長に師事し、漢學を修め、更らに大乘小乘の佛典の蘊奥を極め、なほ蘭學も修めた。

彼のペルリ來航の時は、幕府の無力を痛嘆した櫻園は、憤然として『腐儒果して國を誤る、皇國御大事此にあり』と、蹶然立つて江戸に上り、轉じて水戸に赴きては、水戸志士の門を叩きて、非常時國家

に對する意見を交換し、尊王攘夷の論鋒火の如く國事に奔走努むる所があつた。

肥後幕末の巨人であつて、勤王又は神風連の父ともいふべき人である。明治三年十月十二日遂に熊本において病歿した。時に七十四歳、追廻養壽院に葬る。門弟には、宮部鼎藏、加屋霽堅、永島三平等逸材駿足の士がある。

木下犀潭

木下犀潭は、字を子勤、名を業廣と稱し、通稱は、宇太郎、後眞太郎とも言つてゐた。文化二年八月五日菊池に生る。十歳の時、鄕士桑滿伯順に師事し、後府學に入り、助教大城氏に學ぶ、二十二歳學業優秀の故を以て双刀を許されし程の秀才、二十三才にして府學居寮生となつた。三十一歳中小姓、つゞいて府學訓導、班物頭に昇進、六十三歳を一期として病沒した。立田山西南麓に葬る。

犀潭は、幼時豪放、磊々、晩年にいたり、溫厚篤實、家庭に居るや、友愛厚く、兄弟相集りて詩文を談じ、生徒を指導するや、資稟を助長し、割一主義を廢した。

水足博泉

水足博泉は、名は安方、字を斯立、平之進と稱し、博泉と號した。博泉生れて聰穎詩文を善くし、神童の名があつた。年十六の時、徂徠に書簡を寄せて、經義に疑を起して遠く書を徂徠に問ふほどの秀才

であつた。

或時、肥後に歸る人があつた。徂徠は是を、博泉に示し、訓點句讀を付けさせよ、若し立ちどころに事を成せは、其の賞として、吾雙耳を殺て秀才に與へんといつた。博泉、これをみて即座に訓點句讀を加へた。翌年、その人江戸に往て徂徠に會ひ、約束の如く雙耳を賜へといふ。徂徠嘆じて曰く、眞に神童なり、是を苦もなく讀む程の神童なれば、吾雙耳を與ふるに及ばずとて笑つて語つたといふ。享和十七年、年僅かに二十六で早世した。墓は城北黑石村にある。

荻角兵衛

荻角兵衛は、名は昌國、麗門と號した。世々細川公につかへ、天保十年、角兵衛、時習館居寮となり益々學を勉む。安政五年七月葦北郡代となり、同年八月小國久住に所替、文久二年正月、五十歳にて病死した。

著述に、護國山詣、壬寅遊草、新免無藏論、其他數篇がある。墓は本妙寺中東光院奥垣傍にある。

井澤蟠龍

井澤蟠龍は、名を長秀、通稱十郎左衛門、享齋又は蟠龍と號した。世々細川公に仕へ、元祿十年二月相續し、享保五年二月、鐵砲拾挺頭となり、同十二年九月、貳拾挺頭となつた。蟠龍は武技に長じ、國

典にも通曉した。

資性朴訥、毎朝未明に起き、自ら湯を沸して沐浴し、威儀を正してゐた。常に神道を信じてゐた。著書として俗說辨正、正續新合せて十五卷、廣益俗說辨、前後遺附殘終の諸篇四十六卷、其他數十篇の著書がある。

享保十五年十二月三日、年六十三で沒し、熊本宗岳寺に葬る。

宮部鼎藏

宮部鼎藏は、文政三年四月、上益城郡田代村に生る。名は增實、田城子と號した。鼎藏幼にして俊敏好んで書を讀むも、祖先からの醫業を屑しとせず、唯文武諸藝を好んだ。伯父增美に就いて山鹿流の兵法を學ぶ、遂に增美の家を繼ぐに至つた。

嘉永二年、鼎藏三十歲の時、藩から拔かれて師職となつたが、これに滿足せず、更に笈を負ひ各地を歷遊して勤王攘夷に努めんとする時、偶嘉永三年、吉田松陰と初めて熊本市內坪井に於て會ひ、意氣投合するに至り、互に肝膽を照らした。斯くて江戶にのぼりては常に松陰等の志士と交遊し、共に皇室の衰微を歎き、悲歌慷慨、嘉永四年松陰と共に東北を漫遊して同志を集め、足跡至らざるなしの態であつた。

鼎藏は、更らに櫻國の門に學び、國典を講究し、敬神尊王の志益々固きを加へた。嘉永六年、米艦の

浦賀に來りて、朝野騷然たる時、同志永島三平、轟武兵衞と共に江戶に赴き、活躍する所があつた。

文久二年十一月、護美公を護つて京都に入り、禁闕の守護にあたつた。文久三年韶邦公肥後に歸り、後事を鼎藏等に托した。鼎藏、親兵三千の指揮役となり、外夷親征の樞機に參劃したが、會津、桑名の反對で事成らず、逐に三條公以下七卿長州に落ち、鼎藏又隨つて多くの志士と共に長州に入つた。後潛かに京都に出で、劃策するところあつたが、幕府は是等志士を誅戮せんとして、新撰組を向はしめた。

鼎藏憤慨措かず「噫吾事終る、大丈夫豈辱しめを奴輩に受けんや」と自殺した。時に年四十五歲、元治元年六月五日であつた。墓は上益城郡七瀧村にある。

横井小楠

横井小楠は、文化六年八月、熊本市內坪井町に生る。字は子操、名は時存、通稱は平四郎、沼南又は小楠と號した。

幼時朱子學を修め、天保十一年江戶に遊學を命ぜられたが、我が欲する學者なしとして忽ち歸國し、以後獨學自習、陽明學を深く研究した。

小楠の青年時は、嘉永安政の頃とて、天下の志士東西に馳驅して國論の歸趨に努めるもの多く、小楠も又廣く天下を歷訪し志士と交りをかはし、米艦渡來に際しては決然として開港論を主張した。安政二年頃歸國し沼山津に塾を開きて子弟を敎へ、山田武甫、嘉悅氏房、內藤泰吉、高田露等の俊才を出した。

小楠の思想は、當時に於て稍急進に過ぎ、ために一派の保守黨は、常に小楠をつけ狙つて暗殺せんと企てゝゐた。

然るに明治二年正月五日、小楠參與の官位を以つて退朝の歸途、遂に刺客の毒刄に倒れた。時に六十一歳、京都天授庵に葬り、遺髪は秋津村に埋葬せらる。

小楠は妻子に早世され、後上益城郡津森村の矢島源助の妹を娶り、子を成した。後の横井時雄がそれである。矢嶋氏は德富蘇峰氏の叔母で、女子教育家矢嶋楫子の姉妹、小楠の長女は海老名彈正の妻女である。

米田是容

米田是容は、監物と稱した。元米田氏で、文化十年二月十一日の生れ、家は世々細川公の家老で、祿一萬五千石を貰つてゐた。初めの名は源三郎といひ、天保三年十月家督を相續した。

是容はもと、朱子學を信じ、後實學に轉じ、嘉永三年、米艦相摸の海に來るや、幕府、細川藩に命じて浦賀を警戒せしむ。當時海内は、上下をあげ騒然たり、この中にあつて是容等は衆議を排して開港に決すべく盡力した。是容は純忠至誠、夙に尊王の志厚く、晩年はいよ〳〵心を皇室に傾け、幕府の失政を嘆じた。

安政六年八月十日、年四十有七歳を以つて病歿した。

轟木武兵衛

轟木武兵衛は、名は胤道、游溟と號した。櫻園の門に學び、次に近藤淡泉の塾に學んだ。宮部鼎藏、永島三平と相前後して江戸に上り、天下の志士と往來して議論を闘はした。米艦の浦賀に來るや、武兵衛上書して、内外の事勢を論じたが省みられず、空しく肥後に歸り、子弟を教養した。

萬延、文久の頃にいたり、肥後藩内に勤王の論大いにおこるや、武兵衛又大いにその間に活躍した。次で長岡公に從つて江戸に上り公卿有志の間に奔走し、鷹司關白に對し攘夷の實行を促し、遂に朝議是に決し、武兵衛の名天聽に達した。

斯くて親兵に選ばれ、三條公に從つて長州に下る時、武兵衛は、山田信道と共に京都にとまり、回復に力めた。然るに歸藩を命ぜられ、歸國の途、久留米に於て偶捕吏に捕へられ、獄に投ぜられた。獄窓生活三年、明治維新と成るに及び、法官となつたが、明治六年五月熊本において病歿した。時に五十六歳であつた。

太田黑伴雄

太田黑伴雄は幼名を鐵兵衛といひ、飯田熊二の二男である。四歳の時父と死別し、母の手で育てられた。幼年時代は腕白で、十五歳頃から温厚となり、林櫻園の門に入つてから敬神崇祖の念固く、長ずる

に從つて剛毅果斷、博學多才、武藝に通ずるに至つた。

一時大野家を繼ぎ、次で明治二年太田黑の養子となり、名を伴雄と改めた。然るに世は物情騷然、外夷徒らに誇り、我が皇國の前途を憂慮し、敬神尊王を以つてその主義とした。

明治三年櫻園に從ひ江戸に赴き、三條公其他の顯官に謁して、政治上の意見を開陳した。越えて明治九年三月、政府より廢刀の令出ずるに及び、これを痛嘆し、更らに斷髮令に慨し、遂に明治九年十月二十四日夜半を期し神風連の擧兵となつた。即ち首領伴雄、加屋霽堅等百七十餘名は、熊本鎭臺を襲ひ、震天動地の活劇を行つたが、衆寡敵せず、飛彈遂に胸を貫くや、皇上おはす東の空に頭を向け、弟に向ひ、「宗三郎早く首を擊て」と、雄々しく叫べば、宗三郎、今はこれ迄と「兄上御免」と、三尺の秋水下に見事な最後を遂げた。時に四十三、飽託郡內田村新開に葬る。櫻山祠堂に祀られてゐる。

加屋霽堅

加屋霽堅は、幼時櫻園の門に學び、惟神の道を聞き、尊王の志に篤かつた。文久二年、肥後藩內に勤王の論起るに及び、霽堅又同志と共に、東奔西走し、長岡公子の江戸行きに隨つては、公卿同志の間をかけ廻り、重きをなした。

文久三年正月、公子歸國に及び、霽堅は、宮部鼎藏、山田信道、河上彥齋等と滯京を命ぜられ、禁闕の衞士となつた。次で學習院錄事に任ぜられた。

然るに七卿の長州落ちとなり、霽堅等は歸藩を命ぜられ、幽閉四年後許された。其後、錦山神社祠官に任ぜられたが、廢刀令の發布に會ひ、遂に明治九年の神風連に加はりて、熊本城中で戰死した。時に四十一であつた。大江町是法に葬る。

池邊吉十郎

池邊吉十郎は、天保九年熊本市京町に生る。父は細川公に仕へ祿二百石を食む。吉十郎は名を重章、少年時代は藩學時習館の門に入り、居寮生となり、後組脇步頭等に昇任し、明治二年熊本藩少參事に任じたが、同三年辭して、鹿兒島に行き、今藤宏氏の塾に入り、西鄕隆盛、桐野利秋、篠原國幹等を友として往來したが、同四年藩命によりて肥後に歸國、玉名郡橫島村に居を定め田園生活のかたはら、子弟を敎育した。

明治十年、西南役起るや、同志櫻田惣四郎等と相謀り、熊本隊を組織し、その大隊長となりて、西鄕軍に投じ、肥後、日向の各地に於て戰ひ、遂に西鄕のあとを追ひ鹿兒島に至るや、時偶々城山陷るに會ひて、縛につき、長崎に送られ、同年十月二十六日斬刑に處せられた。時に四十歲、玉名郡橫島村外平山に葬る。佐々友房及びその兄十城は吉十郎の友で、友房は熊本隊の小隊長として苦難を嘗めた一人である。

河上彦齋

河上彦齊は、元小森、幼少の時、河上源兵衛の養子となつた。天保五年十一月二十五日熊本市馬借町に生る。嘉永二年七月、細川公の花畑邸の掃除役となつたが、大志もだし難く、文を淵木寛胤に、兵學を宮部鼎藏に學んだ。

次で櫻園の門に入つた。時偶米艦浦賀に來たので、彦齋大いに憤慨し、同志を糾合し、尊王攘夷を說いたが、機到らなかつた。其後、幕府の横暴は更らに加はり、佐久間象山幕府の密使として、江戸に上り開國論を高調し、朝廷の討幕計劃を阻止せんとしたので、彦齋は久坂義助、前田伊左衛門等と共に、京都において象山を暗殺し長崎に下つた。後、彦齋は捕へられ熊本に監禁された。然るに天下の形勢は逆轉し、幕府鳥羽、伏見の戰に慘敗し、王政復古の時機到來し、許されて獄を出た。

長岡護美公に從つて上京、東北各藩に遊說し、京に歸れば、事志に反し歸國、豊後鶴崎に居を命せられた。明治三年七月熊本に歸れば、一切の面會を禁ぜられ、やがて投獄、東京に護送され、明治四年十二月三日遂に死刑に處せられた。時に年三十八歲、東京品川東海寺少林院に葬る。

佐々友房

佐々友房は、安政元年一月熊本市坪井に生れた。幼名は寅雄、名は坤次、友房と稱し、克堂又は鵬洲

の號がある。

八歲頃から時習館に學び、明治十年の西南役には、熊本隊を率いて、西鄕隆盛に應じ、一番小隊長となり、後中隊長として肥、薩の山野に奮鬪したが、薩軍の大敗に際し遂に官軍に降り、徴役十年に處せられ投獄したが、明治十三年二月特赦にあふて放免された。

出獄後は熊本に歸り、同心學舍を起して子弟の敎育に盡し、後濟々黌と改めた。今日の縣立中學濟々黌である。當時は市內藪の內町にあつた。

明治十五年にいたり、紫溟會といふ政治團体を組織して、皇室中心主義を高調し、明治三十三年にいたり熊本國權黨を創設し、中央に出でゝは大日本國民協會を組織し、國權黨を、これに結びつけ、明治三十年には歐米各國を遊歷して、世界の大勢を究め、歸朝するや國民協會を解散して帝國黨を創立し、大いに政界刷新を標榜した。當時政界は板垣、星一派の自由黨と、大隈の進步黨があり、帝國黨また隆々たるものがあつた。

更らに明治三十八年大同倶樂部の組織に奔走し、國家のために盡瘁せんとし、政界また期待したるも惜しむべし、明治三十九年九月二十八日東京に於て病沒した。時に五十三、熊本東郊小峯墓地に葬る。

古莊嘉門

古莊嘉門は、天保十一年熊本に生れた。少年時代藩命により長崎に遊學し、京都に上りて有志と交は

る。後熊本に歸り、長州の變に際し、その逃走者の肥後に來るを庇護したので、捕吏、同家を襲ひたるも、身を遁れて靜岡に走り、山岡鐵舟、勝海舟等に身を寄せ、大久保卿の許に行き、初めて世に出たといふ奇智剛快の士である。

然して、大阪上等裁判所の刑事となり、登用せられて司法省出仕となつた。しかるに廣澤參議暗殺の嫌疑により三年下獄の身となつた。

出獄後、東京に紫溟學會をつくり、熊本に紫溟會を組織し、佐々友房と共に大いに活動し、明治十四年濟々黌を創立された時、副校長となり、後官界に入り、書記官として令名を馳せ、次で第一高等學校長に任じた。一高の剛健質實な校風は、全く氏の創始によるものといはれてゐる。明治二十二年國會開設の際、職を辭して熊本に歸り、佐々友房、津田靜一等と共に國權黨を組織し、第一期の代議士となり次で臺灣總督府民政內務部長、臺灣州知事を始め群馬、三重知事を經、明治三十八年勅選され貴族院議員となり國政に盡すところ大なるものがあつた。大正四年五月十日、熊本市新屋敷町の自宅に於て歿した。時に七十六歳、大江町に葬る。

山田武甫

山田武甫は、横井小楠に師事し、長じて天下の形勢を察し、東西を歷遊して天下の志士と交りを結んだ。

然して、混沌たる幕末肥後藩に於ける武甫等の活動は見るべきものがある。即ち護久公は群議を排して武甫等の說を用ひ、佐幕の藩論を排擊し、天下の形勢又王政維新に傾き、幕府遂に政權を奉還して玆に王政復古の大業はなつた。

明治三年藩政改革に及び武甫は少參事となり、郡政係りを命ぜられ、治績大いに揚り、翌明治四年廢藩置縣に及び、武甫は熊本縣參事に昇進し、明治五年大久保利通の拔擢で內務省六等出仕となり、明治六年佐賀縣令等を經て熊本に歸り野に下つた。

明治十四年武甫は同志を糾合し九州改進黨を組織し、紫溟會と對抗し、縣政國政に參劃する所があつた。

武甫は、名を五次郎、元牛島氏であつたが、山田家を繼いだもので、明治二十六年二月二十三日議會開會中東京に於て客死した。東京青山墓地に葬る。

元田永孚

元田永孚は、熊本市山崎町に生れ、幼名を大吉傳之丞と稱し、茶陽と號し、後東野と改めた。文政元年の生れで、年十歲にしてすでに唐詩選五冊、論語二十篇を暗誦し、十一歲にして藩學時習館に入り、二十歲の時には時習館居寮生となり、横井小楠、長岡是容に學ぶ。

文久元年、君侯に侍して江戶に上り、元治元年征長の軍に從ひて小倉に向ひ戰功をたて、慶應三年高

瀬町奉行となり、治功著しかつた。明治四年宮内省出仕を命ぜられ、明治天皇の殊遇を辱ふして侍講となつた。同十九年宮中顧問官、更に二十一年樞密顧問官に進んだ。

彼の帝國憲法、皇室典範等の制定に參劃し、我が國教育の最高權威たる「教育勅語」の草案は實に恩命によりて起草したものであると承る。大帝或日「元田は朕が大公坊ぞ」と仰せられたといふ。畏れ多くも如何に　明治天皇の知遇を蒙むつてゐたが知られる。

明治二十四年一月二十二日、五十四歳を以て薨じた。東京青山に葬る。病篤きに及んで特使を以つて男爵を賜はつた。現在遺族は熊本市大江町に居住してゐる。

井上毅

井上毅は梧陰と號した。少年時代木下犀潭の門に學び、青年に至り時習館居寮生となつた。維新前早くも長崎に遊學して佛蘭西語を研究、明治三年には開城學舎の舎長となり、四年には司法省に出仕し、時の參議江藤新平に從つて歐洲を歴遊し、歸朝後大久保利通に從つて清國に渡り、大いに名聲をあげ、明治二十二年には司法省の法政局長官に昇進し、樞密院書記長官を兼ね、翌二十三年に樞密顧問に任ぜられた。

氏は、明治大帝の御親任厚く、彼の帝國憲法制定、皇室典範制定にあたり、その功偉大なるものがあつた。又、畏れ多くも、彼の教育勅語は肥後の碩學、當時侍講元田永孚と共に起草し大命を果し、克く

聖旨に答へ奉つた。

明治二十六年文部大臣となるや、教育の普及を奬勵し、實業教育の發達を鼓吹し、國民思想の統一を圖りたるが如き、實に名文相として天下周知の事實である。

明治二十八年三月十五日病を得、相州葉山において遂に永眠した。享年五十三歳で東京青山に葬る。

米田虎雄

米田虎雄は、細川藩家老にして、英邁の譽高かりし彼の長岡監物の次男であつて、天保十年六月の生れ、是容の子是豪の後を承けて、慶應二年九月肥後藩國老となつた。

明治戊辰の役に際し、各地に轉戰して功勞あり、同二年熊本藩大參事となり、同四年宮内省に出仕し同十年陸軍歩兵中佐となり、後宮中に入りて侍從に任じ、明治二十五年十月、先功により華族に列せられ、更らに大正三年五月子爵に昇叙、宮内省主獵の頭として侍從を兼職した。

明治大帝の側近に奉仕すること實に四十年、大帝の寵遇極めて厚く、先帝の御威德を翼賛し奉つたが大正四年十一月二十七日七十七歳にして東京で沒した。

米田子は宮中においても逸話、逸事多く、剛邁忠直の名高く、曾つて、明治大帝の御壯年時代、陛下と時々相撲を試み、天皇の御機嫌に叶つたといふことである。

竹添井々

竹添井々は、名を進一郎、井々はその號で又外に光鴻、漸卿等の號がある。天保十三年、天草大矢野島に生る。その家世々醫を業とした。

年十四歳にして熊本に出で、木下犀潭の門に學び、井上毅と並び稱せられた。後、熊本市瀬戸坂に私塾を開き子弟の教育に務めたが、間もなくして玉名郡伊倉町に移つた。明治八年志を興して清國に遊び足跡殆ど四百餘州を踏破したといふ。

後、朝鮮公使となり、帝國大學教授となつたが、病のために官を辭して、專ら著述に力を注いた。就中春秋左氏會箋は、氏が畢生の名著で、學士院賞に預り、次で文學博士の學位を得た。大正六年四月三十一日、小田原の寓居に於て客死した。時に七十有六、東京音羽護國寺に葬る。

熊本縣の産業

一

我が熊本縣は、西日本の雄縣として、近時、産業、文化に、觀光に、經濟にあらゆる方面に、活躍の跡みるべきものがある。此處に、昭昭八年に於ける、本縣の産業狀態を一瞥すると、總生産額は、一億九千三百九萬五百八十一圓にして、前年と對比すれば、實に三千百二十七萬九千七百五圓の大激增である。これに徵しても、如何に我が熊本縣が、新興潑剌たる生産國として、天下に號令してゐるかを知ることが出來る。

即ち、その内譯は、農産八千三百十九萬五千六百十六圓、畜産三百三十五萬七千四百九十八圓、林産五百八十萬五百五十一圓、鑛産七百十三萬二千百六十四圓、水産四百七十三萬二百八十四圓、工産八千八百八十七萬四千四百六十八圓である。

二

而して、農産は、總生産額の四割三分を占め、就中米は、四千四十六萬三千九百十四圓の巨額に達し蠶繭は一千三百五十二萬五千二百五十四圓、麥は、九百四十三萬二千七百九十八圓、蔬菜類は、五百十

二萬三千六十七圓、甘藷馬鈴薯四百十四萬七千六百七十三圓等は、その主なるものである。

工產は、總額の四割六分に當り、內蠶糸類一千五百七十二萬九千四百七圓、製造肥料の九百二萬四千四百七十五圓、西洋紙の八百三十四萬百四十八圓、酒類の四百七十五萬六千四百五十七圓、セメントの二百六十五萬五千二百九圓等はその主なるもの、鑛產は、總額の四分に當り、石炭の五百九十八萬四千四百五十二圓、林產は、總額の三分に當り、用材の二百六十七萬九百三十九圓、木炭の百四十七萬五千百九十九圓、薪炭材の八十三萬五千三百六十五圓、水產物は總額の二分に當り、漁獲物二百六十萬八千二百四十圓、水產製造物の百八十五萬二千八百二十四圓にして、畜產は總額の二分で、鷄卵の百十九萬三千八百九十一圓、屠肉の七十七萬七千八百四十七圓となつてゐる。

三

更らに、これを郡市別に對比すれば、各種の工場を有する熊本市の四千十六萬三百十五圓を筆頭に、これに亞ぐは八代郡の二千三百六十萬二千九百十八圓、玉名郡の二千百十九萬二千六百三十七圓、葦北郡の一千七百三十二萬三千三百九十圓、天草郡の一千四百二十七萬七千二百四十六圓、球磨郡の一千百五十三萬五千六百九十一圓等にして、菊池、下益城、上益城、鹿本、飽託、阿蘇の各郡の順で、宇土郡の四百三十九萬四百三十九圓が最少となつてゐる。

なほ、これを一人當りの、生產額について算出すると、葦北郡の二百二十五圓を最高に、熊本市の二

百九圓の第二位、球磨郡の二百四圓で、下益城、玉名、菊池、鹿本、上益城、球磨、飽託、宇土、阿蘇天草の順で、各郡市の平均は百三十四圓になつてゐる。

縣產業の大勢

我が熊本縣の產業は、近年大いに面目を改めるた至つた。今こゝに、各業態別に大觀すると次の如くである。

農業

熊本縣は、九州の中部を占め、縣界は殆ど山岳で圍まれてゐるが、球磨川、綠川、白川、菊池川等が流れて、熊本平野、菊池平野、八代平野を形成し、氣候は溫暖で土地は一般に豊饒である。從つて、古來屈指の農產縣と呼ばれてゐる。

主產物は、勿論米で、肥後米として天下に堂々の陣を占めてゐること、すでに世の認むるところである。麥は、畑地に栽培するほか、水田の二毛作として栽培され、粟、大豆、甘藷は各地到るところに產し、玉蜀黍は阿蘇地方に多い。

特用作用の茶は、生育良好で、近時、大いに製法も改善を加へられ、面目一新した觀がある。藺は、八代地方に、大麻は球磨地方に多く產し、蔬菜は、熊本、川尻附近に多く栽培せらる。果實は、河內蜜柑、小天蜜柑を筆頭に、熊本附近、網田、三角方面に產する。

養蠶は各地に行はれ、中にも菊池、鹿本、天草地方が最も盛んである。牛は阿蘇、上益城、天草に多く、馬は阿蘇、上益城の產が名高い。

林產物は、阿蘇、球磨、玉名、天草方面が、山岳地帶とて、多く產出してゐる。

養蠶

肥後が、養蠶國であることは、上古錦部を置かれたことによつても知ることが出來る。熊本の錦山は子飼(蠶飼)と共に、その昔が偲ばれるし、玉名の錦川も、畑部(服部)のあるに依つて、その遺跡なることを知ることが出來る。

現在、本縣の蠶絲業は、九州においても第一位を占め、全國的に見ても有數の位置にある。

牧畜

肥後が、名馬の產地であることは、鎌倉將軍の愛馬生唼(いけづき)が、宇土浦上の牧場から出たといふ傳說あるによつても知ることが出來る。養畜の盛んなところは、菊池、阿蘇、上益城、下益城、八代、球磨等の

諸郡で、特に阿蘇、上益城の兩郡は、產馬、產牛共に最も多く、南鄕馬、朝日馬、矢部牛、小國牛等はすでに世に名高く、又天草は牛の飼育が盛んで、大矢野島は、乳牛の產地として特に有名である。

これ等山岳地方の養畜は、山林の經營と共に、最も重要な農村の副業としてゐる。羊豚の飼育は、近年著しく多くなつた。

菊池郡西合志村には、農林省管轄の熊本種馬所の設けがあつて馬匹の改良に努めてゐる。

水產

熊本縣は、西部一帶が海に臨んでゐるから、天草を中心として、玉名、宇土、八代、葦北の沿海地方は漁業盛んに行はれ、その產額は、昭和八年において四百七十三萬圓に上り、就中產額の最も多きは、鰮で、鯛、鰻これに亞いでゐる。河川には鮎を產し、殊に球磨川鮎は一般に賞味されてゐる。

林產

本縣は、山岳で圍まれてゐる關係から、山林の面積は三十萬町歩の多きに達し、加ふるに氣候は溫和で、而かも多濕であるから、林樹の發育は、頗る良好である。

用材樹の主なるものは、杉で、檜、松、之れにつぎ、楠、けやき等も又少くない。薪炭樹は、かし、くぬき等で、松も又薪炭の料に用ひらる。その他竹林もよく風土に適し、繁茂してゐる。

最も林產に富んでゐるのは阿蘇で、球磨、葦北、上益城、玉名等の諸郡これにつぎ、天草郡は薪炭材の產出が多い。

鑛業

熊本縣は、鑛產物に乏しく、鑛業は玉名郡萬田、四ツ山の石炭と、其他銅、鐵の產出を見るのみで、これ等は何れも少額にして、他に特記すべきものはない。天草の石炭は少額ではあるが、無煙炭としてその名を知られてゐる。

工業

本縣は、從來工業地として、世人の注意を惹くこと、少かりしが、近時著しくこの方面にも發達し、製造肥料(九、〇二四萬圓)、セメント(二、六五五萬圓)、西洋紙(八、三四〇萬圓)の製造工業盛んとなり養蠶業の普及發達は、蠶絲業(一五、七二九萬圓)の隆盛を促し、又酒(四、七五六萬圓)、醬油(一、八四九萬圓)は近時頓に聲價をあげ、盛んに縣外に販路を擴張するに至つた。

最近電氣工業の發達に伴ひ、水利の天惠を有する本縣の工業界は、遠からずして面目を一新するものと期待されてゐる。

なほ、本縣には、清正公が朝鮮から齎らしたと傳へられる赤酒がある。これは灰持と稱して、廣く飲

用してゐたが、明治十二年頃から、清酒の醸造が奬勵されるに伴ひ、この赤酒は餘り多く用ひられざる樣になつた。けれども、元旦の屠蘇其他の祝事には、必ずこれを用ひる習慣がある。熊本に遊ぶ者一度はこれを試みるも一興である。

熊本市の產業

工業

熊本市は、由來、官衙と、學校と、軍隊からなる所謂消費都市として、發達しただけ、工業界は、餘り振はなかつたが、時代は進み、交通に、文化に、一革新を齎らし、こゝに消費都市の名は一變して、工業都市の面目、着々として實現し、漸次工場の設立、企圖の機運擡頭したことは、熊本當然の結果である。これは云ふまでもなく、金融機關の普及と、豊富なる電力の供給、或は交通運輸方面の、地の利から見ても、好條件を具備してゐるといへる。從つて、工業界は家庭工業から、機械工業に、小資本から大資本へと推移し、近年にいたりては、著しくその面目、形觀を整へるに至つた。

熊本市における工業品中、現在發達し、又將來有望視せられる種類は左の如くである。

一　飲食料品　醬油、酒類（清酒、燒酎、赤酒）清涼飲料水、製氷、麵類、菓子、水產加工品
二　染織及纖維工業品　染物、織物、紡績、眞綿、莫大小（靴下）、製紙（塵紙）
三　化學工業品　木蠟、製油（種油及椿油）漆器、石鹼、化粧品
四　雜工業　木工品、竹製品、錫器、肥後象嵌、和傘、洋服、製靴、履物、肥後すゐき、毒消丸、及物、玩具

一　飲食料品

醬油　本市の醬油釀造業は、明治十八年の稅則施行當時より、大いに發達し、爾來研究會の組織、同業組合の設立、先進地の視察、釀造法の改善など、その努力の跡は、遂に先進地たる野田、銚子の醬油に對抗し、多大の名聲を博してゐる。生產高は、三八、〇六七石に上り、縣內は勿論、九州各縣、中國、臺灣、滿洲、支那、朝鮮、南洋方面に活躍してゐる。品質の優良、これを以つても知られる。なほ研究機關たる、熊本醬油研究所は、市內大江町にあり、大正六年十二月、熊本縣醬油同業組合より、縣費の補助を得、竣工したもので、斯界の改善に意を注ぎ、成績見るべきものがある。

清酒　明治十二年に酒造組合を組織してから、當業者も一致協力、品質の改善、向上に力を注ぎ、大正七年八月には、島崎町に、資本金貳拾萬圓の株式會社熊本酒造研究所を設立し、釀造法の研鑽を重ね、その結果は、九州における銘釀地として知られたるに至つた。その主なる銘酒は、香露、池月、九

曜正宗、粹界等で、これ等は先進地の銘酒に比し、遜色を見ざるのみか、否、寧ろ優秀の地歩を占めてゐる。生產高は一、六三二石である。

燒酎　豐富なる原料と、天與の硬水に惠まれ、その製品は品質の格一と、度數の正確とを以つて特徵とし、生產高は一七、〇一二石に達し、販路は九州各地は勿論中國地方に進出し、出水町の大日本酒類釀造株式會社熊本工場の活動見るべきものがある。

清涼飲料水　本市に於ける清涼飲料水はセービス、サイダー、ラムネ及び果實蜜等で就中果實蜜の製造開始は京阪よりも古く、其品質の優良なる點他の製品を凌駕してゐる。製造戶數十戶、年產額五五八、〇〇〇圓で販路は縣內外に止まらず遠く海外へも輸出してゐる。

製氷　本市の製氷は、明治三十八年五月、合資會社熊本製氷所の設立と共に創まり、大正八年六月日東製氷株式會社熊本營業所と稱し、二十二工場（練兵町）四十八工場（春日町）を有してゐたが、大正十三年八月、肥後共同製氷株式會社（本山町）を合併し、其の後昭和三年九月現在の大日本製氷株式會社熊本營業所（練兵町）の名稱に改稱した。供給區域は八代郡、葦北郡を除く縣下一圓にして、生產數量二〇、八一一噸である。

麵類　本市麵類業は、本縣が原料小麥の生產地で品質佳良、價格低廉なる關係から、早くより發達し、七瀧素麵、白髮素麵、葛素麵、平麵の如き著名なる製品がある。一年生產高は三十萬貫を超へ、販路は縣內を主とし、縣外は鹿兒島を第一位とし、宮崎、福岡、遠くは東京、大阪、北海道、朝鮮、滿洲

に及んでゐる。

菓子　本市の名菓として、既に定評あるものは朝鮮飴である。この外カステーラ、羊羹、生菓子、水飴及市内職人町に雜菓子の生産が盛んである。年産額九十一萬八千圓で、土産品としては朝鮮飴の外柿球肥、檜垣飴、柿飴、肥後瓦、夜の梅、火山おこし、ばつてん飴、火の國飴等がある。

水産加工品　本市水産加工品としては、鯛の花、水前寺苔等が著名である。鯛の花は、明治三十九年頃より製造せられ、其の販路内地に止まらず奉天、大連、上海に及んでゐる。尙毎年生産數量は三千貫に達する。

二　染織及纖維工業品

染物　德川時代に於ては、染物業は頗る盛んであつたが、明治維新後一時衰運を來し、其後、次第に好況に向ひ、明治四十一年には熊本染物組合を組織し、更に昭和五年一月同業組合準則による强固なる組合に組織を更め、當業者協力一致研鑽の結果、黑紋付の如きは、京染に比し、何等遜色を認めざるに至つた。尙昭和九年九月、組合の事業として春竹町に共同作業場を設置し、技術者を先進地より招聘して、熊本裏地染の製造を始めた。製造戸數三十一戸、生産高七万八千圓に達し、縣下は勿論、九州管内、朝鮮、滿洲、臺灣にまで移出され、益々發展の域にある。

織物　本業は、近時大いに伸展し、主として廣巾物を産出し、其需要も逐年增加し、又昨年よりは

綿英ネル、小濱縮緬の大量生産を開始し、優良品の安價提供を目標に進んでゐる。製造戸數二十一戸、生産高は絹織物一、二六三反、二一、八七六圓、綿織物一五九、七三五反、一五二一、〇九一圓、販路九州各縣、熊本織物同業組合(春竹町)は明治十一年六月五日創立で、織物の改良、販路の擴張に努力し、斯業の發展に貢献してゐる。

紡績　本市の紡績會社としては、鐘ヶ淵紡績株式會社熊本支店（春日町）の唯一つがある。紡機一二、一八八錘の外織機三百臺の運轉をも開始し、規模宏大である。製造高は、綿糸中糸八六三、三八五瓩、同價額七六三、五九五圓、綿布金布七、〇四八、七六〇碼、同價額一、四〇九、七五二圓、販路は内地は勿論滿洲、上海、揚子江、新嘉坡方面である。

眞綿　眞綿は、近年養蠶業の發達に伴ひ、屑繭の生産增加と共に、將來有望なる副業として、逐日發達してゐる。生産高七二〇貫位である。

莫大小　製品の主なるものは、靴下で、中坪井及東坪井町一帶に製造してゐる。官衙學校の都市だけに需要は增加し、發達の域にある。製造戸數七戸、生産高九、一五〇圓

製紙　東寺原町及大江町渡鹿に於て漉返し紙を製造する、其製品はすべて手漉にして機械製品よりも彈力に富み、一般に需要されてゐる。生産高四五、〇〇〇圓である。

三　化學工業品

木蠟　製蠟業は、其の起源頗る古く、今を去る二百年前に始まる。肥後製蠟株式會社は一百有余年の經歷を有し、明治三十五年五月株式組織となり現在に及ぶ。製品の品質優良なる點に於て、他に其の比を見ない。主として、化粧品及蠟燭の原料に使用せらる。年産額二一五、四四八圓にして、其の販路は內地は勿論外國にまで及んでゐる。

製油　本市に於ける製油の種類は種油及椿油である。椿油は原料に純椿を使用せる爲め、品質特に良好、近時、當業者競ふて、生産の增進に努めたる爲め、長足の進歩をなし、其需要は、阪神、東京、長崎、朝鮮、上海等にまで及んでゐる。製油戸數五戸、生産高九〇、五八一圓

漆器　本市に於ける、漆器製作の濫觴は、三百年以前にあるが、所謂肥後漆器として、世に著はるゝに至つたのは、明治三十四年以來、本市が各方面の指導奬勵を行つた以後の事である。而して、又最近は市立の工業研究所內に漆工部を設置し、優良なる模範品を製作し、當業者の啓發と指導とに努めてゐるので著しく商品の價値を高めつゝある。製造戸數三十二戸、生産高三四、七五一圓

四　雜　工　業

木工品　主なる製品は、簞笥、紫檀細工、机等各種家具什器、建具類、桶樽類、挽物類、箱類で近時製品の改良著しく販路進展の氣運盛んである。製造戸數二七七戸、生産額三九八、一〇八圓

竹製品　竹材豐富な爲め、特産品と稱するもの乏しきも種々の製品を製作す。其主なるものはステッキ農具及一般家庭用品、籠、杓子、箸等で、新興的のものに、昭和ハンガー(衣紋竿)及一刀彫り(短冊掛)等がある。製造戸數七六戸、生産高二五、八八五圓

錫器　錫器の製造は、明治三十二年初めて本市に於て製造するに至つた。其の製品は純錫で、他の不純物を混入せず、意匠の進歩と美術的技巧とを以て特徵とするため特に珍重せられ、今や本市の特産品たる價値を認められてゐる。製造戸數五戸、生産高一七、六〇〇圓

肥後象嵌　技巧精緻で、古來其名高く、昔は主として刀の鍔に、金銀の象嵌を配して居たが、時代の變遷に伴ひ、現今は、時計鎖、カウス釦、羽織紐等を製造してゐる。製造戸數三戸、生産高六、二〇〇圓

和傘　本市に於ける和傘の製造は、百五十年前に始まる。最近は當業者の熱心なる研究によつて、品質大いに改善せられ、産額も亦著しく增大して聲價を擧ぐるに至つた。而して本市製品は堅牢で、耐久力に富む故を以て、他縣へ移出するものも多い。製造戸數三六戸、生産高四四、五一四圓

洋傘　洋傘製造は、近時極めて優良の成績を擧げ、其製品も優美堅牢を以て賞せられ、他縣の注文に應ずるものも頗る多い。製造戸數二戸、先産高二七、〇七五圓

洋服　官公署、學校の都市たる必然の結果として、逐年需要は增加し、技術も亦長足の進歩を示し

今や先進都市に比し敢て遜色を見ざるまでに至つた。製造戸數一八三戸、生産高五二七、九九三圓

製靴　近時安價なるゴム製品の多きに拘らず、洋服業と同じく、逐年其需要增加し、一面製靴組合の活動著しく、協力して生産費の低減、製品の改善、販路の擴張等に邁進せる結果、産額も著しく增大し、製造戸數五七戸、生産高一一八、〇〇〇圓を算するに至つた。

履物　近時産額益々增加しつゝある。肥後特産の燒杉下駄は、原料として、阿蘇より移入したる杉の間伐材を利用したものである。大正十年東京平和博覽會の際、肥後の駒下駄として、其名を擧げてより、低廉且つ履き心地よきところから、よく東都京阪地方にも歡迎される。製造戸數卸七戸、小賣一五〇戸、卸生産高一、七五〇、〇〇〇足、小賣七六〇、〇〇〇圓

武具　本市の武具は、由來尙武の熊本として知られた丈けに、生産高の著しきものはないが、其の製品は相當發達せるものがある。製造戸數一四戸、生産高一五、七〇〇圓

肥後ずいき　往昔藩主より、代々將軍家へ獻上せられ、又參觀交代の折等藩主はこれを江戸への土産物として、江戸人士の賞讃を博せるものである。食して美味なるのみならず、質柔軟にして强靭、輕く且つ美しく婦人の髮飾、手藝材料等に用ひる外、興趣深き用途がある。

賣藥　本市の賣藥は、種々あるが、吉田毒消丸は、その代表的のものである。文政年間長崎の外醫「シーボルト」の秘法を傳へたるものと稱せらる。製造戸數一二一戸、生産高一二八、六五四圓

刄物　庖丁類を主とし、鎌、鍬等の農具をも製造す。製造戸數二五戸、生産高一六、五〇〇圓

玩具　木竹製玩具を主とし土製玩具及紙製玩具をも産す。製造戸數一二戸、生産高六、九三〇圓

特種工業

電氣　當市に於ける電力供給は、熊本電氣株式會社の獨占に係り、大正三年初めて、黑川第一發電所の水力により發電するに至つた、而して菊池川、津留、高瀨等の各發電所相次で設置せられ、今や十三ヶ所に之を有し、近く又新設の計畫にて益々其の事業を擴張しつゝある。目下總額二千七百七拾五萬圓に增資し、其の規模の大なること、他縣にも比類稀で、其の供給區域も熊本縣の大部分及福岡縣、大分縣の一部に及んでゐる。

瓦斯　本市に於ける瓦斯の供給は、西部瓦斯株式會社熊本支店により行はれつゝある。本社を福岡に有し、福岡熊本、長崎、佐世保を供給區域となし、最も力を瓦斯の特徵とする熱用及工業方面に充てた結果、文化の發展と共に其發達著しきものがある。

煙草　本市の煙草は、熊本地方專賣局の製造販賣に係り、敷地一萬二千余坪にして規模廣大實に九州一の稱がある。職工男女合せて一千人に達し、生産高刻煙草一、七九〇、六九四瓩八五〇、卷煙草使用高は一、四五〇、〇〇一、五〇〇本にて、之が販賣價額合計六千七百二十四萬余圓である。尙煙草使用高は三、一二九、六五〇瓩七七五である。

工業機關

熊本縣商工奬勵館染織試驗部　元熊本縣工業試驗場と稱して大正十一年四月設立、昭和二年獨立して

春竹町に新築し、設備を充實して一層の改善發展を期して居たが、昭和五年四月より縣商工奬勵館の染織試驗部となり、一般の改善進展に努力して居る。

熊本市工業研究所　昭和二年四月新町一丁目に設立、始め市役所内に於て事務開始、仝年九月新設事務室へ移轉と共に、意匠圖案の調製指導並同所に附屬工場を設け、優良なる木工及漆工の模範品の製作展示等を行ひ、一般工業品の改善助長機關として其の機能を發揮しつゝある。

商　業

熊本縣は、古來農業國たるため、又地形が海運の利便に乏しかつた關係上、商業地としての活躍はなかつたが、時代の進展と共に、諸種の經濟事情革まるに從つて、商工業日と共に進み、殊に運輸、交通通信及金融等の諸機關完備するや、當業者の自覺と相俟つて、益々目覺ましい發展を示し、其の商勢は九州、四國、中國、近畿は固より關東、朝鮮、滿洲方面にまで擴大するに至り、全國有數の商工都市として知らるゝに至つた。

商業機關

株式會社熊本米穀取引所　（壺屋町裏二番丁）　本所は明治六年設立の米商會所に胚胎し、其の後幾多の變遷あ

り、明治二十六年十二月組織を株式に變更、現在の名稱に改む、大正八年五月增資して參拾萬圓となし營業今日に及ぶ。

熊本海産株式會社　（新町三丁目）　藩制時代、細工町に海産物卸小賣商十數人露店を設け營業したるに始り、明治十年西南戰役後、現在の位置たる新町三丁目に移轉した。明治二十二年始めて魚類販賣組合を設立し、同三十一年合資會社に改め、大正二年株式會社に組織を變更資本金十万圓なりしも、大正十年資本金參拾萬圓に增資し、尙昭和四年七月更に七拾万圓を增資して現在壹百萬圓の資本金である。

熊本青果株式會社　（新町三丁目）　明治二十二年六月、魚菜市場組合を組織し、現在の地域に木造瓦葺平家のバラック建を築造し、營業し來りしが、昭和五年十一月、資本金十二萬圓の株式會社に組織を變更今日に及んだものである。

熊本商工會議所　熊本商工會議所は市内行幸町に在り、明治十二年設立の熊本商法會議所に起源する。明治二十四年組織を變更し、名稱を熊本商業會議所と改め、更に昭和二年四月新に制定せられたる商工會議所法により熊本商工會議所と稱す。春季の春の市、秋季の見本市等常に商工界の中心となり、斯業の振興に關する各種の奬勵事業をなし、其の貢献頗る大なるものがある。

百貨店　大規模百貨商店の勃興は、近代商業界の趨勢であるが、我熊本に於ても近年商工業の發展に伴つて漸次千德（安巳橋通）、八木（紺屋町）、銀丁（新市街）、和泉屋（迎町）等のデパートが現はれるに至つた。而して之等の百貨商店は其の有する大資本の力によつて、總ゆる現代的施設をなし、巧みに顧客を吸收して日々殷賑を極めてゐる。

勸業館　熊本勸業館は、大熊本産業振興の大目的を以て、市の中心地新市街の一角に設立されたる、市立の商業

機關であつて、昭和五年四月開館と共に、市及縣下の生産品を隈なく陳列し、委托販賣を實行してゐる。業務として生産品の改善、商品價値の向上を圖るため參考品の陳列展示、意匠圖案の調製委託等當業者の指導啓發に努むる外、隨時各種展覽會の開催並に出張販賣の實行等により生産品の紹介宣傳、販路の擴張を圖る等、專ら使命の達成に邁進しつゝある。而して最近は特に利用者多く出品物輻輳して場所狹隘を感ずるの狀勢にて名實共に産業の熊本市を反映してゐる。

勸業協會　熊本勸業協會は、勸業館乃至市當局と策應して、本市産業振興の大目的に向つて邁進すべく、昭和四年五月全市當業者を網羅して組織されたる半官半民的の團体である。本市産業團体の統制機關であるが一面當業者對市當局の連絡機關ともなつてゐる。

商工奬勵係　熊本縣商工奬勵係は、市内南千反畑町に在つて、明治二十八年十月觀聚館と稱して設立されたのに始まる。同三十五年九月には熊本物産館と改稱し、縣内外の物産陳列、委託販賣、産業の振興に關する諸種の施設をなすに至つた。更に大正五年七月即賣館を新設公開して、大正九年四月には縣商品陳列所と改稱し、益々本縣産業の改善發達に努むると共に、同所出品者を以て出品協會を組織し、相互の聯絡を圖るは勿論、縣下物産の販路擴張上にも努力して居たが、昭和五年四月現在の名稱に改稱して一層の効果を收めてゐる。

金融機關

熊本市は、九州の中心にして、本縣經濟並に産業の中樞地たる關係上、銀行、信用組合、無盡會社等の諸機關備はり、取引關係も本縣は勿論鹿兒島、福岡、佐賀、長崎、大分等の各縣に及び、地方金融界

に於ける至大の勢力を示しつゝある。而して、市内金融季節としては、繭絲資金の需要期及米穀並酒類の移動期又は盆暮の一般勘定期等に著しく繁忙を呈する。

銀行

金融機關として最も重要なる銀行は、本市に於ては、明治十年肥後銀行の創設せられたるに始まり、爾來各種商工業の發達と共に、次第に增設せられ今日に至つたものである。銀行數は總數十二行にして、普通銀行に本店銀行として肥後銀行の一行がある。他は全部安田、第一、住友、十八等の各支店であつて、各々貸付と割引とによつて資金の融通に任じて居る。對物信用を與ふる機關に日本勸業銀行の支店があり、不動産又は動産を抵當として、金融の便を圖り産業の助成に努めてゐる。

株式會社日本銀行熊本支店（船場町一丁目）
株式會社肥後銀行（紺屋町一丁目）
株式會社肥後銀行春日支店（春日町）
株式會社安田銀行（上通町）
株式會社住友銀行熊本支店（魚屋町二丁目）
株式會社十八銀行坪井支店（上林町）
株式會社日本勸業銀行熊本支店（花畑町）
株式會社肥後銀行坪井支店（南新坪井町）
株式會社安田銀行熊本支店（米屋町一丁目）
株式會社第一銀行熊本支店（中唐人町）
株式會社十八銀行熊本支店（米屋町一丁目）
株式會社不動貯蓄銀行熊本支店（辛島町）

信用組合

本市に於ける、信用組合には、有限責任熊本信用組合、及保證責任熊本協同信用組合、有限責任熊本市昭和信用組合及熊本縣信用組合聯合會等がある。就中熊本市昭和信用組合は、市役所に在つて昭和九年一月の創立であるが、前身熊本市信用組合の後を受け、庶民金融機關として、着々其の眞價を發揮し全市民の信頼を擔ふてゐる。

無盡會社及貯金會社

寶壽貯金株式會社（花畑町）
東洋貯金株式合資會社（壺屋町二番丁）
熊本無盡株式會社（花畑町）
福榮無盡株式會社（花畑町）
九州貯金株式會社（櫻町）
肥後無盡株式會社（山崎町）

生命保險

第一生命保險相互會社熊本支部（新屋敷町）
昭和生命保險相互會社熊本支部（上通廻田畑町醫師會館內）
仁壽生命保險株式會社熊本支店（廣町）
共保生命保險株式會社熊本支部（新屋敷町）
日本徴兵保險株式會社熊本支店（吳服町）
千代田生命保險相互會社熊本支部（練兵町早野ビル）
日清生命保險株式會社熊本支社（鍛冶屋町）
日華生命保險株式會社熊本支部（新町）
有隣生命保險株式會社熊本支部（櫻町）
太平生命保險株式會社熊本支社（本庄町白川端）

帝國生命出張所（中唐人町）
安田生命出張所（春日町）
東洋生命出張所（古城堀端町）
日本生命出張所（長六橋際）
明治生命出張所（小幡町）
大同生命出張所（水道町）

會社

熊本電氣株式會社（紺屋今町）
株式會社肥後蠶糸組（花園町）
鐘ヶ淵紡績株式會社熊本支店（春日町）
株式會社松岡製糸場春竹工場（春竹町）
肥後製蠟株式會社（出水町）
熊延鐵道株式會社（春竹町）
松田工業株式會社（迎町）
熊本製氷株式會社（大江町）
片倉製糸紡績會社熊本尾澤製糸所（田崎町）
熊本製糸株式會社（大江町）
九州ノート株式會社（本山町）
古莊合資會社（山崎町）
古莊株式會社（古川町）
郡是製糸株式會社熊本工場（池田町）
大日本酒類醸造株式會社熊本工場（出水町）
肥後製糸株式會社（內坪井町）
株式會社熊本米穀取引所（壺屋町裏二番丁）
熊本電氣軌道株式會社（市外日吉村）
熊本海産株式會社（新町三丁目）
株式會社大同洋紙店九州支店（魚屋町一丁目）
熊本青果株式會社（高麗門裏町）
菊池電氣軌道株式會社（黑髮町）
大同印刷株式會社（昇町）
日東製氷株式會社廿二及四十八熊本工場（練兵町、春日町）
株式會社熊本酒造研究所（島崎町宮內）
古莊土地株式會社（山崎町）

産業組合

産業組合は中產以下の者、勞役者、俸給者等をして其の精神上の團結と、物質上の相助とによつて自由競爭の激甚なる社會に處して、經濟生活上の便益を享受し、其の恒產を治め、恒心を涵養せしめ生活の安定を得せしむる制度であつて、其の發達普及は直ちに國家社會の進運を招來するものである。されば我熊本に於ても、當路者並に當事者の自覺と共に、既に明治四十二年有限責任熊本信用組合の組織されたのを嚆矢として漸次其の設立を見るに至つた。

即ち、肥後米穀社、熊本協同信用組合、熊本昭和信用組合、熊本縣信用聯合會、熊本市飽託郡乾繭販賣利用組合、熊本縣乾繭聯合農業倉庫、池田町農乳販買購買利用組合、熊本味噌工業組合、熊本清涼飲料水工業組合、熊本縣ラヂオ商業組合等がある。

工業組合・商業組合

商業組合、及、工業組合は、中小商工業者が同業相助、自力更生の目的から、經營內部の合理的改善を圖り、配給機關として、積極的に共存の意義から、結成したる團体で、現在設立認可を受けたるものに、熊本縣製氷工業組合、熊本酒類商業組合、熊本化粧品商業組合等がある。

同業組合

同業者が協力一致して、營業上の弊害を矯正し、營業利益の增進を計るを目的として、組合を組織するに至るは、商工業の發達に伴ふ自然の趨勢で、市內に於ける同業組合は次の通りである。

熊本織物同業組合(春竹町古堂)
肥後米輸出同業組合(鹽屋町裏二ノ三〇)
熊本縣醬油同業組合(大江町九品寺二〇五)
肥後木蠟同業組合(出水町今七四四)
熊本縣製糸業組合(櫻井町三)
熊本縣蠶種業組合(櫻井町三)
熊本麵類同業組合(商工會議所內)
熊本縣肥料同業組合(南千反畑町)
熊本材木商組合(花畑町)
熊本酒類同業組合(商工會議所內)
熊本染物組合(花畑町)
熊本白米商組合(北新坪井町)
熊本洋服商組合(上通町五丁目)
熊本縣藥業組合(商工會議所內)
熊本製帽組合(白川町三三二)
熊本市自轉車業組合(練兵町)
熊本縣清涼飲料水業組合(商工會議所內)
熊本時計商組合(上通町三丁目五)
熊本織物卸商五日會(商工會議所內)
熊本吳服太物商組合(商工會議所內)
熊本履物業組合(南千反畑町)
熊本酒類卸商組合(商工會議所內)
熊本履物卸商組合(萬町二丁目)
熊本化粧品商業組合(西外坪井町)
熊本印刷業組合(古城堀端町)
熊本履物小賣商組合(鍛冶屋町)

熊本裁縫業組合(魚屋町一丁目)
熊本砂糖商組合(魚屋町二丁目)
熊本竹工組合(勸業館內)
熊本鍛業組合(西鍛冶屋崎一二九)
熊本菓友會(新町三丁目)
熊本縣教育會指定商組合(上通町)
熊本電氣商工組合(春日町)
熊本縣ラヂオ商業組合(城見町)
熊本傘業組合(勸業館內)
熊本果實商組合(水道町)
熊本料理屋組合(練兵町五〇)
熊本西洋料理業組合(花畑町)
熊本北部食堂組合(南千反畑町)
二本木貸座敷組合(二本木町)
熊本市質屋組合(楠町五八)
熊本北部理髮業組合(北新坪井町)
熊本下宿屋組合(北千反畑町八六)

熊本縣書籍雜誌商組合(上通町四丁目)
熊本製紙業組合(東寺原町)
熊本莫大小業組合(春日町久末)
熊本菓子業組合(南新坪井町)
新町菓子卸商組合(中職人町)
熊本帽子雜貨商組合(安巳橋通町)
熊本紙文具商組合(南新坪井町)
熊本看板業組合(横紺屋町)
熊本木工業組合(大江町本二一三)
熊本牛肉業組合(西外坪井町)
熊本割烹仕出組合(船場町參ノ一)
熊本料理屋共濟組合(西岸寺町)
熊本市南部食堂組合(細工町一丁目)
熊本煙草小賣商組合(花畑町塩會社二階)
熊本市南部理髮組合(春日町六四二)
熊本理髮業組合聯合會(紺屋今町五六)
熊本寫眞師會(塩屋町裏二番丁)

熊本市旅館組合(商工會議所內)
熊本鮮魚商組合(練兵町三一)
熊本市鹽干魚商組合(塩屋町裏三番丁)
熊本穀物卸商組合(出町)
熊本荒物商組合(河原町二七)
熊本蒲鉾商組合(大江町大江三五)
熊本重要水產加工品組合(勸業館內)
熊本夜市組合(商工會議所內)
本山竹細工組合(本山町)
熊本市桑苗生產販賣同業者組合(市農會內)
熊本市觀賞園藝組合(市農會內)
島崎園藝組合(島崎町島崎)
熊本市東部農產出荷組合(出水町乙丸)
畫圖町共同出荷組合(畫圖町所島)
畫圖湖漁業組合(出水町今)
熊本發動機粃搾業組合(市勸業課內)

熊本浴場組合(本山町小森方)
熊本製靴業組合(花畑町勸業館內)
熊本各種卸商同盟會(商工會議所內)
熊本陶器商組合(下通町)
熊本漆器組合(下通町)
熊本麵類製造販賣組合(商工會議所內)
肥後鄉土玩具振興會(勸業館內)
二本木竹細工組合(二本木旭町)
熊本市養蠶業組合(市勸業課)
熊本市養鷄組合聯合會(勸業課內)
熊本市北部園藝出荷組合(池田町長迫)
花園園藝組合(花園町)
熊本市南部園藝組合(蓮臺寺町)
畫圖養魚組合(畫圖町)
熊本市畜產組合(勸業課內)
熊本文具誠和會(紺屋町一丁目)

農業

熊本縣の農業は、加藤清正公の治水事業と、歴代藩公の農政とにより、耕地到る處に拓け、其産額は全生産額の約六割に相當し、縣經濟に至大の關係を有してゐる。而して、本縣産業の中心たる本市は、大正十年六月附近十一町村、大正十四年出水村、合併編入により農業戸數千四十四戸、田畑面積千二百三十八町歩の耕地を有するに至つた。更に昭和六年六月には、市の南部白坪村一帶を、昭和七年には畵津村を併合して、農業戸數及田畑面積に多大の增加を示し、生産物としては、米、麥等の主要作物及果樹、蔬菜等の園藝作物を産出し、殊に、高等園藝に屬する促成栽培も、近年益々盛んになり、從來は春日地方のみであつたが、現在では、二本木、池田、出水方面に續々栽培されるに至つた。而して、昭和八年調査によると、米收穫高六十三萬二千四百七十五圓、麥收穫高十二萬一千四百四十三圓、果實八萬二千七百五十七圓、蔬菜及花卉十三万五千二百五十三圓に達してゐる。

養蠶業

熊本縣の養蠶發祥の地は、市内櫻井町三番地で、明治二十四年製糸傳習所を設け、後、養蠶傳習所となり、現在は、熊本縣蠶業取締所及び其他の蠶業團体の所在地となつてゐる。猶養蠶製糸の本場としては

大江町元演武場に於て、明治五年長野濟平氏は機械製糸を創業した。又明治三十年頃には長野忠次氏は桑苗の改良に務め、自己の桑園より、永德赤芽魯桑を選出して之が普及を圖つた。而して現在養蠶する地域は出水、大江、池田、花園、島崎、横手、春竹、黑髪、蓮臺寺、畵圖地方で昭和八年に於ける本市養蠶戸數六百十八戸、收繭高二萬五百貫を示すに至つた。

桑苗及蠶種

熊本市に於ける、桑苗の主要産地は、出水町、大江町、春竹町で、生産數量は約三百五十萬本、その内、接木苗八十萬本、實生苗二百七十萬本であるが、縣下桑苗取引の中心地で、集散する本數は五百萬本以上に達してゐる。桑品種としては改良鼠返、赤芽魯桑、白芽魯桑、市平、收穫一等にして、就中改良鼠返種は、本縣の原産であるのみならず、各縣の氣候風土にも適し、最も有望なる品種として、移出數量も亦大である。又赤芽、白芽、魯桑も、本縣の原産にして各地の需用頗る大である。

尙ほ、蠶種は優良品種の生産地で、縣内各郡及縣外に向け、殆んど全部移出してゐる。現在蠶種製造は左の五ヶ所である。

長野製種組、長野忠次(大江町)
熊本縣是蠶種株式會社(水道町)
大熊本蠶種合名會社(出水町)
肥後製糸株式會社蠶種部(内坪井町)
合名會社水前寺蠶種製造所(出水町)

製絲

肥後製絲株式會社（内坪井町）　本社は、明治二十九年三月創立、其の後細川侯爵家の經營に移つたが、大正七年侯爵家に於ては時勢の進運に鑑み、本製絲場を縣下有志に讓渡さるゝに至り、資本金を增加して一百萬圓とし、縣下の諸製絲場を買收、又は併合し、益々事業の發展を圖つた。昭和五年六月に資本金の減資を行ひ、全部拂込濟となし金六十四萬千二百五十圓となり、更に昭和六年一月姉妹會社たる、肥後蠶種株式會社を解散合併、蠶種の製造を行ひ優良品を提供することになつた。分工場として、縣内に益城工場、豊田工場、木葉工場、高瀬工場を有し、大分縣に井田工場を經營してゐる。

熊本製絲株式會社（大江町）　本社の起源は明治六年にあるが、仝三十四年株式會社に改め、逐年其釜數を增加し資本金も亦五拾萬圓に增加した。目下設備釜數四〇四釜にして一ヶ年生絲の生産高一七、六〇〇貫である。而して横濱市場に於ける品位は特優格である。其の他は左の如くである。

島崎製絲場（島崎町）
株式會社肥後蠶絲組（花園町）
郡是製絲株式會社熊本工場（池田町）
合資會社出水製絲所（出水町）
豊野製絲所（東坪井町）
株式會社松岡製絲場春竹工場（春竹町）
株式會社長野製絲場（大江町）
片倉製絲株式會社熊本工場（田崎町）
京町製絲所（京町）

官衙・學校・軍隊都市の熊本

熊本市は、官衙と、學校と、軍隊の一大都市で、從つて、總べての機關完備し、教育都市、官廳都市として誇るべきもの尠くない。主なるものゝ名稱と、所在地は次の通りである。

官公署

第六師團司令部（熊本城内）
歩兵第十一旅團司令部（熊本城内）
歩兵第十三聯隊（大江町）
野砲兵第六聯隊（大江町）
騎兵第六聯隊（仝　）
工兵第六大隊（仝　）
輜重兵第六大隊（古京町）
熊本聯隊區司令部（千葉城内）
熊本憲兵隊本部（熊本城内）
熊本憲兵隊分隊（上林町）
熊本商工會議所（行幸町）
熊本税務監督局（練兵町）
熊本税務署（練兵町）
熊本遞信局（花畑町）
熊本貯金支局（花畑町）
熊本郵便局（船場川端町）
熊本坪井郵便局（南千反畑町）
熊本鐵道郵便局（春日町久末）
熊本營林局（京町本丁）
熊本營林署（京町二丁目）

熊本地方專賣局(行幸町)
熊本區裁判所(京町一丁目)
熊本運輸事務所(春日町)
鐵道省熊本建設事務所(春竹町)
上熊本驛(池田町)
水前寺驛(出水町)
熊本驛(南千反畑町)
熊本縣立二本木病院(二本木町)
熊本南署(春日町)
熊本縣商工奬勵館(南千反畑町)
熊本縣度量衡檢査所(仝)
熊本縣水產試驗場(仝)
熊本縣農事試驗場(出水町)
熊本蠶業取締所(櫻井町)
熊本市役所(千取本町)
市立白川病院(大江町九品寺)
熊本勸業館(花畑町)

熊本地方裁判所(京町一丁目)
熊本刑務所(大江町渡鹿)
熊本保線事務所(春日町)
熊本驛(春日町)
春竹驛(春竹町)
農林省蠶業試驗所熊本支所(市外述軍村)
熊本醫科大學附屬病院(大江町)
熊本北署(南千反畑町)
熊本縣立圖書館(南千反畑町)
熊本穀物檢査所(仝)
熊本測候所(京町二丁目)
熊本縣工業試驗場(春竹町)
熊本縣蠶業試驗場(出水町)
熊本縣農會(南千反畑町)
熊本市農會(市役所內)
熊本市立工業研究所(宮內町)
熊本市職業紹介所(行幸町)

熊本市診療所(行幸町)
熊本中央放送局(花畑町)
日本赤十字社熊本支部(願正寺町)
帝國在鄉軍人會熊本支部(千葉城內)

新聞

九州日日新聞社(上通町)
福岡日日新聞社熊本支局(古川町)
大阪朝日新聞社熊本通信局(水道町)
熊本日日新聞社(淨行寺町)
九州中央新聞社(鍛冶屋町)
九州魁新聞社(出水町)
衞生新聞社(知足寺町)
國鐵時報社(春日町)

諸學校

熊本醫科大學(本莊町)

熊本市公會堂(行幸町)
熊本中央放送局清水放送所(市外清水村)
愛國婦人會熊本支部(願正寺町)
大日本武德會熊本支部(南千反畑町)

九州新聞社(練兵町)
九州日報社熊本支局(櫻井町)
大阪每日新聞社熊本支局(上林町)
九州每夕新聞社(辛島町)
大熊本新聞社(光琳寺町)
熊本每夕新聞社(鹽屋町)
九州酒醬油新聞社(鹽屋町)
日本電報通信社熊本支局(行幸町)

第五高等學校(黑髮町)

熊本高等工業學校(黑髮町)
熊本縣師範學校(京町本丁)
中學濟々黌(黑髮町)
熊本工業學校(大江町)
熊本商業學校(出水町)
第一高等女學校(藪ノ內町)
市立商工學校(新町一丁目)
九州學院(大江町)
尙絅高等女學校(仝)
九州女學院(市外清水村)
九州中央高等女學校(內坪井町)
熊本盲啞學校(出水町)
上林女子商業學校(上林町)
女子職業學校(大江町)
錦城學館(黑髮町)
啓成學館(大江町)
鎭西高等簿記學校(被分町)

熊本藥學專問學校(大江町)
熊本縣女子師範學校(內坪井町)
熊本中學校(大江町)
熊本農業學校(出水町)
熊本陸軍教導學校(熊本城內)
第二高等女學校(內坪井町)
市立高等女學校(北坪井町)
鎭西中學校(大江町)
東亞鐵道學校(本莊町)
大江高等女學校(大江町)
九州立正女子高等學院(大江町)
上林高等女學校(上林町)
修齊實業女學校(千反町)
熊本國學院(千反畑町)
九州高等簿記學校(井川淵町)
熊本英語專修學校(千反畑町)
有勅裁縫女學校(新町)

精華專修學校(新坪井町)
熊本美髮學校(藥園町)

小學校

熊本高等小學校(京町)
碩臺尋常高等小學校(東子飼町)
城東尋常高等小學校(手取本町)
一新尋常高等小學校(新馬借町)
向山尋常高等小學校(本山町)
大江尋常小學校(大江町)
春竹尋常小學校(春竹町)
春日尋常高等小學校(春日町)
花園尋常高等小學校(花園町)
出水尋常小學校(出水町)
砂取尋常高等小學校(砂取町)

熊本產婆學校(本莊町)
九州自動車學校(出水町)

壺川尋常小學校(內坪井町)
白川尋常小學校(新屋敷町)
慶德尋常高等小學校(山崎町)
五福尋常小學校(細工町)
黑髮尋常小學校(黑髮町)
本莊尋常小學校(本莊町)
古町尋常小學校(二本木町)
島崎尋常高等小學校(島崎町)
池田尋常高等小學校(池田町)
白坪尋常小學校(蓮臺寺町)
畫圖尋常高等小學校(畫圖町)

補習學校

高工專修學校（手取本町）
花園實業補習學校（花園町）
池田實業補習學校（池田町）

幼稚園

向山幼稚園（本山町）
五福幼稚園（魚屋町）
千葉城幼稚園（千葉城町）
熊本幼稚園（山崎町）
みどり幼稚園（新屋敷町）
出水實業補習學校（出水町）
畫圖實業補習學校（畫圖町）
一新幼稚園（新町）
碩臺幼稚園（南千反畑町）
古町幼稚園（二本木町）
王榮幼稚園（大江町）

附錄

市内遊覽コース

市内の遊覽には二、三日を要するが、前途を急ぐ人のためには、左記の順序が好適であらう。

半日の遊覽 熊本驛——熊本驛

熊本驛——本妙寺——藤崎八旛宮・吉田司家——水前寺公園・動物園——加藤神社——熊本城——新市街——東雲庭園——熊本驛

上熊本驛下車ならば本妙寺より始めて、前記のコースを取ればよく、水前寺驛下車ならば、水前寺公園より、藤崎八旛宮、本妙寺、加藤神社の順により、後は前記のコースに從へばよい。

一日の遊覽 熊本驛——熊本驛

熊本驛——花岡山——清正公母堂の廟——本妙寺——藤崎八旛宮・吉田司家〈又は八景水谷——立田山武藏塚〉——櫻山祠堂——水前寺公園・動物園——畫圖湖——加藤神社——熊本城——新市街——東雲庭園——熊本驛

尙以上の順路を變更して北岡神社、代繼神社等に參拜するもよく、又更に一日を費して金峯山、成道

寺、天福寺等を探勝するもよい。

熊本の土産品

熊本名産の主なるものを擧ぐれば、鄕土玩具に、木の葉猿、お化の金太、お金孃人形、獅子頭、はじき猿、雉子車、挽物玩具など、菓子では、朝鮮飴、柿球肥、柿飴、檜垣飴、ばってん飴、火の國飴、加勢以多、薯蕷仁糖、火山おこし、清正煎餅、一味寒菊、白銀糖、肥後瓦、黑菓子、蘇雪、カステーラ、文旦漬、水産加工品としては、鯛の花、水前寺苔、天草雲丹、加佳味燒、清凉飲料水としては、セービス、果實蜜、陶磁器に水平燒、高田燒、肥後塗漆器、錫器、麵類に素麵、葛素麵、干蕎麥、赤酒・清酒球磨燒酎、醬油、其他吉田毒消丸、肥後象嵌、肥後洗粉、來民團扇、肥後駒下駄、竹細工、玉蜀黍細工肥後茶、干筍、肥後ずゐき、熊本名所タオル等がある。

娯樂機關

◇劇場――熊本人の演藝に就ての鑑賞眼は頗る高く、田舍廻りの俳優の興業では滿足しない。劇場は大和座、旭座、東雲劇場、坪井座、東榮座などがある。

◇活動寫眞――熊本市は軍人、學生の多いため、活動寫眞は、何れも盛況を呈し、常設館として、朝日

館、電氣館、世界館がある。

旅館宿泊料

本市の旅館は、特等、壹等、貳等、參等、四等の五級に分れ、普通宿泊料は次の通りである。なほ晝食料は宿泊料の半額である。

旅館等級 ／ 宿泊料等級	特等	壹等	貳等	參等	四等
一等	六、〇〇円	四、〇〇円	二、〇〇円	二、〇〇円	二、〇〇円
二等	五、〇〇	三、五〇	二、五〇	二、〇〇	一、五〇
三等	三、五〇	三、〇〇	二、〇〇	一、五〇	一、〇〇

團体宿泊料

團体宿泊料は、特等二圓以上、壹等一圓七十錢以上、貳等一圓三十錢以上、參四等一圓二十錢以下である。但し學生團體は、小學生徒七十錢、高等小學生徒九十錢、中等學校生徒一圓三十錢である。

觀覽時間及料金

宇土櫓　四月から十月までは午前八時より午後五時まで、十一月より、三月までは、午前九時より午後四時まで、料金は一人につき大人(十二歳以上)十錢、小人(十二歳未滿)五錢、制服の下士卒、傷痍記章佩用の傷痍軍人は五錢で、團体に對しては夫々割引がある。

加藤神社　毎日午前九時より午後五時まで、一人につき五錢、但し教育者、生徒等の團体に對しては、時宜により半額に割引がある。

本妙寺　本妙寺寶物館は六月より十月迄は午前七時より午後六時迄、十一月より五月までは午前八時より午後五時迄、料金は一人に付十錢、團体に對しては半額、小學生百人以上は三錢に割引がある。

東雲庭園　時間の制限はない．一人に付十五錢、但し百人以上の場合は割引がある。

動物園　一月、二月、十一月、十二月は午前九時より午後四時迄、三、四、九、十は午前八時半より午後五時まで、五、六、七、八月は午前八時より午後六時まで(七、八月頃は特に午後十時まで開園)料金は大人(十二歳以上)十五錢、小人(十二歳未滿)八錢で、現役軍人下士卒は十二錢、二十人以上の普通團体は十二錢、中等學校及高等小學校生徒は十錢、尋常小學校生徒は五錢に割引がある。

電車、バス、タクシーの料金

市營電車

(三十人以上の團体は割引)

路線	區界停留所	料金	運轉時間
熊本驛前—子飼橋間	熊本驛前、吳服町、辛島町、水道町、淨行寺町、子飼町	二區	初發 熊本驛前—子飼橋 午前五時十分 終發 熊本驛前—子飼橋 午前〇時
水道町—寺前間	水道町、味噌天神前、水前寺	迄區以上	初發 水前寺 午前五時 終發 水前寺 午前〇時
上熊本驛前—春竹驛前間	上熊本驛前、島崎町、新細工町、辛島町、本莊町、春竹驛前	五錢	初發 上熊本驛前—春竹驛前 午前五時四十分 終發 上熊本驛前—春竹驛前 午前〇時

市營バス

路線	區界停留所	料金	運轉時間
上熊本驛前—建軍神社前間	上熊本驛前、京町本町、坪井横町、白川町、味噌天神前、水前寺、建軍神社前	二區	初發 上熊本驛前 午前七時二十分 終發 上熊本驛前 午後九時四十五分
上熊本驛前—龍田口驛前間	上熊本驛前、京町本町、淨行寺町、五高前、字留毛、龍田口驛前	迄區以上	初發 龍田口驛前 午前七時 終發 上熊本驛前 午後九時四十五分
花畑町—池田町間	花畑町、師團司令部前、京町本町、池田町	五錢	初發 花畑町—池田町 午前六時三十分 終發 花畑町—池田町 午前〇時
		八錢	

市内遊覽自動車

（十五名以上）女車掌説明付

遊覽コース	所要時間	料金 學生團体	料金 一般團体	料金 割引ゼざる料金	輸送力
第一號 熊本驛發＝藤崎臺＝熊本城＝加藤神社＝本妙寺＝藤崎宮＝水前寺＝博覽會場又は驛若くは宿へ	自四時間至五時間	六拾錢	七拾錢	壹圓	三七五人迄
第二號 熊本驛＝熊本城＝加藤神社＝本妙寺＝水前寺＝驛若くは宿（逆コースも同樣）	自三時間至四時間	五拾錢 水前寺打切の場合は四拾五錢	六拾錢 水前寺打切の場合は五拾錢	八拾五錢	三七五人迄
第三號 熊本驛＝熊本城＝本妙寺＝水前寺＝驛若しくは宿（二回に分割輸送す）	自三時間半至四時間		四拾錢 水前寺打切の場合は參拾五錢		七五〇人迄

第二號第三號の始發は上熊本、水前寺驛の場合も同樣とす。

熊本阿蘇間遊覽自動車

○熊本驛——武藏塚——阿蘇登山——熊本驛　料金一輛（十四人乘）＝付二十八圓

○熊本驛——阿蘇登山——戸下又は栃木溫泉——熊本驛　料金一輛（十四人乘）＝付三十圓

○熊本驛——武藏塚——阿蘇登山——阿蘇神社——宮地驛　料金一輛（十四人乘）＝付二十八圓

タクシー

市内は片道一回五十錢、一時間二圓とす。但し遊覽の場合は概ね左記による。

○熊本驛——本妙寺——加藤神社——熊本城——水前寺——驛又は旅館　料金一輛（五人乘）に付四　圓

○熊本驛——東雲庭園——花岡山——本妙寺——加藤神社——熊本城——水前寺——驛又ハ旅館　料金一輛（五人乘）＝付五圓五十錢

○熊本驛——武藏塚——阿蘇登山——熊本驛　料金一輛（五人乘）＝付十　五　圓

○熊本驛——阿蘇登山——戸下溫泉又ハ栃木溫泉　料金一輛（五人乘）＝付十　八　圓

○熊本驛——武藏塚——阿蘇登山——阿蘇神社——宮地驛　料金一輛（五人乘）＝付十　五　圓

民謡

火の國小唄

一

沖の不知火流れて消えてヨ　月の有明夜が白む
男女の住むところ　ホンニヨカ〳〵ヨカバイのバイ　こゝは火の國火のよに燃える

二

櫻吹雪は天まで染めるヨ　森の都の城の上
虹も田に敷く畠に敷く　ホンニヨカ〳〵ヨカバイのバイ　五十四萬石穂にさく國は

三

並ぶカフエのあの窓、窓がヨ　閉まりやカフエーに灯がともる
月は微笑む新市街　ホンニヨカ〳〵ヨカバイのバイ　ジヤズで踊ろとシネマで泣こと

四

山のエー・ワン大阿蘇はヨ　草の千里に火の柱
行けば龍膽の花が散る　ホンニヨカ〳〵ヨカバイのバイ　バスのサイレン怖ぢるな黒馬よ

五

球磨の川波や男の意氣地ヨ　岩に碎けよと厭やせぬ
空に嘯け槍倒し　ホンニヨカ〳〵ヨカバイのバイ　まゝよ船頭衆に預けた命

六

戀の天草裸になろとヨ　戻りや情が身にしみる
濡れた眼もとが目に殘る　ホンニヨカ〳〵ヨカバイのバイ　雨か狹霧か出船の朝の

五十四萬石

一　五十四萬石　細川さまは　大名中の大々名　肥後でば　熊本清正公さまは　丸い蛇の目の　紋どころ
二　俄雨でさへ　御紋の下は　蛇の目の　傘ぬれはせぬ　お城は　石垣　七重に八重に　濠は深濠　武者返し
三　今日は東雲の　言づけ便り　夜晝にぎはふ　街と街　軒並照らすは　ネオンの光り　目さへ　まばゆい　新市街
四　無理は言はねど　後へはひかぬ　熊本　生れは　氣も強い　神風連やら　また田原坂　城に　輝く　字土櫓

田原坂

一　雨は降る〳〵人馬はぬれて　越すに越されぬ田原坂　二　右手に血刀左手に生ま首　馬上ゆたかに美少年
三　泣くな我が妻勇めよ男子等　戰地に立つは今なるぞ　四　山に屍川に血流る　肥薩の天地秋悲し
五　草なしとれに夢や何處　明けの御空に日の御旗

おてもやん

◇

オテモやん　あんた此頃嫁入りしたではないかいな　嫁入したこつアしたバッテン　御亭主(ごてさん)が　菊石(ぐじやつぺ)じやるけん　まアだ盃アせんだつた　村役(むらやく)鳶役肝(とびきも)入どん　あん人達の居らすけんで　あとはどうなつときやア成ろたい　川端町つあんきやアめぐらい　春日南瓜どん逢ア臀ひつぱつて　花盛り〳〵(ハヤシ)チーツク〳〵雲雀の子ゲンパク茄子のイガ〳〵ドン

◇

一つ山越へ　も一つ山越へ　あの山越へて　私アあんたに惚とるばい　惚れとるバッテン云はれんたい　追々彼岸も近まれば　若かもん衆も寄らすけん　熊本のヨジヨモン詣りに　ゆる〳〵話もきやアしうたい　男振には惚れんばな煙草入の銀金具がそれが因縁たい(ハヤシ)アカチヤカ　ペッチヤカ　チヤカ〳〵チヤ

キンキラキン

一　肥後の刀の下緒(さげを)の長さ長さバイ　ソラ　キンキラキン
　　まさかちがゑば玉たすき　ソレモソウカイキンキラキン
　　キンキラキンノガネマサドン　ガネマサドンなヨコバイ〳〵
一　肥後の熊本キンキラキンな御法度御法度バイ　ソラ　キンキラキン
　　キンキラキン唄へば首が無い　ソレモソウカイキンキラキン
　　キンキラキンノガネマサドン　ガネマサドンなヨカバイ〳〵

東雲節

一　祇園山から二本木見れば　自由廢業で何としよ
　　かれは中島いへ茂七　東雲のあけのかねゴーンとつきやつらひれー
　　てなこたおつしやいましたかネー
一　自由廢業で廓は出たが　これから何としよう
　　行き場ないので屠拾ひ　東雲のストライキさりとはつらいネ
　　てなこたおつしやいましたかネー

峯映之助作

新興熊本博覽會々歌

一

伸びる熊本　朝日は昇る　心はれやか　自由の天地
　　飾る人智の　繪卷物(えまきもの)　おゝ絢爛(けんらん)　新興熊本博覽會

二

叫ぶ更生　心はなどる　意氣は朗らか　理想の都
　　春よ爛漫(らんまん)　花の雲　おゝ明朗　新興熊本博覽會

三

仰ぐ大阿蘇　煙はまれく　風はさはやか　銀杏城下　若葉の楠　鯉のぼり　おゝ潑剌　新興熊本博覽會

四

擧れ熊本　文化は進む　空はうらゝか　平和の樂土　集ふ歡喜の　人の波　おゝ躍進　新興熊本博覽會

新興熊本小唄

中村露子作

一

咲いた咲いた咲いた花咲さそろた　森の都は、霞の中にサ　ハイノハイノハイ浮いてお城の　裾模樣　ヤレ裾模樣

（ハヤシ）　アリヤ　伸びる熊本、新興博は　一目千兩の玉手箱　ヤレ玉手箱　ハツトンセ

二

くるりくるりと繪日傘日傘　水に映して春風吹けばサ　ハイノハイノハイはねる緋鯉の水前寺　ヤレ水前寺

（ハヤシ）　アリヤ　伸びる熊本、新興博は　一目千兩の玉手箱　ヤレ玉手箱　ハツトンセ

三

ちらりちらりと蛇の目の御紋　法の大鼓と法華經の聲にサ　ハイノハイノハイ百度まゐりの本妙寺　ヤレ本妙寺

（ハヤシ）　アリヤ　伸びる熊本、新興博は　一目千兩の玉手箱　ヤレ玉手箱　ハツトンセ

四

浮いて水藻の花さく畫圖湖　阿蘇に夜あけて金峰に暮れりやサ　ハイノハイノハイ月がのぞいた波枕　ヤレ波枕

（ハヤシ）　アリヤ　伸びる熊本、新興博は　一目千兩の玉手箱　ヤレ玉手箱　ハツトンセ

五

上る上るよ天まで上る　阿蘇の火柱、新興都市のサ　ハイノハイノハイ負けちやならない心意氣　ヤレ心意氣

（ハヤシ）　アリヤ　伸びる熊本、新興博は　一目千兩の玉手箱　ヤレ玉手箱　ハツトンセ

肥後鄉句抄

鐘ごうん不性無性に散る櫻　思月
神の松脇息イ成る大華表　素仙
梅の花傘地藏も德な立ち所　茂り
俺りが居るなら惜しい醉狂だつたない　奇妙
雪隱義太夫武智光秀力み出し　萬作狸
よろ〳〵〳〵先祖着て見る上用干　北岳
世は呪ひ三遍舞ふて出る嫁入　不存
てんば禿百萬石イ嘘させ　岩水
手足が八本御免なはりの後すざり　滴水
大騷動鷺の摑うだ生き辨太　思友
大白雨火山の煙どたまわせ　一六

雪の肌まちつと川の深うなれ　仙柳
時も時謠ひこそぐる嫁子の屁　孤洞
踊る松御所のお庭も憚らず　霞山
なあ尼さん四戒守つてきア御座り　澤畔
暮れ近し野施行の米研ぎ急ぎ　大坂
嘘踊り花見こそぐる闘ひ拔け　西洲
幾千代もあとは女蝶の口籠り　柏笑
子子の分別したり踊つたり　短枝
破れ寺月日に釋迦の御對面　名物
野雪隱手洗うて行く草の露　海月
眞つ暗すみ只五月雨の音ばかり　林月

寄せ太鼓一匹逃がす螢賣り　啞雷
身は川竹親看病も筆の先き　如露
後とすざり未アだ鼾の新らしい　潤水
からくり家佛も負債からうとる　渡舟
隅から隅地雨降らする年增酌　月香
夢中になつて止め人に瘤打出させ　米舍
國の光り纒父さんに添はん民　翠岳
大颱風洗濯兵子の登り龍　○福
能えとこる海抱アて山からうとる　筑生
居待月湯玉吹かする四壘半　蘇川
青葉若葉出所見せん岩清水　桐壺
鐵漿剝アで瘠癪御亭急き込ませ　梅史
新位牌蓮の國から手曳かれて　玉藻
後家火箸五寸釘と馴染うどる　甲花
三日坊主ませ竹ェなる友の無ア　福笑
無理ア無ア貧の盜みィ寄る情　洗月
聞こえん振りとう〳〵無心悔みやり　玉泉

横う曲り漏りすけ縫うて寢入つとる　桃雲
大困難兎唇がクドの焚付かん　皎月
大外がま大蛇の口イひつ懸かり　夕川
早ア奴俺より先イ振られとる　多賀
又おいでまあだ鳥毛の殘つとる　虎眼
ちんば机分別し居る硯石　芙蓉
邪見婆々出てうせんごつ深う掘れ　琴月
總攻擊尼ア成るてち泣き出アた　喜月
高木履法螺貝の餞敷れ居る　梅月
笑ひもされず炬燵の姿が左り胸　月江
苦しさ〳〵攻め寄せて來る餅の音　富永
もう言ふな額イ付イた疊の目　鬼笑
夜の明けて海イ千鳥の豆絞り　樂天
焚割つて嬶が縹緻に用の出來　一葉
大馬鹿者居らすばなちう師走嬶　一市
嫌な客霜やけちうて揚がらした　榮金
責任問題借つたお酌の無うなつた　五庵

連れられて汚れ一票入れて行く　松月
本卦返り笑ひ中風の晴れしとる　右兵衛
おつ取り嫁子々々の先イ走らした　竹庵
桃色遊戯情痴の波イうんぶくれ　吳口
趣味の友命洗うて加勢する　午勝
握り飯繼母さんの味のする　呂平
仕舞アもん總よ達者で無アゴマメ　亂蝶

五衛門風呂立てば毛虫のきア浮かる　七瀧
押すな〳〵慾の集まる枕もと　白道
泌々と言ふて聞かする初奉公　鬼申
見て見ん振り隣の嬶はよその嫗　一八九
もぎでえ奴蒲鉾板ば位牌イして　一樂
穴ぐりえぐりやうよ見付けた痔の神さん　千花
わつはつは會うて話せばそぎやんこつ　笑波

熊本なまり

こぎやん（コンナニ）　あぎやん（アンナニ）　そぎやん（ソンナニ）
いつちよ（一つ又は始めの体）　いさぎゆう（甚しく、潔の轉？）　うろたへる（狼狽す）
うまか（旨い）　うつたつ（支度する、めかす）　おろよか（悪い、おろとは小さいの義）
ぜいたん（ドブ）　たつた（紙蔦）　つかまへる（捕へる）
と　ん　と（全く、さつぱり）　れ　（はいの丁寧なもの、下々が使う）　はいりよう（拜領、いたゞく）
ばつてん（けれども）　ひけたこまつた　又ハはいよ（晩酌、酣前？）
がまだす（働く）　しもうたしまつた　かんまへ（晩酌、酣前？）
すぼる（けむい）　せからしか（うるさい）　ぐつさりん（何れも澤山）
せばかく（混雜する）

ふとか（太い）　べーろ（舌）　むぞらしか（可愛らし）
むぞうなげ（可哀そう）　もてん（堪えきれぬ）　やつば（やはり）
よか（よろしい、美良）　なんぎやる（投げやる）　たかしやあぼう（長い棒）
たかぼくり（高下駄）　ながしやあぼう

強め言葉が澤山ある、これ等は意味はない、頭につけてあとは大概の動詞でも意味が通ずる。

きやあくされた　いちなろたい　ひんなめた　つんまげた
うち食うた　さてこけた　一ちよういこう

くまもと（終り）

鐵道省指定熊本代表名物
縣外への御土產には
鄉土味豐かなる
登錄商標
彦しやん
あんぢ
おてもん
本舗
菓子
ヒサヤ
上通町・電一八七八番

關西第一・新興熊本名所

熊本が誇る大衆大食堂

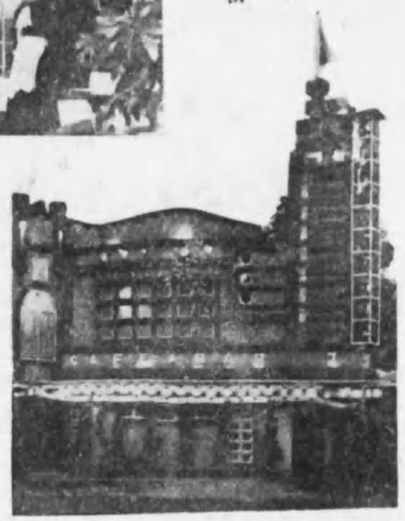
新市街記念碑前

カフェー・ユリア

電話二〇三七番

パレス

電話四一三六・四一三七番



階上和室

すき焼と御料理

あなたのユリア、吾等がユリア ユリア・ユリア・ユリアは森都のカフェーの王座

熊本新名所

梅園別荘 烹割

道御案内

春竹驛前市電

春竹終點ヨリ

右へ一丁琴平

神社ノ本通リ

電話

帳場用 一、二一〇番

御客様用 一、七四八番

新市街

梅園本店

電話一、一九〇番

新市街電車通辛島町

梅家旅館

電話二四六番

九州から阪神への近道

瀬戸内海の船旅

瀬戸内海の
女王

にしき丸
すみれ丸
みどり丸
くれなゐ丸
むらさき丸

別府

阪神

九州主要驛に於て別府航路により本州主要驛に至る便利な船車連絡切符を發賣して居ります

大阪商船

紹介先

別府支店　鹿兒島支店

博多・小倉・久留米・佐賀・崎長・熊本・大分の各代理店

九州を中心として見たる
大阪商船の活躍

今や、所有船舶の總屯數六十萬屯に垂んとし、航權世界に普き大阪商船が、五十年前の創立當初、第一本線と稱して營業を開始したのは、實に大阪から九州の百貫石に到る所謂大阪百貫線であつた。かく創業當時から、九州地方と大阪商船との關係は、唇齒密接なるものあり、今日大阪商船の九州と關聯を持つ航路十余線に及んでゐる。即ち

遠洋航路　阿弗利加航路南米延長線(門司)、紐育急行線(門司)、濠州線(門司)、孟買線(門司、崎戸)、甲谷陀線(門司、崎戸)、南洋線(門司)、比律賓線(門司、長崎)

近海航路　大連線(門司)、天津線(門司)、横濱天津線(門司)、東京北鮮線(門司)、大阪北鮮線(門司)、大阪清津線(門司)、東京安東線(門司)、東京仁川線(門司)、大阪安東線(門司)、大阪仁川線(門司)、大阪釜山馬山線(門司)

內海航路　別府線(別府)、大阪大分線(大分、別府)、大阪若松線(門司、若松)、大阪山陽線(門司)

大阪鹿兒島線(波見、細島、福島、鹿兒島)

廣島別府線(別府、大分)　——(括弧の中は始發港又は寄港地を示す)——

此の外、遠洋近海內海各航路を通じて、臨時船が何れも門司その他に寄港してゐるから、大阪商船營業航路の九十パアセントは九州に關聯を持つてゐるのである。

資本金貳千五百七拾五萬圓

熊本電氣株式會社

取締役社長　上田萬平
常務取締役　上妻博
常任監査役　中津熊太郎

本社　熊本市紺屋今町
代表電話　三一五〇番

寶酒造株式會社代理店
大日本麥酒株式會社特約店
株式會社近藤利兵衛商店特約店
松竹梅酒造株式會社特約店
長部文次郎本店特約店
南薫酒造株式會社特約店

發賣元　株式會社

阿部商店

熊本市妙体寺町（淨行寺町通）
電話　五六四番　一、九六七番
振替　熊本　五六四番
振替　福岡　一四、四九九番
熊本坪井郵便局私書函第六號

新興キネマ映畫並ニ
海外パ社メトロ優秀
映畫封切場

熊本市花畑町

活動
常設 **朝日館**

營業用 電話一、四〇二番
自宅用 電話一、四三三番

天下の銘酒

優等清酒

コールド美少年

美少年の花見酒

銘酒美少年は、熊本縣における、最古最大の南薫酒造會社の特別吟醸酒にして、

全國的名聲と、西部日本に於て、壓倒的勢力を有して居ます。

熊本縣隈庄町

南薫酒造株式會社吟醸

觀光の皆様

すべてに現代的な、そして、すべてに堂々時代的躍進の先驅をなしつゝある當社は、次の如き計畫を以て、觀光の皆様に接したいと思ひます。

コールド美少年（三デシ入り）

瓢箪入美少年（二合入り）

右の二種を發賣し、

コールド美少年は、各種の冷用酒を斷然凌ぐ逸品にして、觀光のお疲れを慰めるのに、最適かと存じます。

瓢箪入美少年は、本社が美術的に調製せしめたる、陶器製の瓢箪型の容器に、極吟醸の銘酒を詰めたものでありまして、觀光の御携帶に御使用になれば、手輕で且つ雅趣に富みて面白く、又御土産と致しましても、好適かと存じます。

（販賣店）市内主なる酒店、熊本市勸業館
新興博覽會各食堂